085916-000-4

98-111

校註拾遺和歌集

落合 直文

増田 于信／校注

M38

DBD-0499

開題

拾遺集は、一條天皇長德中、花山法皇自ら撰び給へり、春、夏、秋、冬、賀、別、物名、雜、神祇、戀、雜春、雜秋、雜賀、雜戀、哀傷の廿五に部類し、凡て二十卷とす、古今、後撰二集に、撰び遺したるを、拾ひ集める意にて、かくは名つけたり、法皇一人の御すさびなれば、あるは萬葉集を讀み誤り、作者を取り違ひ、或は前集と重複せるふしなきにあらず、其後藤原公任、拾遺集を抄出して、十卷となし、拾遺抄と名づく、この書いたく世に持て囃されて、古集はいつしか世に隱れければ、この後の撰集、詞花金葉は、何れも十卷に撰ばれたり、然るに後また古集を取出して、新抄を斥くることになりければ、惡しき本ども出て來て、今本の亂がはしき節は、蓋この頃より打混りたるにて、法皇御撰の折には、かくも

明治 38 5 2 内交

なかりしにやあらむ、一説に、公任の、朝まだき嵐の山の寒ければ、散るもみぢばを着ぬ人ぞなき、といふ歌を、花山法皇、紅葉の錦きぬ人ぞなき、と撰び直されしを、公任その意に充たずして、更に抄を作りて、原作に復したるを、時の人、集をさしおきて、抄をもてなし、藤原通俊、後拾遺集を撰ぶにも、集には紹かずして、抄に繼ぎて、後拾遺抄と題せり、かくて其後世には久しく抄をのみ賞翫せしを、藤原定家、獨り抄を捨て、集を取りて、この由を後鳥羽上皇に申したるに、上皇も亦これに同意し給ひければ、集やがてまた世に用ゐらるゝことになりし由、井蛙抄に見えたり、世に、古今、後撰、拾遺の三集を併せ稱して、三代集といふ、

中宮の賀○中宮は照宣公基經の女穏子にて醍醐天皇の中宮なり賀は年賀なり
紀文幹○參議淑光の子なり作者部類に信濃守とあり五位の部に收めたり
山邊赤人○山邊は山部の誤なり顯宗天皇元年粂部小楯始めて姓山部連を賜はり天武天皇十三年改めて宿禰姓を賜はり赤人は其裔なり柿本人麿と

拾遺和歌集巻第一

落合直文
増田于信　校註

春

平さだふんが家歌合によみ侍りける　壬生忠岑

春立といふはかりにや三吉野の山も霞みて今朝はみゆらん

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風のうた　紀文幹

春霞たてるをみれはあら玉のとしは山よりこゆるなりけり

かすみをよみ侍りける　山邊赤人

昨日こそ年はくれしか春かすみかすかの山にはや立にけり

冷泉院、東宮におはしましける時、歌たてまつれ、とおほせられけれは　源重之

吉野山みねのしら雪いつきえて今朝は霞のたちかはるらん

延喜御時、月次御屏風に　素性法師

名を齊しく稱して山柿といへり赤人古今集にも見えたり
源重之○淸和天皇の皇子貞元親王の孫にして侍從源兼信の子なりしに伯父参議兼忠の養子となり天延三年左馬助に任ぜられ長保中奥州の任にありて卒りぬ家集一巻あり群書類從の中に收めたり
源順○後撰集に見えたり
平祐擧○越前守保衛の子にして駿河守に任じ太皇大后宮大進を兼ねたり
中納言朝忠○三條右大臣定方の子なり後撰集に見えたり
大伴家持○大納言安麻呂の孫大納言旅人の子なり
柿本人丸○古今集に見えたり
天應元年氷上川繼の事に座せられ官を奪はれ後免されて東宮大夫鎭守府將

あら玉のとしたちかへるあしたよりまたるゝ物は鶯のこゑ

天暦御時歌合に　源　順

氷たにとまらぬはるのたにかせにまたうちとけぬ鶯のこゑ

題しらす　平　祐擧

春たちてあしたの原の雪みれはまたふる年の心ちこそすれ

さたふみか家歌合に　みつね

春たちて猶ふる雪は梅の花さくほともなく散るかとそみる

題しらす　よみ人しらす

わか宿の梅にならびてみよし野の山の雪をも花とこそみれ

天暦十年三月廿九日内裏歌合に　中納言朝忠

鶯のこゑなかりせは雪きえぬやまさといかて春をしらまし

うくひすをよみ侍りける　大伴家持

うちきらし雪はふりつゝしかすかにわか家の園に鶯そなく

題しらす　柿本人丸

梅の花それともみえす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

延喜御時宣旨にてたてまつれる歌の中に　つらゆき

軍に任ぜられ中納言に拜し尋て薨りぬ時に皇太子早良親王の事に座し名籍を削られたるに後伴善男の奏により三位に復せらる萬葉集は此卿の撰ふ所なり
平兼盛○光孝天皇の三世太宰少貳篤行の子なり康保三年從五位上に叙せられ天元二年駿河守に任ぜらる正暦元年十二月卒りぬ天德歌合に壬生忠見と番ひて勝負を挑める名高き物語おり其歌此集戀の部に收めたり
齊院○宇多多皇の皇女君子内親王なり御母は橘義子賀茂齊院となり延喜二年八月八日薨りぬ
もゝその○拾芥抄に桃園一條北大宮西世尊寺南とあり
片岡のあしたの原○片岡朝原ともに大和國なり
恒佐右大臣○閑院

梅か枝に降かゝりてぞ白雪の花のたよりにをらるへらなる

同御時屏風に　みつね

ふる雪に色はまかひぬ梅の花香にこそにたる物なかりけれ

冷泉院御屏風の繪に梅の花ある家にまらうときたる所　平　兼盛

我かやどの梅の立枝やみえつらむ思ひのほかに君かきませる

齋院御屏風に　みつね

香をとめて誰をらさらむ梅の花あやなし霞たちなかくしそ

もゝそのにすみ侍りける前齋院屏風に　つらゆき

白妙のいもか衣にむめのはな色をも香をもわきそかねつる

題しらす　人丸

あすからは若菜つまむと片岡のあしたのはらはけふそやくめる

恒佐右大臣の家の屏風に　貫之

野邊みれは若菜つみけりむへしこそ垣根の草も春めきにけれ

わかなを御覽して　圓融院御製

春日野におほくの年はつみつれと老せぬ物は若菜なりけり

の左大臣冬嗣の孫左大臣良世の子にして右大臣右大將となり天慶元年五月薨りぬ土御門大臣と號す
圓融院○六十四代圓融院天皇御諱は守平村上天皇の第五皇子御母は皇后安子右大臣師輔の女なり安和二年八月御年十一にて踐祚在位十五年御讓位の後正暦二年二月十五日御年三十三にて崩り給ひぬ
おほきさいの宮○皇太后宮稱子と申すなるへし
五葉は五葉の松なり
入道式部卿のみこ○敦實親王なり宇多天皇の第七の皇子にして御母は藤原胤子はしめ三品に叙し中務卿に任し式部卿に遷り一品に進み天暦四年落飾して覺眞と稱し仁和寺に住せらる康保四年御年七十五にして薨りぬ
大中臣能宣○祭主

題しらす　大伴家持
春の野にあさる雉子の妻こひに己かありかを人にしれつゝ
おほきさいの宮に宮内といふ人のわらはなりける時たいこのみかとのおまへにさふらひけるほとに、おまへなる五葉に鶯のなきけれは、正月はつねのひつかふまつりける
松のうへになく鶯のこゑをこそ初音の日とはいふへかりける
題しらす　たゝみね
子の日する野邊に小松のなかりせは千世のためしに何を引まし
入道式部卿のみこの子日に侍りける所に
大中臣能宣
ち歳まてかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへん
延喜御時、御屛風に、水のほとりに梅花見たる所
つらゆき
梅花またちらねとも行水のそこにうつれる影そみえける
題しらす　よみ人しらす
つみたむることのかたきは鶯の聲する野への若菜なりけり
梅花よそなからみむ吾妹子か咎むはかりの香にもこそしめ

輔基の子なり後撰集に見えたり
兵部卿元良親王○陽成天皇第一の皇子御母は主殿頭道長の女なり三品兵部卿となり天慶六年七月二十六日御年五十四にて薨り給ひぬ

袖たれていさわかそのに鶯の木つたひちらす梅の花みん
兵部卿元良親王
朝またきおきてそみつる梅花夜のまの風のうしろめたさに
みつね
ふく風をなにいとひけむ梅花ちりくる時そ香はまさりける
大中臣能宣
匂ひをはかせにそふとも梅の花色さへあやなあたにちらすな
よみ人しらす
ともすれは風のよるにそ青柳の糸は中々亂れそめける
屛風に
大中臣能宣
ちかくてそ色もまされる青柳の糸はよりてそみるへかりける
題しらす
凡河内躬恒
青柳のはなたのいとをよりあはせてたへすもなくか鶯の聲
よみ人しらす
花みにはむれてゆけとも青柳の糸のもとにはくる人もなし
子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこもりて
中務

菅家萬葉集○本名を新撰萬葉集といふ寛平四年九月菅原道眞の撰なり歌は毎首眞字にて書き左に七言絶句をそへたり
麗景殿女御中將更衣
藤原千景○千景異本に千蔭ともあり

さけはちるさかねは戀し山櫻おもひたえせぬ花のうへかな

題しらす

吉野山たえす霞のたなひくは人にしられぬ花やさくらん

天暦九年内裏歌合に　よみひとしらす

さきさかすよそにてもみむ山櫻みねの白雲たちなかくしそ

題しらす

吹風にあらそひかねて足曳の山のさくらはほころひにけり

菅家万葉集の中

淺みとり野への霞はつゝめともこほれて匂ふ花さくらかな

題しらす　よみ人しらす

芳野山きえせぬ雪と見えつるはみねつゝきさく櫻なりけり

天暦御時麗景殿女御と中將更衣と歌合し侍りけるに

春霞たちなへたてそ花さかりみてたにあかぬ山のさくらを　清原元輔

平さたふんか家の歌合に　たゝみね

春はなをわれにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

賀御屏風に　藤原年景

右大臣内麿の後にて大藏卿淑幹の子なり大藏丞に任せられ父子共に書を善くせり
齋宮内侍○本集にたい一首あるのみにて其系圖詳ならす

さきそめていくかへぬらん櫻花色をは人にあかすみせつゝ

天暦御時御屏風　たゝみ

春くれはまつそうちみる石の上めつらしけなき山田なれとも

題しらす　在原元方

春くれは山田のこほりうちとけて人の心にまかすへらなり

承平四年中宮の賀し給ひける時の屏風に

春の田を人にまかせて我はたゝ花に心をつくるころかな　齋宮内侍

宰相中將敦忠家臣家屏風に　つらゆき

あたなれと櫻のみこそ故鄕の昔なからの物にはありけれ

齋院屏風山みち行人ある所　伊勢

ちりちらすきかまほしきを故里の花みて歸る人もあはなん

題しらす　よみ人しらす

櫻かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花の陰にかくれむ

もとすけ

とふ人もあらしと思ひし山里に花のたよりに人めみるかな

圓融院御時三尺御屏風に　平兼盛

權中納言義懷○謙德公伊尹の子なり後撰集に見えたり
藤原長能○伊勢守倫寧の子にして寛弘中伊賀守に任せられたり

花の木をうゑしもしるく春くれは我宿すきて行く人そなき

題しらす　よみ人しらす

櫻色に我身はふかくなりぬらん心にしみてはなをおしめは

權中納言義懷家のさくらの花をしむ歌よみ侍りけるに　藤原長能

身にかへてあやなく花を惜むかないけらは後の春もこそあれ

題しらす　よみ人しらす

みれとおかぬ花のさかりにかへる雁猶故郷の花やこひしき

故郷の霞とひわけゆくかりはたひの空にや春をくらさむ

天暦御時御屏風に　藤原清正

ちりぬへき花みる時はすかのねの長き春日も短かゝりけり

題しらす　よみ人しらす

うけやらむまにもちりなは櫻花いかはかり人に我やなりなん

屏風に　よしのふ

散そむる花を見すてゝかへらめやおほつかなしと妹はみる（まつイ）とも

題しらす　よみ人しらす

見もはてゝ行くと思へはちる花につけて心は空になるかな

藤壺の女御○醍醐天皇の女御
惠慶法師○播磨國の國分寺の講師にて寛和の頃の人なり父祖詳ならす
きたの宮もきは裳着にてはしめて裳を着する儀式にて腰結御裳上等の役あり
小貳命婦○後撰集に見えたり

延喜御時藤壺の女御歌合のうたに

朝ことにわかはく宿の庭さくら花ちる程は手もふれてみむ

あれはてゝ人も侍らざりける家に、さくらのさきみたれて侍りけるを見て、　惠慶法師

淺茅原ぬしなきやとのさくら花心やすくや風にちるらむ

きたの宮のもきの屏風に　つらゆき

春深くなりぬとおもふを櫻花ちる木のもとはまた雪そふる

亭子院歌合に

櫻ちる木のした風はさむからて空にしられぬ雪そ降りける

題しらす　よみ人しらす

足曳の山ちにちれるさくらはなきえせぬ春の雪かとそみる

天暦御時歌合に　小貳命婦

足引の山かくれなるさくら花ちりのこれりと風にしらるな

題しらす　よみ人しらす

岩まをもわけくる瀧の水をいかてちりつむ花のせき留むらん

天暦御時歌合に　源順

春ふかみ井出の川なみたちかへりみてこそゆかめ山吹の花

春宮○朱雀天皇の坊におはしましけるほさないふ

井出といふ所に、やまぶきの花のおもしろくさきたるを見て

恵慶法師

山吹の花のさかりにゐてにきてこの里人になりぬへきかな

屏風に

もとすけ

物もいはてなかめてそふる山吹の花に心そうつろひぬらん

題しらす

よみひとしらす

さは水にかはつなくなり山吹の移ろふ影やそこにみゆらん

我やとの八重山吹はひとへたに散のこらなん春のかたみに

亭子院歌合に

坂上是則

花の色をうつしとゝめよ鏡山春より後のかけや見ゆると

題しらす

よみ人しらす

春霞たちわかれ行く山みちは花こそぬさとちりまかひけれ

年の中はみな春なから暮ならん花みてたにも浮世すくさん

延喜御時、春宮御屏風に

つらゆき

風ふけはかたも定めすちる花をいつ方へゆく春とかはみむ

おなし御時、月次御屏風に

花もみなちりぬる宿はゆく春の故里とこそなりぬへらなれ

閏三月侍りけるつごもりに

みつね

常よりものとけかりつる春なれとけふの暮るは飽すそ有ける

冷泉院○六十三代冷泉院天皇御諱は憲平村上天皇第二の皇子なり御母は皇后宮安子天暦四年五月御降誕同七月東宮にたゝせ給ひ康保四年八月位に即かせ給ふ御年十八安和二年讓位ありて寛弘八年崩り給ふ
衣かへ○更衣とて四月のはしめに練衣を生衣に更むる儀ありこれをいへり
盛明のみこ○醍醐

拾遺和歌集卷第二

夏

天暦御時の歌合に　大中臣能宣

なく聲はまたきかねとも蟬のはの薄き衣はたちそきてける

屏風に　したかふ

我宿のかきねや春をへたつらん夏來にけりとみゆる卯の花

冷泉院の東宮におはしましける時百首歌たてまつれとおほせられければ　源重之

花の色にそめし袂の惜ければ衣かへうきけふにもある哉

夏のはじめによみ侍りける　盛明のみこ

花ちると厭ひし物をなつ衣たつやおそきと風をまつかな

百首歌中に　しけゆき

夏にこそさきかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな

圓融院御時御屏風歌　平かねもり

すみよしの岸の藤なみわか宿の松の木すゑに色はまさらし

天皇の皇子なり後撰集に見えたり
飛香舍○藤壺なり清涼殿の北にありて西の第一にあたろ殿舍なり拾芥抄に飛香舍西一藤壺弘徽殿四或五間四面とあり
小野宮太政大臣○貞信公忠平の子實頼にて小野宮と號し清慎公と諡せらる後撰集に見えたり
平公誠○陸奥守元平の子にして周防守に任せらる
まかきの島○陸奥國にあり
きね○巫女を宜禰といふに杵をかれてよめるなり

紫のふちさく松の木すゑにはもとの緑も見えすそありける　したかふ

延喜御時飛香舍にて藤花の宴侍りける時に

薄くこく亂れてさける藤の花ひとしき色はあらしとそ思ふ　小野宮大政太臣

題しらす　躬恒

手もふれて惜しむかひなく藤の花底にうつれは浪そちりける

たこのうらの藤花を見侍りて　柿本人麿

たこの浦の底さへ匂ふ藤なみをかさしてゆかんみぬ人のため

山里の卯花にうくひすのなき侍りけるを　平公誠

うのはなをちりにし梅にまかへてや夏のかきねに鶯のなく

題しらす　よみ人しらす

卯花のさける垣ねはみちのくのまかきの島の浪かとそ見る

延喜御時月次御屏風に　みつね

神祭るう月にさける卯の花はしろくもきねかしらけたるかな　つらゆき

みてぐら○神に奉
る幣帛をみてぐら
といふなり

久米廣繩○萬葉作
者に越前掾とあり
父祖詳ならす

坂上望城

寛和○花山天皇の
年號なり

神祭るやとのうの花白妙のみてくらかとそあやまたれける

題しらす　よみ人しらす

山かつのかきねにさける卯花はたか白たへの衣かけしか

時わかすふれる雪かと見るまてに垣ねもたわにさけるうの花

春かけてきかむともこそおもひしか山郭公おそく鳴くらむ

初聲のきかまほしさに時鳥夜深くめをもさましつるかな

夏山をこゆとて　久米廣繩

いへにきてなにをかたらむ足曳の山ほとゝきす一聲もかな

延喜御時御屏風に　つらゆき

山さとにしる人もかな時鳥なきぬときかはつけにくるかに

題しらす　よみ人しらす

やま里にやとらさりせは郭公きく人もなきねをやなかまし

天暦御時歌合に　坂上望城

ほのかにそ鳴き渡るなるほとゝきすみ山をいつる今朝の初聲

平兼盛

み山いてゝ夜半にやきつる時鳥あかつきかけて聲のきこゆる

寛和二年内裏歌合に　右大將道綱母

右大將道綱の母○
東三條攝政兼家の
北方にて藤原倫寧
の女なり天暦元年
道綱をうめり蜻蛉
日記の作者なりま
たこの道綱の母は
かたち極めてすく
れて本朝三美人の
中の一人なりとそ
女四のみこ○醍醐
天皇第四皇女慶子
内親王なり
壬生忠見○壬生の
忠岑の子にして幼
名を多々といひ忠
賞と改め後又忠見
と更へられたり初
め攝津國に貧しく
て住みし醍醐天
皇忠見の歌をめて
ゝ御厨子所に候せ
しめ後天徳四年攝
津大目に住せられ
たり天徳の歌合に
平兼盛の歌に番ひ
負けたるより不食
の病となりて遂に
みまかられたりと
そ後撰集にも見え
たり
源公忠朝臣○後撰
集に見えたり

都人ねてまつらめやほとゝきす今そ山へになきていつなる

女四のみこの家歌合に　坂上是則

山かつと人はいへともほとゝきすまつ初聲は我のみそきく

天暦御時の歌合に　壬生忠見

さ夜ふけて寢覺さりせは郭公人つてにこそきくへかりけれ

おなし御時の御屏風に　伊勢

二聲ときくとはなしに時鳥夜深くめをもさましつるかな

北宮のもきの屏風に　源公忠朝臣

行きやらて山路くらしつ郭公いま一こゑのきかまほしさに

敦忠朝臣の家の屏風に　つらゆき

この里にいかなる人か家ゐして山ほとゝきすたえすきくらん

延喜御時歌合に　よみ人しらす

五月雨は近くなるらし淀川のあやめの草もみくさおいにけり

屏風に　大中臣能宣

昨日まてよそに思ひしあやめ草けふ我宿のつまとみるかな

題しらす　よみ人しらす

けふみれは玉の臺もなかりけりあやめの草のいほりのみして

延喜御製

足ひきのやま時鳥けふとてやあやめの草のねにたてゝなく

よみ人しらす

たか袖におもひよそへて郭公はなたちはなの枝になくらん

天暦御時、御屏風に、よどのわたりする人かける所に

壬生忠見

いつかたになきて行くらん時鳥淀のわたりのまた夜ふかきに

しけることまこものおふる淀野には露のやとりを人そかりける

小野宮大臣家屏風に、わたりしたる所に、郭公なきたるかたあるに

つらゆき

かのかたにはやこきよせよ郭公道になきつと人にかたらん

さたふみか家の歌合に

みつね

郭公をちかへりなけうなひこかうちたれかみの五月雨の空

題しらす

よみ人しらす

なけやなけたか田の山の時鳥この五月雨にこゑなをしみそ

五月雨はいこそねられね時鳥夜ふかくなかんこゑを待とて

うたて人おもはん物を郭公よるしもなとかわかやとになく

大伴坂上郎女

藤原實方朝臣○左大臣師尹の孫にして父は侍從定時叔父大納言左大將濟時養て子とす一條帝に仕へて從四位上左近衛中將に至る殿上にて行成と争ひ奥に下されて卒りぬ

西宮左大臣○醍醐天皇第九皇子延喜二十年源姓を賜はり左大臣となる安和二年貶せられて太宰權帥となり後召還さる天元五年薨りぬ西宮四條

大伴坂上郎女

郭公痛くなゝきそ獨ゐていのねられぬにきけはくるしも

中務

なつの夜の心をしれる郭公はやもなかなんあけもこそすれ

夏の夜は浦島の子か匣なれやはかなくあけてくやしかるらん

延喜御時、中宮歌合に

よみ人しらす

夏くれは深草山のほとゝきすなく聲しけくなりまさるかな

春宮にさふらひける繪にくらはし山に時鳥とひわたりたる所

藤原實方朝臣

五月やみくらはし山の時鳥おほつかなくも鳴わたるかな

題しらす

よみ人しらす

郭公なくやさ月のみしか夜も獨しぬれはあかしかねつも

西宮左大臣家屏風に

源順

時鳥まつにつけてやともしする人も山邊に夜をあかすらむ

延喜御時、月次御屏風に

つらゆき

さ月山木の下やみにともす火は鹿のたちとのしるへなりけり

九條右大臣家の賀の屏風に

兼盛

北条帝西高明卿子家と拾芥抄にあり九條右大臣○師輔公なり後撰集に見えたり

河原院○源融公の家なり六條坊門の南萬里小路の東八町と拾芥抄に見えたり

怪しくも鹿のたちどの見えぬかな小倉の山に我やきぬらん

女四のみこの家の屏風に

行するはまだ遠けれど夏山の木の下風はたちうかりけり

延喜御時御屏風に

夏山のかげをしげみや玉ほこのみちゆき人もたち留るらん

河原院のいづみのもとにすゞみ侍りて

恵慶法師

松かげの石井の水をむすびあげて夏なき年と思ひけるかな

家にさきて侍りけるなでしこを人のがりつかはしける

伊勢

いつくにもさきはすゝめとわか宿の倭撫子たれにみせまし

題しらず

よみ人しらす

底きよみ流るゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなん

藤原長能

さはへなす荒ふる神もおしなへてけふはなこしの秡なりけり

紅葉せはあかくなりなん小倉山秋まつ程の名にこそありけれ

右大将定國○泉大将と號す内大臣高藤公の子なり

右大将定國四十賀に内より屏風てうしてたまひけるに

たゞみね

大あらきの杜の下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな

安法法師○作者部類に内匠頭の適子さあり系圖詳ならす

安貴王○天智天皇の皇子施基皇子の御孫にして春日王の御子なり

拾遺和歌集卷第三

秋

秋のはしめによみ侍りける　安法々師

なつ衣またひとへなるうたゝねにこゝろしてふけ秋の初風

題しらす　よみ人しらす

秋は來ぬ立田の山もみてしかなしくれぬさきに色や變ると

延喜御時、御屏風に　つらゆき

荻の葉のそよく音こそ秋風の人にしらるゝはしめなりけれ

河原院にて、あれたるやとに秋來といふ心を、人々よみ侍りけるに　恵慶法師

八重葎しけれるやとの寂しきに人こそみえね秋はきにけり

題しらす　安貴王

秋立ていくかもあらねとこのねぬるあさけの風は袂すゝしも

延喜御時、御屏風に　みつね

ひこほしのつま待よひの秋風に我さへあやな人そ戀しき

湯原王○施基皇子の御子にて大納言正三位にいたり後從二位を贈らる

右衛門督清蔭○陽成天皇の皇子にして延喜三年源姓を賜はり大納言正二位に至り延暦四年薨りぬ

左兵衛督藤原懐平○小野宮實頼公の

秋風に夜のふけゆけは天の川かはせに浪のたちゐこそすれ

題しらす　柿本人まろ

天の川遠きわたりにあらねとも君かふなては年にこそまて

天の河底のわたりの移ろへは淺瀬ふむまに夜そふけにける

よみ人しらす

さ夜ふけて天の川をそいてゝみる思ふさまなる雲や渡ると

湯原王

ひこほしの思ますらん事よりもみる我くるし夜のふけゆけは

延喜御時、月次御屏風に　つらゆき

年にありて一夜いもにあふひこ星も我に勝りて思ふらんやそ

たなはたにぬきてかしつる唐衣いとゝ涙にそてやぬるらむ

右衛門督源清蔭家の屏風に

ひとゝせに一夜と思へと七夕のひあみん秋の限りなきかな

左兵衛督藤原懐平家屏風に　恵慶法師

徒(イタヅラ)にすくる月日をたなはたのあふ夜のかすと思はましかは

孫にして従三位齊敏の子なり

小野宮太政大臣○清愼公實頼なり

嵯峨○山城葛野郡なり

七夕、庚申にあたりて待りけるに

いとゞしくいもねさるらむと思ふかなけふの今宵にあへる七夕

題しらす　　よみ人しらす

あひ見てもあはても歎く織女はいつか心ののとけかるへき

我祈ることはひとつそ天の河空にしりてもたかへさらなん

君こすは誰にみせまし我やとのかきねにさける朝かほの花

女郎花おほかた野へに花薄いつれをさしてまねくなるらん

手もたゆくうゑしもしるく女郎花色ゆゑ君か宿りぬるかな

小野宮太政大臣

くちなしの宮をそたのむ女郎花花にめてつと人にかたるな

をみなへしおほくさける家にまかりて

女郎花匂ふあたりにむつるれはあやなく露や心おくらん

よしのふ

題しらす　　よみ人しらす

白露のおくつまにする女郎花あなわつらはし人なてふれそ

嵯峨に、前栽ほりにまかりて　　藤原長能

日暮しにみれともあかぬ女郎花野へにや今宵旅ねしなまし

こまむかへ○八月に東國の御牧より

八月はかりに、かりのこゑまつうたよみ侍りけるに

恵慶法師

荻の葉もやゝ打そよく程なるに（を）など雁かねの音なかるらむ

齋院屏風に　　よみ人しらす

かりにとてくへかりけりや秋の野の花みる程に日も暮ぬへし

題しらす

秋の野の花のなたてに女郎花かりにのみくる人にをらるな

紀貫之

かりにとてわれはきつれと女郎花みるに心そ思ひつきぬる

陽成院、御屏風に、こたかかりしたる所

かりにのみ人のみゆれは女郎花花のたもとそ露けかりける

亭子院のおまへに、前栽うゑさせ給ひて、これよめとおほせことありけれは　　伊勢

植たてゝ君かしめゆふ花なれは玉とみえてや露もおくらむ

題しらす　　よみ人しらす

こてすくす秋はなけれと初雁のきくたひことに珍しきかな

少將に侍りける時、こまむかへにまかりて

馬を貢るを逢坂關まで迎にさて勅使にたちむく事なり〇大貳高遠〇從三位藤原齊敏の子大宰大貳となることの下に左兵衛督きりはらの駒〇切原にて信濃の牧の名なり〇もちつきの駒〇望月の牧も信濃國なり

廉義公〇太政大臣賴忠をいふ小野宮實賴の子なり〇かみゑ〇紙にかきし給なり絹給に對へていふ〇源最明〇大藏卿源光の子にして長門守となれり

藏人所〇校書殿にあり〇藤原經臣〇大學頭佐高の子にて肥前守となる

逢坂の關のいはかどふみならし山たちいづるきりはらの駒　大貳高遠

延喜御時、月次御屏風に

相坂の關のしみづに影みえて今やひくらんもちつきのこま　つらゆき

屏風に、八月十五夜、池ある家に、人あそびしたる所　源したがふ

水の面にてる月なみを數ふればこよひぞ秋のもなかなりける

水に、月のやどりて侍りけるを　よしのぶ

秋の月浪の底にぞいでにけるまつらん山のかひやなからむ

廉義公の家のかみゑに、秋の月おもしろき池ある家ある所　源最明

秋の月西にあるかとみえつるはふけゆく程の影にぞ有ける

圓融院御時、八月十五夜かける所に

あかずのみ思ほえんをはいかゞせむかくこそはみめ秋の夜の月

延喜御時、八月十五夜、藏人所のをのこども、月の宴に侍りけるに　藤原經臣

こゝにだに光さやけき秋の月雲のうへこそおもひやらるれ

藤原爲頼〇刑部少輔雅正の子にて太皇大后宮大進となる

おなし御時、御屏風に　みつね

いつこにか今宵の月のみえざらむあかぬは人の心なりけり

題しらず　かねもり

よもすがらみてを明さん秋の月こよひの空に雲なからなむ

廉義公家にて、草むらのよるの虫、といふ題をよみ侍りける　藤原爲頼

おぼつかないつこなるらむ虫のねを尋ねは草の露や亂れん

前栽に、すゞむしをはなち侍りて　伊勢

いつこにも草の枕を鈴虫はこゝをたびとも思はざらなん

屏風に　つらゆき

秋くれははたをる虫のあるなへに唐錦にもみゆる野へかな

題しらず　よみ人しらす

契りけむ程やすきぬる秋の野に人まつ虫のこゑのたえせぬ

露けくて我ころも手はぬれぬともをりてをゆかん秋萩の花　みつね

亭子院御屏風に　伊勢

移ろはぬ事たゞにをしき秋萩にをれぬはかりもおける露哉

三條のきさいの宮○廉義公頼忠の御女にて朱雀天皇の皇后なり

曾根好忠○曾根姓は姓氏録に神饒速日命の六世の孫伊香我色雄の後とあり好忠父祖詳ならす官は丹後掾なりしに依て曾丹と號す

三條のきさいの宮の裳着侍りける屏風に九月九日の所

我宿のきくのしら露けふことにいくよつもりて淵となるらん　もとすけ

題しらす　みつね

なか月のこゝぬかことにつむ菊の花もかひなく老にけるかな

右大將定國家屏風に　たゝみね

千鳥なくさほの川霧たちぬらし山のこのはも色かはりゆく

延喜御時、御屏風に　つらゆき

風さむみわか唐衣うつときそ萩のした葉もいろまさりける

三百六十首の中に　曾禰好忠

神なひのみむろの山をけふみれは下草かけて色つきにけり

題しらす　大中臣能宣

紅葉せぬときはの山はふく風の音にや秋をきゝわたるらん

紅葉せぬ常盤の山にすむ鹿はをのれなきてや秋をしるらん　よみ人しらす

秋風のうちふくことに高砂のをのへの鹿のなかぬ日そなき

秋風をそむく物から花すゝき行かたをなと招くなるらん

健守法師○俗姓父祖共に詳ならす

はつせへまうて侍りけるみちに、佐保山のもとにまかりやとりて、あしたに霧のたちわたりて侍りけれは　恵慶法師

紅葉見に宿れる我としらねはやさほの川きりたちかくすらむ

題しらす　よみ人しらす

もみち葉の色をしそへて流るれはあさくもみえす山川の水

大井河に人々まかりて、うたよみ侍りけるに　よしのふ

紅葉はをけふは猶みむくれぬとも小倉の山の名にはさはらし

題しらす　よみ人しらす

秋霧のたゝまくをしき山路かなもみちの錦をりつもりつゝ

大井河に紅葉のなかるゝを見て　健守法師

水のあやに紅葉の錦かさねつゝ河瀬の浪のたゝぬ日そなき

西宮左大臣家の屏風に、しかの山こえに、つほさうそくしたる女とも、紅葉なとある所に　したかふ

名をきけは昔なからの山なれとしくるゝ秋は色まさりけり

東山に、紅葉見にまかりて、又の日のつとめて、まかりかへる、

竹生島〇近江湖中にあり辨才天は行基菩薩の始めて安置せる所なり
法橋觀敎〇法橋は僧位なり觀敎は父祖詳ならす延曆寺の僧にて後大僧都に任ぜられたりとそ
二條右大臣〇法興院關白兼家の二男道兼なり系圖に關白右大臣號粟田又二條とあり粟田は山城愛宕郡なり

源延光朝臣〇醍醐天皇の御孫にして代明親王の御子なり天慶九年姓を賜はる從三位權大納言に至り天延四年薨りぬ
源兼光〇參議正明の子にて春宮少進となる

とてよみ侍りける　恵慶法師

昨日よりけふはまされる紅葉はのあすの色をはみてやゝみなん

天暦御時殿上のをのこども紅葉見に大井河にまかりける
に　源延光朝臣

もみち葉を手ことにをりて歸りなん風の心もうしろめたきに

源兼光

枝なから見てを歸らん紅葉ははをらん程にもちりもこそすれ

題しらす　ふかやふ

河霧のふもとをこめてたちぬれは空にそ秋の山はみえける

竹生島にまうて侍りける時もみちのかけの水にうつりて
侍りけれは　法橋観教

水うみに秋の山邊をうつしてははたはりひろき錦とそ見る

二條右大臣粟田の山さとの障子のゑにたひ人もみちのし
たにやとりたる所　恵慶法師

今よりは紅葉のもとに宿りせしをしむに旅の日數へぬへし

題しらす　よみ人しらす

とふ人もいまはあらしの山風にひとまつ虫の聲そかなしき

右衛門督公任〇小野宮實賴の孫三條賴忠の子にて母は中務卿代明親王の御女なり正三位大納言に至り萬壽元年出家して長谷に籠居し長久二年薨りぬ世にと四條納言と稱す和漢の學に長し書を善くし管絃に巧なり尤も和歌をよくせり此集は即ち此卿の撰はれたる也

延喜御時中宮御屏風に

ちりぬへき山の紅葉を秋霧のやすくも見せす立かくすらん

題しらす　僧正遍昭

秋山のあらしのこゑをきく時は木の葉ならねと物そ悲しき

つらゆき

秋の夜に雨ときこえてふるものは風にしたかふ紅葉なりけり

心もてちらむたにこそをしからめなとか紅葉に風のふくらむ

嵐の山のもとをまかりけるに紅葉のいたくちり侍りけれ
は　右衛門督公任

朝またきあらしの山のさむけれは紅葉の錦きぬ人そなき

題しらす　よしのふ

秋霧のみねにもをにもたつ山はもみちの錦たまらさりけり

大井に紅葉のなかるゝを見侍りて　壬生忠岑

色々の木の葉流るゝ大井川しもはかつらのもみちとやみん

題しらす　よしたゝ

招くとて立もとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる花薄かな

くれのあき重之がせうそこして侍りける返ことに　平　兼盛

くれてゆく秋の形見におくものは我元結の霜にそありける

内侍のかみの賀○貫之集に延喜十三年十月とあり

清涼殿のみさうしに云々○禁秘抄に清涼殿北面障子字治網代墨繪也とあり清涼殿は天皇の常御殿なり網代は氷魚をとるものなり

ならのみかと○文武天皇なり古今集に見えたり

拾遺和歌集巻第四

冬

延喜御時、内侍のかみの賀の屏風に　紀　貫之

足曳の山かき曇りしくるれと紅葉はいとゝてりまさりけり

寛和二年、清涼殿のみさうしに、あしろかける所　よみ人しらす

あしろ木にかけつゝあらふ唐錦日をへてよする紅葉なりけり

時雨し侍りける日　つらゆき

かきくらししくるゝ空をなかめつゝ思ひこそやれ神なひの杜

題しらす　讀人しらす

神無月時雨しぬらし葛のはのうらこかるねにしかも鳴くなり

奈良のみかと、龍田川に、紅葉御覧しに、行幸ありける御ともにつかふまつりて　柿本人丸

立田川もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

ちりのこりたるもみちを見侍りて　僧正遍昭

唐錦枝にひとむらのこれるは秋のかたみをたゝぬなるへし

津の國のこや○攝津國島上郡昆陽野なり

[illegible]

延喜御時、女四のみこの家の屏風に [illegible]

流れくる紅葉はみれは唐錦たきのいともておれるなりけり

[illegible] 平兼盛

時雨ゆゑかつく袂をよそ人はもみちをはらふ袖かとやみん

百首歌の中に [illegible] 源重之

芦の葉に隠れて住みし津、國のこやもあらはに冬は來にけり

題しらす つらゆき

思ひかねいもかりゆけは冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり

[illegible] よみ人しらす

ひねもすにみれともあかぬ紅葉はいかなる山の嵐なるらん

夜を寒みねさめてきけは鴛鴦の羨ましくもみなるなるかな

水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水も氷らさりけり

夜を寒みねさめて聞はをしそ鳴く拂ひもあへす霜やおくらん

さたふんか家の歌合に [illegible]

霜のうへにふる初雪のあさこほりとけすも物を思ふ比かな

題しらす 右衛門督公任

霜おかぬ袖たにさゆる冬の夜は鴨のうは毛を思ひこそやれ

橘のもときより○作者部類に越中守橘行資左少辨正爲于さあり

ふしつけ○柴にて柴を河にふせおきて魚をとるものなり

恒德公○九條右大臣師輔の子太政大臣爲光なり

[illegible]

池水や氷りとくらん芦鴨のよふかく聲のさはくなるかな

[illegible] 紀友則

とひかよふをしの羽風の寒けれは池の氷そさえまさりける

[illegible] よみ人しらす

水の上に思ひしものを冬の夜の氷は袖のものにそありける

屏風に [illegible] 平兼盛

ふしつけし淀の渡をけさみれはとけんこもなく氷しにけり

題しらす [illegible] よみ人しらす

冬さむみ氷らぬ水はなけれとも吉野の瀧はたゆるせもなし

恒德公家の屏風に [illegible]

冬されは嵐のこゑも高砂の松につけてそきくへかりける

[illegible]

高砂の松にすむつる冬くれはをのへの霜やおきまさるらむ

題しらす [illegible] 紀友則

夕されはさほの川原の河霧にともまとはせる千鳥なくなり

[illegible]

浦ちかく降りくる雪は白浪のすゑのまつ山こすかとそみる

廉義公家障子に

冬の夜の池のこほりのさやけきは月の光のみかくなりけり

題しらす　よみ人しらす

ふゆの池の上は氷にとちられていかてか月の底に入るらむ

月をみてよめる　恵慶法師

あまの原空さへさえやわたるらむ氷とみゆる冬の夜のつき

はつ雪をよめる　源景明

都にてめつらしと見る初雪はよしのゝ山にふりやしぬらん

女をかたらひ侍りけるか年ころになり侍りにけれとうとく侍りけれは雪のふり侍りけるに　もとすけ

ふるほともはかなくみゆる沫雪のうらやましくもうちとくるかな

山あひに雪のふりかゝりて侍りけるを　人しらす

足曳のやまあひにふれる白雪はすれる衣のこゝちこそすれ

齋院の屏風に　貫之

よるならは月とそ見まし我か宿の庭しろたへにふれる白雪

こしの白山○加賀國白山なり
藤原佐忠朝臣○出羽守遠茂の子にて勘解由次官となる
入道摂政○法興院兼家といふ九條右大臣師輔の子なり

題しらす　よしのふ

我宿の雪につけてそふるさとのよしのゝ山は思ひやらるゝ

屏風のゑにこしの白山かきて侍りける所に　藤原佐忠朝臣

我ひとり越の山路に來しかとも雪ふりにける跡をみるかな

題しらす　たゝみ

年ふれはこしのしら山老にけりおほくの冬の雪つもりつゝ

入道摂政の家の屏風に　かねもり

見わたせは松の葉白き吉野山いく世積れる雪にかあるらん

題しらす

山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとはみむ

人まろ

足曳の山路もしらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは

右大將定國家の屏風に　貫之

白雪のふりしくときはみよし野の山した風に花そちりける

冷泉院御時御屏風に　かねもり

ひともしれす春をこそまてはらふへき人なき宿にふれる白雪

名佛〇年暮に三世の佛名を唱へて六根の罪を消滅する事にて禁中にてもこの儀を行はる

導師〇佛名會にまねかれてつとむる僧をいふ[illegible]

屏風に[illegible]の[illegible]

新しき春さへちかくなりゆけはふりのみまさる年の雪かな

[illegible]右衛門督公任

梅かえにふりつむ雪は一とせに再ひさける花かとそみる

屏風の為に、佛名の所[illegible]

おきあかす霜と共にや今朝は皆冬の夜深きつみもけぬらん

延喜御時の屏風に[illegible]

年の中に積れるつみはかきくらしふる白雪と共にきえなむ

屏風の繪に、佛名のあしたに、梅の木のもとに、導師とあるじと、かはらけとりて、わかれをしみたる所

[illegible]

雪深き山路になにゝかへるらん春まつ花のかけにとまらて

屏風の為に、佛名の所[illegible]

人はいさをかしやすらむ冬くれは年のみつもる雪とこそみれ

齋院の御屏風に、十二月つごもりの夜[illegible]

かそふれは我身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん

百首歌の中に　　源　重之

[illegible]

雪積るをのか年をはしらすして春をはあすときくそうれしき

[illegible]

覽

齋宮〇村上天皇の皇女樂子内親王なり
長奉送使〇齋宮たは伊勢まて奉送するものにて中納言參議の中一人を定めらるゝよし花鳥餘情に見えたり
平野祭〇云々〇花山天皇寛和元年四月十日左衞門權佐藤原惟成を勅使としてこれをまつる但し祭は古く行はれたれと勅使をたてられしはこれを始とす男の使とは唯勅使をいふ
かまふ野玉の緒山〇ともに近江國にあり
贈皇后宮〇冷泉院の女御花山院の御母にて藤原伊尹の女懐子なり

拾遺和歌集卷第五

賀

天暦御時、齋宮くたり侍りける時の長奉送使にて、まかりかへらむとて　中納言朝忠

萬世のはしめとけふを祈りおきていま行末は神そしるらん

はしめて平野祭に男使たてし時うたふへき歌よませしに　大中臣能宣

千早ふる平野の松の枝しけみ千世もやちよも色はかはらし

仁和の御時、大嘗會の歌　よみ人しらす

かまふ野の玉のを山にすむ鶴の千歳は君か御代のかすなり

贈皇后宮の、御うふやの七夜に、兵部卿致平のみこのきしのかたをつくりて、たれともなくてうたをつけて侍りける

朝またきゝりふの岡にたつきしは千代の日つきの初なりけり　清原元輔

藤氏のうふやにまかりて　よしのふ

兵部卿致平のみこ〇村上天皇の皇子にて四品に叙せられたり
きりふの岡〇所在國郡詳ならす
藤原實資〇民部卿齊信の子清愼公實賴の養子となり從一位右大臣に至る世に小野宮右府と稱す小右記の作者なり
藤原誠信〇恒德公爲光の子にて參議從三位左衛門督に至る幼名を松尾君といふ大鏡に見ゆ
三善のすけたゝ
山階寺〇興福寺なりもと山城國山階郷にあり和銅三年藤原不比等奈良に建立して氏寺とせり故に一名をは山階寺といへり
金泥壽命經〇壽命長久を祈る經なりそれを金泥にてかきしなり四十八卷一本に四十卷とあるをよしとす四十賀

ふた葉よりたのもしきかな春日山木高き松のたねそと思へは

うふやの七夜にまかりて　[illegible]

君かへん八百萬代を數ふれはかつ〳〵けふそ七日なりける

右大將藤原實資うふやの七夜に　平かねもり

ことしおひの松は七日に成にけり殘りのほとを思ひこそやれ

ある人のうふやにまかりて　よしのふ

ちとせとも數はさためす世中に限りなき身と人もいふへく

藤原誠信元服し侍りたる夜よみける　源　順

老ぬれは同し事こそせられけれ君は千世ませ君はちよませ

みよしのすけたゝかうふりし侍りける時　よしのふ

ゆひそむる初もとゆひのこむらさき衣の色にうつれとそ思ふ

天暦のみかと、四十になりおはしましける時、山階寺に、金泥壽命經四十八卷をかき、供養したてまつりて、御卷數鶴にくはせて、すはまにたてたりけり、そのすはまのしき物に、あまたの歌、あしてにかける中に　かねもり

山階の寺のいはねに松を植てときはかきはに祈りつるかな

にあはせたる數なせ問卷敗は經卷の月錄をかぎだるもの なり鵡にぐばせは鵡の嘴に揷みだ方なりおして○聲手歌どて給の中た文字につぐりたる物なり仲算法師○興福寺の僧にて其傳元亨釋書に見えたり中宮の賀○中宮は醍醐天皇の中宮穩子なり春歌の初に見えたり齋宮の内侍○傳詳ならす大中臣頼基○作者部類に遠江守國貢の孫肥後守輔道の子さあり能宣の父にて伊勢の祭主なり清愼公○小野宮太政大臣實頼の諡號なり [illegible]

[illegible]仲[illegible]算[illegible]法[illegible]師

聲高くみ笠の山そよはふなるあめのしたこそ樂しかるらし

承平四年、中宮の賀し侍りける時の屏風に

[illegible]齋[illegible]宮[illegible]内[illegible]侍

色かへぬ松と竹とのすゑの世をいつれ久しと君のみそ見ん

[illegible]

おなし賀に、竹の杖つくりて侍りけるに

大中臣頼基

一ふしに千代をこめたる杖なれはつくともつきし君か齡は

清愼公、五十賀し侍りける時の屏風に

もとすけ

君か世を何にたとへんさゝれ石の巖とならん程もおかねは

青柳のみとりの糸をくり返しいくらはかりの春をへぬらむ

[illegible]かねもり

我宿にさける櫻の花さかりちとせみるともおかしとそ思ふ

おなし人の、七十賀し侍りけるに、竹の杖をつくりて

よしのふ

君か爲けふきる竹の杖なれはまたもつきせぬよゝそ籠れる

一條攝政○謙徳公伊尹にて中將に侍りける時は公卿補任に天徳四年八月左中將とあり父の大臣は九條右大臣師輔なり小野好古○大貳葛絃の子にて參議に任す權中納言敦忠母○在原棟梁の女にて本院左大臣時平の室なり源公忠朝臣○大藏卿國紀の子さ作者部類にあり官は有大辨なり民部卿清貫○正五位下眞頑の子にて大納言正三位民部卿をかねたり五條尙侍○この清貫の親戚なるへし花宴○公卿殿上人を會して花をもてあそひ給ふ御宴なり

くらゐ山みねまてつけるつえなれはいまよろつよの坂のためなり

一條攝政、中將に侍りける時、父の大臣の五十賀し侍りける屏風に

小野好古朝臣

吹風によその紅葉は散くれと君かときはのかけそのときき

權中納言敦忠、母の賀し侍りけるに

源公忠朝臣

萬代もなをこそあかね君かため思ふ心のかきりなけれは

五條内侍のかみの賀、民部卿清貫し侍りける時、屏風に

伊勢

大空にむれたるたつのさしなから思ふ心のありけるかな

春の野の若菜ならねと君かため年の數をもつまんとそ思ふ

天徳三年、内裏に、花宴せさせ給ひけるに

九條右大臣

櫻花こよひかさしにさしなからかくて千年の春をこそへめ

題しらす

よみ人しらす

かつ見つゝ千年の春はすくすともいつかは花の色にあるへき

亭子院歌合に

みつね

三千年になるてふ桃○漢武故事に王母種桃三千歳一結子とあり　子日○子日の宴といふ正月初子の日にする事なり○藤原のふかた○作者部類に藤原信貫右兵衛佐とあり○三條太政大臣○實賴の子朝忠にて廉義公と諡す　参議伊衡○按察使富士麿の孫にして敏行朝臣の子なり承平四年参議に任せられ同七年右兵衛督となり天慶九年十二月十七日薨りぬ　前栽の宴○花の宴と同しく前栽を賞

三千年になるてふ桃のことしより花さく春にあひにけるかな

康保三年、内裏にて、子日せさせ給ひけるに、殿上のをのこと
も和歌つかうまつりけるに　藤原のふかた

珍しき千世の初の子の日にはまつけふをこそひくへかりけれ

小野宮太政大臣家にて、ねの日し侍りけるに、下らうに侍り
ける時、よみ侍りける　三條太政大臣 廉義公

行すゑも子日の松のためしには君か千年をひかんとそ思ふ

延喜御時、御屏風に　つらゆき

松をのみ常盤と思ふによとゝもに流す泉もみとりなりけり

題しらす　よみ人しらす

みな月のなこしのはらへする人は千年の命のふといふなり

承平四年、中宮の賀し侍りける屏風に　参議伊衡

みそきして思ふことをそ祈りつる八百萬代の神のまに〳〵

天暦御時、前栽のえんせさせ給ひける時　小野宮太政大臣

萬代にかはらぬ花のいろなれはいつれの秋か君は見さらむ

して御遊あるをおる事なり　右大臣源光○仁明天皇の皇子なり　内舎人橘のすけみ○父祖詳ならす　内舎人は職原抄に内舎人九十人可然之侍任之帶驗之官也とありこは光公の隨身の内舎人なるへし

廉義公家にて、人々に歌よませ侍りけるに、くさむらの中の
よるの虫といふ題を　平兼盛

千年とそ草むらことにきこゆなるこや松虫の聲にはあるらむ

右大臣源のひかるの家に、前栽合し侍りけるまけわさを、内
舎人たちはなのすけみかし侍りける、千鳥のかたつくり
て侍りけるに、よませはへりける　つらゆき

たかとしの數とるはみむ行かへり千鳥なくなる濱のまさこを

天暦御時、清愼公御ふみたてまつるとてよませ侍りけれは
よしのふ

おいそむるねよりそしるき笛竹の末の世長くならん物とは

鏡いさせ侍りけるうらに、つるのかたをいつけさせ侍りて
伊勢

千年とも何か祈らむ浦にすむたつのうへをそみるへかりける

題しらす　よみ人しらす

君か代は天の羽衣まれにきてなつともつきぬいはほならなん

賀の屏風に　もとすけ

動きなき巖のはても君そみむをとめの袖のなてつくすまて

小貳命婦〇大和物
語に村上天皇の御
乳母とあり系圖詳
ならず
臺盤所〇清涼殿の
朝餉の間の南にあ

拾遺和歌集巻第六

別

　春ものへまかりける人に、あかつきにいでたちける所にて、
とまり侍りける人の、よみ侍りける　よみ人しらず

春霞たつあかつきをみるからに心ぞそらになりぬべらなる

　題しらず

櫻花露にぬれたるかほみればなきてわかれし人ぞ戀しき

ちる花はみち見えぬまで埋まなん別るゝ人もたちやとまると

　ものへまかりける人のもとに、人々まかりてかはらけとり
　て　そねのよしたゝ

雁かねの歸るをきけは別れちは雲井はるかに思ふはかりぞ

　天暦御時、小貳命婦豐前にまかり侍りける時、臺盤所にて餞
せさせ給ふにかづけ物たまふとて　御製

なつ衣たち別るへき今宵こそひとへにおしき思ひそひぬれ

り
御製〇村上天皇な
り次なるもおなじ
齋宮〇樂子内親王
にて上に註せり

　題しらず

わするなよ別路におふる葛のはの秋風ふかは今かへり來ん　よみ人しらず

別れてふ事は誰かは初めけむくるしき物としらすや有けむ

時しもあれ秋しも人のわかるれはいとゝ袂そ露けかりける

　天暦御時、九月十五日齋宮くたり侍けるに　御製

君か代をなか月とたにおもはすはいかに別れの悲しからまし

　十月はかりにものへまかりける人に　たゝみ

露にたにあてしと思ひし人しもそ時雨ふる比たひに行ける

　物へまかりける人に、むまのはなむけし侍りてあふきつか
はしける　よしのふ

別れちをへたつる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ

　題しらず　よみ人しらず

別れてはあはんあはしそ定めなきこの夕くれや限なるらん

別路は戀しき人のふみなれややらでのみこそみまくほしけれ

　ものへまかりける人のをくり、せき山まてし侍るとて

大江爲基〇參議左大辨齊光の子なり
赤染衛門〇赤染時用の女實は平兼盛の女といへりいみしき歌人にて本集以下風雅集に至るまて代々の勅撰集に歌あまた入りたり
りしかすかのわた〇三河國にあるこの歌赤染の集には此人三河守になりて下りしにとあり
源よしたね〇源長獻の子喜種にて清和天皇の御孫なり大和物語にも其名見えたり

[illegible] つらゆき

別れ行けふはまどひぬ逢坂はかへりこん日の名にこそ有けれ

[illegible]伊勢よりのぼり侍りけるに、しのびて物いひ侍りける女の、あづまへくだりけるが、逢坂にまかりあひて侍りけるにつかはしける　[illegible]

ゆくすゑの命もしらぬ別れぢはけふ相坂やかぎりなるらん

大江爲基、あづまへまかりくだりけるに、あふぎをつかはすとて　赤染衛門

惜むともなき物ゆゑにしらすかの渡ときけはたゞならぬかな

源のよしたねが、參河の介にて侍りけるむすめのもとに、はゝのよみてつかはしける

諸共にゆかぬみかはのやつ橋は戀しとのみや思ひわたらん

かねもり駿河のかみにてくだり侍りけるむまのはなむけし侍るとて　源順

別れぢは渡せるはしもなき物をいかでか常に戀わたるべき

信濃のくににくだりける人のもとにつかはしける　つらゆき

共政朝臣〇父祖および傳詳ならす妻のひせんは村上天皇の御乳母なり次の歌の肥前は別人にや
御めのと肥前〇一本には肥後とありいではの國は出羽國なり
藤つほ〇村上天皇の女御芳子をいふなるへし一條左大臣師尹の女にて藤壷に侍はせ給へるよし花鳥餘情に見えたり
御めのと少納〇言父祖詳ならす
女藏人三河〇こも詳ならす女藏人こは地下人の女の宮仕して禁中の下さまの事をつとむるものにて命婦よりも卑き女房なり

月影はあかすみるともさらしなの山の麓になかゐすな君

[illegible]共政朝臣、肥後守にてくだり侍りけるに、妻のひせんがくだりけるに、つくしぐし、御ぞなど、たまふとて　[illegible]

別るれは心をのみぞつくしぐしさして逢べき程をしらねは

天暦御製

天暦御時、御めのと肥前が、いではのくにゝくだり侍りけるに、せんたまひけるに、ふぢつぼより、さうぞく給ひたるに、そへられたりける　よみ人しらず

ゆく人をとゞめがたみの唐衣たつより袖のつゆけかるらん

おなじ御めのとのせんに、殿上のをのこども、女房などわかれをしみ侍りけるに　御めのと少納言

惜むともかたしやわかれ心なる涙をたにもえやはとゞむる

女藏人參河

東路の草葉をわけん人よりもおくるゝ袖ぞまづは露けき

題しらず　よみ人しらず

別るれはまづ涙こそ先にたていかでおくるゝ袖のぬるらん

別るゝをゝしとぞ思ひつるきはの身をより碎く心ちのみして

三條太皇太后宮○太政大臣頼忠の女遵子圓融院の皇后四條宮と號す○橘公頼○父祖詳ならす帥は大宰帥なりさしさだは阿波守紀利貞なり繼母内侍のすけどこ系圖詳ならす

みちのくのかみ○これも傳詳ならす彈正のみこは花山院の皇子清仁親王ないぶなるへし四品彈正尹にて長元三年發りぬかうやくは膏藥なり

源弘景、ものへまかりけるに、さうぞく給ふとて　　三條太皇大后宮

旅人の露はらふへき唐衣またきも袖のぬれにけるかな

橘公頼、帥になりてまかりくたりける時、としさたか繼母、内侍のすけのむまのはなむけし侍りけるに、さうぞくにそへてつかはしける　　つらゆき

あまたにはぬひかさねゝと唐衣おもふ心はちへにそ有ける

題しらず

どをくゆく人のためにはわか袖の涙の玉もをしからなくに

よみ人しらす

惜むとてとまる事こそかたからめ我衣手をほしてたにゆけ

ゐなかへまかりける時　　つらゆき

いとによる物ならなくに別れちは心ほそくも思ほゆるかな

みちのくにのかみこれともか、まかりくたりけるに、彈正のみこの、かうやくつかはしけるに　　戒秀法師

かめ山にいくくすりのみありけれは留むるかたもなき別れかな

藤原のまさたゝか、豊前守に侍りける時、ためよりか、おほつ

戒秀法師○作者部類に凡僧の部に戒秀定額花山院殿上法師清原元輔子とありかめ山○蓬萊なりいく藥は不死の藥をいふ藤原まさたゝ○中納言兼輔の子刑部少輔雅正にて即ち爲頼か父なり既に後撰集に見えたり藤原清正○兼輔の子にて雅正の兄弟なりこも後撰に見えたり源滿仲○六孫王源經基の子にて天元六年攝津守に任せらるこの人の歌これ一首本集に載せたるのみなり右衛門○作者部類に源兼澄女とあり橘倚平○橘正臣の孫にて飛彈守是輔の子なり日向守に任せらるいきの松原○筑前國にあり三條太政大臣○頼忠なり

かなしとてくたり侍りけるに、むまのはなむけし侍るとて　　藤原清正

思ふ人あるかたへ行く別れちをしむ心そかつはわりなき

肥後守にて清原元輔くたり侍りけるに、源滿仲せんし侍りけるに、かはらけとりて　　もとすけ

いかはかり思ふらんとか思ふらむ老て別るゝとをき別れを

返し　　源滿仲朝臣

君はよし行末遠しとまる身のまつほといかゝあらんとすらむ

題しらす　　よみ人しらす

おくれゐて我戀をれは白雲のたなひく山をけふやこゆらん

右衛門

命をそいかならむとは思ひこしいきて別るゝ世にこそ有けれ

つくしへまかりける人のもとに、いひつかはしける　　橘倚平

昔みしいきの松はらこととはゝ忘れぬ人もありとこたへよ

陸奥守にてくたり侍りける時、三條太政大臣餞し侍りけれは、よみ侍りける　　藤原爲頼

たけくまの松○奥州にあり

實方朝臣云々○これ行成と口論の罪によりて奥州へ下向せらるゝなり

恒德公○太政大臣爲光公なり

田簑島○攝津國難波にあり

難波にはらへし○遊所七瀬の祓の中にて御代始の八十島祭には難波にて祓を行はるゝなり

たけくまの松を見つゝや慰さめむ君か千世のかけにならひて

みちのくにの白河關こえ侍りけるに　平　兼　盛

便りあらはいかて都へつけやらむけふ白川の關はこえぬと

實方朝臣みちのくにへくたり侍りけるにしたくらつかはすとて　右衛門督公任

東路の木のしたくらくなりゆかは都の月をこひさらめやは

題しらす　よみ人しらす

旅ゆかは袖こそぬるれもる山の雫にのみはおほせさらなむ

恒德公家の障子に　かねもり

潮みてるほとに行かふ旅人やはまなの橋となつけそめけん

田簑のしまのほとりにて雨にあひて　つらゆき

雨によりたみのゝ島に分行と名には隱れぬ物にそありける

難波にはらへし侍りて、まかりかへりけるあかつきに、もりの侍りけるに、郭公のなき侍りけるをきゝて　伊　勢

源公貞○皇胤紹運錄に陽成天皇の御孫にて從三位刑部卿清鑒の子從五位下公貞とあり

せきとの院○山崎にあり

師伊周○中關白道隆の一男内大臣伊周にて太宰權帥となりて筑紫へ下らるゝ事榮花物語浦々の別に詳なり川尻は攝津國なり

郭公なくらなからの聲きけは草のまくらそつゆけかりける

物へまかりけるみちにて、雁のなくをきゝて　よしのふ

草枕われのみならす雁かねもたひの空になきわたりける

題しらす　よみ人しらす

君をのみこひつゝたひの草まくら露しけからぬ曉そなき

源公貞か、大隅へまかりくたりけるに、せきとの院にて、月のあかりけるに、わかれをしみ侍りて　平　兼　盛

遙なる旅の空にもおくれねはうらやましきは秋の夜の月

秋、たひにまかりけるに、いなみのにやとりて　よしのふ

女郎花我に宿かせいなみのゝいなといふともこゝをすきめや

つくしへくたりける道にて　重　之

船路には草の枕もむすはねはおきなからこそ夢も見えけれ

師伊周、つくしへまかりけるに、かはしりはなれ侍りけるによみける　ゆけのよしとき

思出もなき故郷の山なれとかくれゆくはたあはれなりける

ゆけのよしとき○弓削嘉言と作者部類に見え父祖詳ならす贈太政大臣菅○菅原道眞にて天暦九年閏十月廿日太政大臣を贈らるかさのかなをか○繪師の金岡は仁明天皇の頃の人にて姓は巨勢なれは別人なるへしこの歌万葉集八に笠金村贈入唐使歌波の上に見ゆる見島の雲かくれあないきつかし相別れなはさあるに同しさまなれは金村を金岡さあやまり入唐使の名なさなも寫したかへたるなるへしもろこしにて云々○裏書の如く人丸入唐の事物に見えす清輔袋草子には遣新羅副使陸奥介從五位下玉手人丸歟さあり作者部類には入唐使等人丸の歌を詠吟せるを誤り傳へたるかといへり

なかされ侍りて後いひおこせて侍りける

贈太政大臣菅

君かすむ宿の梢のゆく〳〵とかくるゝまてにかへりみしはや

かさのかなをかゝもろこしにわたりて侍りける時めのなかうたよみて侍りけるに

かなをか

浪の上にみえし小島のしまかくれ行うらもなし君に別れて

もろこしにて

かきのもとの人まろ

あまとふや雁の使ひにいつしかもならのみやこに言つてやらむ

人丸入唐事此歌外無所見但上古事唯可任本

藤原すけみ○中納言長眞卿の孫にて弘經の六男輔相なり越前権守に任せられ藤六と稱すさるとりの花○草花にて和名抄に菝葜和名佐流止里一云於保字波さありかにひの花○雁皮花なりかいつはた○杜若花なりさくなむさ○石南草にて和名抄に和名止比眞乃木俗云佐久奈無佐とあり如覺法師○少將高

拾遺和歌集卷第七

物名

紅梅　よみ人しらす

鶯のすつくる枝をおりつれはこうはいかてかうまむとすらん

さくら

花の色を現にめては仇めきぬいさくらやみに成てかさゝむ

藤原すけみ

いはやなき

たひのいはやなきとこにもねられけり草の枕に露はおけとも

さるとりの花

なく聲はあまたすれとも鶯にまさるとりのはなくこそ有けれ

伊勢

かにひのはな

わたつ海の沖なかにひのはなれ出て燃とみゆるはあまのいさりか

よみ人しらす

かいつはた

こき色かいつはたうすく移ろはん花に心もつけさらんかも

如覺法師

さくなむさ

光の法名にて高光は九條右大臣師輔の子なり

しもつけ○草の名繡線菊にて蒲萄に似たる葉にて溝赤き花夏の頃にさくものなり

けにこし○牽牛子なり和名抄にあさかほとよめり

らに○蘭なり

紫の花にはさくなむさしの丶草のゆかりと人もこそしれ

しもつけ　よみ人しらす

植てみる君たにしらぬ花の名を我しもつけんとのあやしさ

りうたん

川上にいまよりうたんあしろにはまつ紅葉はやよらんとすらん

きちかう

仇人のまかきちかうな花うゑそ匂ひもあへす折つくしけり

あさかほ

我宿の花のはにのみぬる蝶のいかなるあさかほかよりはくる

けにこし

忘れにし人のさらにも戀しきかむけにこしとは思ふ物から

らに

秋の野に花てふ花を折つれはわひしらにこそ虫もなきけれ

かるかや　忠岑

白露のかゝるかやかてきえさらは草葉そ玉のくしけならまし

はきのはな

山川はきのはなかれす淺きせをせけは淵とそ秋はなるらん

ひともときく○一本の菊なり

すはうこけ○赤くして猝の如きものなりといへり

いなみ野○播磨國なり

くるすの○山城國愛宕郡にあり

松むし

瀧つせの中にたまつむしら波は流るゝ水ををにそぬきける

ひくらし

今こむといひて別れし朝よりおもひくらしのねをのみそなく

つらゆき

杣人は宮木ひくらしあしひきの山のやまひとこゑとよむなり

松のねは秋の調にきこゆなり高くせめあけて風そひくらし

ひともときく　すけみ

仇なりとひともときくる物しもそ花の邊をすきかてにする

すはうこけ

鶯のすはうこけとも主もなし風に任せていつちいぬらん

やまとはん

ふるみちに我やまとはん古への野中の草は茂りあひにけり

いなみの

住吉の岡の松かさしつれは雨はふるともいなみのはきし

くるすの

白浪のうちかくるすのかはかぬに我袂こそおとらさりけれ

このしま〇山城國葛野太秦のほとりなり

をかはのはし〇雲法抄に筑前國にありと見えたり一說に陸奥ともいへり くまのくら〇所在國郡詳ならす 賀緣法師〇古今著聞集に見えて慈惠僧正に無實の名をおほせて罪を得たる僧なり

いぬかひのみゆ〇信濃國犬飼御湯なり

あらふねのみやしろ〇筑前國荒船神社なり

なとりのこほり〇陸奥國なり次のなとりの御湯もこの郡内にあり

このしまにあまのまうてたりけるをみて

水もなく舟も通はぬこのしまにいかてかあまのなまめかるらむ

よとかは　在原元方

植ていにし人もみなくに秋萩のたれみよとかは花のさくらん

つらゆき

足曳の山へにをれはしら雲のいかにせよとかはるゝ時なき

をかはのはし　在原業平朝臣

筑紫よりこゝ迄くれとつともなしたきのをかはのはしのみそある

くまのくらといふ山寺に、賀縁法師のやとりて侍りけるに、
ちうちし侍りける法師にうたよめといひけれはよめる

よみ人しらす

身を捨て山に入にし我なれはくまのくらはん事もおほえす

いぬかひのみゆ

鳥のこはまた雛なからたちていぬかひのみゆるは巣守なりけり

あらふねのみやしろ　すけみ

莖もはも皆緑なる古せりはあらふねのみやしろくみゆらん

なとりのこほり　しけゆき

さはこのみゆ〇これも陸州にあり

つゝみのたけ〇伊勢國度會郡にあり拾遺抄にはつゝのみたけとあり國所詳ならす 紀輔時傳つまひらかならす

むろの木〇和名抄に樫一名河柳和名無呂とあり 高向草春〇系圖傳ともに詳ならす 神なひ三室龍田川〇ともに大和國なり

きさのき〇和名抄に標木文也漢語抄云木佐或說木佐者柑之和名也此木文與柑文相似故取名號云々とありて木目あろ木たいへり

はなかむし〇花柑

あたなりなとりの氷におりゐるは上よりとくる事はしらぬか

なとりのみゆ　かねもり

おほつかな雲の通ひち見てしかな鳥のみゆけは跡はかもなし

さはこのみゆ　よみ人しらす

おかすして別れし人のすむ里はさはこのみゆる山のあなたか

つゝみのたけ　紀輔時

篝火の所定めすみえつるはなかれつゝみのたけはなりけり

むろの木　高向草春

神なひのみむろのきしやくつるらん立田の川の水の濁れる

きさのき　すけみ

怒猪の石をくゝみてかみこしはきさのきにこそ劣らさりけれ

はなかむし　仙慶法師

五月雨にならぬ限りは郭公なにかはなかむしのふはかりに

もゝ　すけみ

心さし深き時にはそこのもゝかつきいてぬる物にそありける

はしはみ　よみ人しらす

おも影にもはしはみゆる君なれと戀しき事そ時そともなき

子なり
仙慶法師○傳詳ならず
はしはみ㊀和名抄に榛子和名波之波美榛栗也とあり栗の木の如くにて其實杼に似たるものなり
ねりがき○練柿にて熟したる柿をいふとぞ
をはりこめ㊀尾張の米なり
くゝたち㊀山草の入釜の葉に似たるもの也越後には今もいへりそれにや和名抄に莖和名久々本知俗用莖立二字莖立也とあり
こにやく㊀今いふこむにやくなり和名抄に蒟蒻和名古迩夜久其根肥白以灰汁煑則凝成以苦酒淹食之とあり
そやしまめ○詳ならず
高岳相如○こも傳詳ならす
きしおさり○雄雉をいふ

ねりがき　　すけみ
古はをこねりしかとわひぬれはとねりかきぬも今はきつへし
をはりこめ
池をはりこめたる水のおほけれはいひの口より餘るなるへし
まつたけ
あし曳の山した水にぬれにけりその火まつたけ衣あふらん
厭へともつらき形見を見る時はまつたけからぬねこそなかるれ
くゝたち
山高み花の色をもみるへきにゝくゝたちぬる春霞かな
こにやく
野をみれは春めきにけり青つゝらこにやくましゝ若菜つむへく
そやしまめ　　高岳相如
漁せし類の數へしいつもそやしまめくるとてあわといひしは
きしおさり　　すけみ
あきしのをとりおるへき所あらはうきにしにせぬ身はなけつへし
山からめ
もみち葉に森の色はしみにけり秋の山からめくりこしまに

山からめ○山雀なり
かやくき○和名抄に鵼を訓み字說に鵼加也久支、又左々支ともよめり
つぐみ○和名抄に鶫、豆久見、辨色立成云、馬鳥、とあり
大伴黑主○古今集に見えたり
はらか○和名抄に鯇、本朝式用腹赤二字、とあり、公事根源に、はらかとはますといふ魚也元日節會に腹赤奏さてありと見えたり
さけから○北村氏の抄に鮭瑚とあり
あしきぬ○絁なり
ひほしのあゆ○日に乾したる鮎なり
おしあゆ○押鮎にて元日御歯固にも土佐日記にも見えたり
おきゑ○喫餌にて鷹にかはむ料に餌袋に用意するをいふ
つゝみやき○和名

かやくき
なにとかやくきの妻は思ほえてあやしく花の名こそ忘るれ
つぐみ　　大友黑主
義心あやしくあたに春くれは花につくみといかてなりけん
咲花に思ひつくみのあちきなさ身にいたつきのいるもしらすて
つはくらめ　　すけみ
なにはつはくらめにのみそ舟はつく朝の風の定めなけれは
はらか　　もとすけ
み吉野も若菜つむらん纏向のひはらかすみて日數へぬれは
さけから　　すけみ
絁はさけからみてそ人はきるひろやたえぬと思ふなるへし
ひほしのあゆ
雲まよひほしのあゆくとみえつるは螢の空にとふにそ有ける
おしあゆ
はしたかのおきゑにせんとかまへたるおしあゆかすなねすみとるへく
つゝみやき
吾妹子が身をすてしより猿澤の池のつゝみやきみは戀しき

抄に魚、畏燒也さあり
うるかいり○鯖煎なり
しだゝみ○和名抄貝部に崔禹錫食經云、小甑子貌似二甲甑二而細長とあり
さはやけ○黄菜にてわうさいなこゑもやしたるいふ和名抄に温菘味辛是人作黄菜常所噉者也とあり
まかり○糫餅にて土佐日記にも見えたり
ところ○野老にて和名抄に薢和名土古呂、俗用野老字、漢語抄用野老二字云々とあり
あしかなへ○足ある金のなへにて鼎なり徒然草にに見えたり
むなくるま○空車にて人の乗らぬ車なり
いかるかにけ○斑鳩二毛なり

うるかいり　しだゝみ

此家はうるかいりてもみてしかな主人なからもかはんとそ思ふ

したゝみ　よみ人しらす

東にて養なはれたる人の子はしたゝみてこそ物はいひけれ

さはやけ

はるかせのけさはやけれは鶯のはなの衣もほころひにけり

まかり

霞わけいまかりかへる物ならは秋くるまては戀やわたらん

とちところたちはな　すけみ

思ふとちところもかへす住馴むたちはなれなは戀しかるへし

くちはいろのおしき

足曳の山のこのはのおちくちはいろのおしきそあはれなりける

あしかなへ

津の國の難波わたりに作る田はあしかなへかとえこそ見わかね

むなくるま

たかゝひの又もこなくに繫きいぬの離れていかむなくるまつほと

いかるかにけ　みつね

きさのきのはこ○象牙の箱なり
かのかはの云々○鹿皮の行縢なり

事そともきゝたにわかすわりなくも人のいかるかにけやしなまし

ねすみのとのはらにこをうみたるを　すけみ

年をへて君をのみこそねすみつれことはらにやはこをはうむへき

月のきぬをきて待りけるに

久方の月のきぬをはきたれとも光りはそはぬ我身なりけり

きさのきのはこ

よと共に鹽やく蜑のたえせねはなきさのきのはこかれてそちる

なかむしろ

鶯のなかむしろには我そなく花のにほひやしはしとまると

へうのかは

底へうのかは波わけて入ぬるか待ほと過てみえすもあるかな

かのかはのむかはき

かのかはのむかはき過て深からは渡らてたゝに返るはかりそ

かのえさる

かのえさる舟にてしはし言問はん沖の白浪またたえぬまに

かのとゝいふことを　恵慶法師

さをしかのともまとはせる聲すなり妻や戀しき秋の山べに

ねうしとらうたつみ　よみ人しらず

一夜ねてうしとらこそは思ひけめうき名たつみぞ佗しかりける

むまひつじさるとりいぬゐ

むまれよりひつじつくれは山にさるひとりいぬるに人ゐていませ

四十九日　すけみ

秋風のよもの山よりをのかしゝふくにちりぬる紅葉悲しな

中務卿具平親王○村上天皇の皇子御母は代明親王の女庄子女王なり二品に叙し中務卿に任す寛弘六年七月二十六日薨りぬ後中書王と稱す

清愼公○小野宮實賴なり

藤原高光○九條右大臣師輔の子幼名をまちをさ君さといふ出家して如覺と號し多武峰に住す多武峰少將といふ

藤原仲文○信濃守公葛の二男にて伊賀守に任せられ正暦三年二月卒りぬ

拾遺和歌集卷第八

雜上

月を見侍りて　中務卿具平親王

世にふるに物思ふとしもなけれとも月に幾度詠めしつらん

清愼公家屛風に　貫之

思ふ事ありとはなしに久方の月夜となれはねられさりけり

めにおくれて侍りける比月を見侍りて　大江爲基

なかむるに物思ふ事の慰むは月はうき世のほかよりや行く

法師にならむとおもひたち侍りける比月を見侍りて　藤原たかみつ

かくはかりへかたくみゆる世中に羨ましくもすめる月かな

冷泉院の東宮におはしましける時月をまつ心のうたをのこどものよみ侍りけるに　藤原仲文

有明の月の光を待つほどにわか世のいたくふけにけるかな

参議玄上○中納言諸葛の子にて左大臣三守の孫なり後撰集に見えたり

廉義公○三條太政大臣頼忠なり後院は拾芥抄に後院又四町、三條南、四條坊門北、大宮西、壬生東、此内一町號三條殿とさありこれなるへし

左大將濟時○貞信公忠平の孫にて小一條左大臣師忠の子なり

参議玄上かめの月のあかき夜かとのまへをわたるとて、せうそこいひいれて侍りければ　伊勢

雲ゐにてあひかたらはぬ月たにも我やと過て行く時はなし

花山にまかりて侍りけるに、こまひきの御むまをつかはしたりければ　素性法師

もち月のこまより遲く出つればたどる〳〵ぞ山はこえける

屏風のゑに　つらゆき

つねよりもてりまさるかな山のはの紅葉を分て出る月かけ

みつね

久かたのあまつ空なる月なれといつれの水に影やとるらむ

廉義公後院にすみ侍りける時、うたよみ侍りける人々めしあつめて、水上秋月といふ題をよませ侍りけるに　左大將濟時

みな底に宿る月さへ浮へるをふかきやなにのみくつなるらん

式部大輔文時

水の面に月の沈むをみさりせは我ひとりとや思ひてまし

除目のあしたに、命婦左近かもとにつかはしける

式部大輔文時○菅原道眞の孫にて右大辨高規の子なり從三位式部大輔さなれり

西さかもと○近江國滋賀郡にて比叡山のふもさなり

中務○後撰集に見えたり

大覺寺○嵯峨にありもと嵯峨天皇の離宮なりそのふるき瀧の跡大澤の池の北にありとそ

もとすけ

年ことにたえぬ涙やつもりつゝいとゝふかくは身をしつむらん

圓融院御時、御屏風歌、たてまつりけるついてにそへて、たてまつりける　したかふ

程もなくいつみはかりに沈む身はいかなる罪の深きなるらん

權中納言敦忠か、西坂本の山庄の、瀧のいはにかきつけ侍りける　伊勢

音羽川せきいれておとす瀧つせに人の心の見えもするかな

中務

君かくる宿にたえせぬ瀧の糸はへて見まほしき物にそ有ける

題しらす　つらゆき

流れくる瀧の白糸たえすしていくらの玉の緒とかなるらん

延喜十三年、齋院御屏風、四帖かうたおほせによりて

流くる瀧のいとこそよはからしぬけとみたれて落る白玉

大覺寺に、人々あまたまかりたりけるに、ふるきたきをよみ侍りける　右衛門督公任

瀧の糸はたえて久しく成ぬれと名こそ流れて猶きこえけれ

齋宮〇村上天皇の皇女規子内親王なり

齋宮女御〇重明親王の女徽子女王にて村上天皇の女御となり規子内親王をうみ奉れり

大井河に行幸〇延長八年の事なり

住吉〇攝津國にあり國のつかさの臨時祭は恒例の祭の外にその時の攝津守なにかし臨時に祭を行へるなり

題しらす　みつね

大空をなかめそくらす吹風の音はすれともめにしみえねは

野宮に、齋宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける　齋宮女御

琴のねに峯の松風かよふらしいつれのをより調へそめけん

松風のおとに亂るゝ琴のねをひけはねのひの心ちこそすれ

天暦御時、名ある所を、御屏風にかゝせ給ひて、人々にうたたてまつらせ給ひけるに、たかさこを　忠見

をのへなる松の木すゑはうち靡き浪の聲にそ風もふきける

延喜、御時、御屏風に　つらゆき

雨ふるとふく松風はきこゆれと池のみきはゝまさらさりけり

おなし御時、大井に行幸ありて、人々に歌よませ給ひけるに

大井川かはへの松にことゝはんかゝる行幸やありしむかしを

住吉に、くにのつかさの臨時祭し侍りける舞人にてかはらけとりてよみ侍りける

をとにのみきゝわたりつる住吉の松の千歳をけふみつるかな

かこの島〇播磨國にあり

源道濟〇作者部類五位の部に信明の孫佐渡守方國子寛仁三年卒とあり

五條の内侍のかみの、賀の屏風に、松の海にひたりたる所を　伊勢

海にのみひちたる松の深緑いくしほとかはしるへかるらむ

物へまかるける人に、ぬさつかはしける、衣はこにうきしまのかたきし侍りて　よしのふ

わたつうみの浪にもぬれぬ浮島は松に心をよせてたのまん

題しらす　よみ人しらす

かこの島松はらこしになくたつのあななか〲しきく人なしに

あひかたらひ侍りける人、みちのくにへまかりけれは　よしのふ

いかて猶我身にかへてたけくまのまつともならん行人のため

河原院の、古松をよみ侍りける　源道濟

行末のしるしはかりに殘るへき松さへいたく老にけるかな

題しらす　よみ人しらす

世中をすみよしとしも思はぬに何をまつとて我身へぬらん

つかさたまはらて、なけき侍りけるころ、人のさうしかゝせ侍りけるおくに、かきつけ侍りける　つらゆき

源爲憲○越前守忠幹の子にて伊賀守に任せられ寛弘八年八月卒りぬ

いたつらによにふる物と高砂の松もわれをや友とみるらむ
あかしのうらのほとりを、舟にのりてまかりけるに、　源　爲　憲
よとゝもにあかしの浦の松原は浪をのみこそよるとしるらめ
題しらす　よ　み　人　し　ら　す
藻刈舟今そなきさにきよすなるみきはのたつも聲さわくなり
うち忍ひいさすみのえの忘れ草わすれて人の又やつまぬと
山寺にまかりけるあかつきに、日くらしのなき侍りけれは　左　大　將　濟　時
あさほらけ蜩の聲きこゆなりこやあけくれと人のいふらん
天暦御時、御屛風のゑに、なからのはしの橋柱の、わつかにのこれるかたありけるを　藤　原　き　よ　た　ゝ
あしまよりみゆるなからの橋はしら昔の跡のしるへなりけり
大江爲基かもとに、うりにまうてきたりけるかゝみの、つゝみたりけるかみに、かきつけて侍りける　よ　み　人　し　ら　す

橘忠幹○長門守忠盛の子にて駿河守に任せらる

月林寺○山城國にあるなるべし
藤原後生

けふまてとみるに淚のます鏡なれにし影を人にかたるな
たちはなのたゝもとか、人のむすめにしのひて物いひ侍りけるころ、とをき所にまかり侍るとて、この女のもとにいひつかはしける　橘　忠　幹
忘れなよほとは雲ゐになりぬとも空行く月の廻りあふまて
題しらす　つ　ら　ゆ　き
年月は昔にあらすなりゆけと戀しき事はかはらさりけり
淸愼公、月林寺にまかりけるに、おくれてまうてきて、よみ侍りけり　藤　原　後　生
昔わかをりし桂のかひもなし月のはやしのめしにいらねは
菅原の大臣、かうふりし侍りける夜、母のよみ侍りける
久方の月のかつらもをるはかり家の風をもふかせてしかな
題しらす　ひ　と　ま　ろ
月草に衣はすらむあさ露にぬれてのゝちはうつろひぬとも
ちくわくに人はいふともをりてきん我はた物に白きあさきぬ
久方のあめにはきぬをあやしくもわか衣手のひる時もなき
白浪はたてと衣にかさならす明石もすまもをのかうらく

もろこしへつかはしける時によめる

夕されは衣手寒しわきもこかときあらひ衣ゆきてはやきん

なかされ侍りける道にてよみ侍りける

贈太政大臣　菅

天つほし道も宿りもありなから空にうきても思ほゆるかな

うき木といふ心を

流れ木もみとせありては相見てん世のうき事そ歸らさりける

つかさとられて侍りける時いもうとの女御の御もとにつかはしける

平　定　文

浮世には門させりともみえなくになとか我身のいてかてにする

中宮長恨歌の御屛風に

伊　勢

木にもおひす羽も並へてなにしかも浪路隔てゝ君をきくらん

大津の宮のあれて侍りけるをみて

人　ま　ろ

さゝ浪やあふみの宮はなのみして霧たなひき宮木もりなし

初瀬へまてけるみちに佐保山のわたりにやとりて侍りけるに千鳥のなくをきゝて

よ　し　の　ふ

曉のねさめの千鳥たかためかさほの河原にをちかへりなく

中宮○七條の后溫子なるへし

大津の宮○天智天皇の故宮にて近江國なり

物へまかりける人のもとにぬさをむすひふくろに入れてつかはすとて

淺からぬ契結へることゝろはゝたむけのかみそしるへかりける

はつせの道にてみわの山をみ侍りて

も　と　す　け

三輪の山しるしの杉はありなから敎へし人はなくていくよそ

對馬守小野のあきみちかめおきかくたり侍りける時にともまさの朝臣のめ肥前かよみてつかはしける

おきつしま雲井の峯をゆき返りふみ通はさんまほろしもかな

詠天

ひ　と　ま　ろ

空の海に雲の浪たち月の舟ほしのはやしにこきかへるみゆ

もをよめる

川のせのうつまくみれは玉もかるちり亂れたる川の舟かも

山をよめる

なる神の音にのみきくまきもくの檜原の山をけふみつるかな

詠葉

古にありけむ人もわかとやみわのひはらにかさし折けん

對馬守小野のあきみち

題しらす

人しれすこゆと思ふらしあし引の山した水に影は見えつゝ

伊勢のみゆきにまかりとまりて　人まろ

おふの海にふなのりすらん吾妹子か赤もの裙に潮みつらんか

天暦十一年九月十五日齋宮くたり侍りけるに、内よりすゝりてうしてたまはすとて　御製

思ふ事なるといふなるすゝか山こえてうれしき境とそきく

圓融院御時、齋宮くたり侍りけるに、母の前齋宮もろともにこえ侍りて　齋宮女御

世にふれは又もこえけり鈴か山昔の今になるにやあるらん

あすかの女王をおさむる時よめる　人まろ

飛鳥川しからみわたしせかませは流るゝ水ものとけからまし

小一條左大臣、まかりかくれて後、かの家に侍りける、つるのなき侍りけるをきゝ侍りて　小野宮太政大臣

おくれゐてなくなるよりはあしたつのなとか齢を譲らさりけん

左大臣の、つちみかとの左大臣のむこになりてのち、したうつのかたをとりにおこせて侍りけれは

年をへてたちならしつるあしたつのいかなる方に跡留むらん　愛宮

大貳國章、こくのおひをかり侍りけるをつくしよりのほりて、返しつかはしたりけれは　もとすけ

行末の忍ふ草にもありやとて露のかたみもおかんとそ思ふ

題しらす　中務

植てみる草葉そ世をはしらせけるおきてはきゆるけさの朝露

ゐなかにてわつらひ侍りけるを、京より人のとふらひにおこせて侍りけれは　ゆけのよしとき

露の命おしとにはあらす君を又みてやと思ふそ悲しかりける

神明寺の邊に、無常所まうけて侍りけるか、いとおもしろく侍りけれは　もとすけ

惜からぬ命やさらにのひぬらむをはりの煙しむる野へにて

二條右大臣、左近番長佐伯清忠をめして、うたよませ侍りけるを、のそむ事侍りけるか、かなひ侍らさりけるころにて、よみ侍りける

限なき涙のつゆにむすはれて人のしもとはなるにやあるらん

伊勢のみゆき○持統天皇朱鳥六年なり日本紀及ひ萬葉集に見えたり
齋宮
御製○村上天皇なり
齋宮○徽子女王前齋宮は式部卿重明親王の女旅子女王なり
あすかの女王○天智天皇の皇女にて文武天皇四年四月に薨りぬ
小一條左大臣○貞信公忠平の子師尹にて安和二年十月十五日薨り後正一位を贈くる
左大臣○源高明にて土御門左大臣は敦實親王の子源雅信をいふ愛宮は九條左大臣師輔の第五女にて高明の本妻民部卿俊賢の母なり
大貳國章○參議元名の子にて宮太夫さいへり下に皇太后宮權太夫とあり
ゆけのよしさき
神明寺○所史詳ならす無常所は火葬なさする所をいふ
二條右大臣○粟田右大臣道兼をいふ上に註せり
左近番長佐伯清忠○父祖および傳詳ならす

加階し侍るべかりけるとしはし侍らで、雪のふりけるをみて　もとすけ

浮世にはゆき隠れなで掻垂りふるは思ひのほかにも有かな

つかさ申すに、たまはらさりける比、人のとふらひにおこせたりける返ことに　源景明

わひ人はうき世中にいけらしと思ふ事さへかなはさりけり

題しらす　よみ人しらす

世中にあらぬ所もえてしかな年ふりにたるかたちかくさん

世中をかくいひ〱てはて〱はいかにやいかにならむとすらむ

をとこ侍りける女を、せちにけさうし侍りて、をとこのいひつかはしける

古の虎のたくひに身をなけはさかとはかりはとはんとそ思ふ

元良のみこ○上に註せり
承香殿○宇多天皇の女御胤子にて内大臣高藤の〻ゝ醍醐天皇の御世なりとしこはこの女御に宮仕へせる後子さて藤原千兼の妻なるよし大和物語に見えたり
大納言朝光○堀河太政大臣兼通の三男にて閑院左大将と號す母は兵部卿有明親王の御女なり

拾遺和歌集巻第九

雜　下

ある所に、春秋いつれかまさる、ととはせ給ひけるに、よみてたてまつりける　紀貫之

春秋に思ひみたれてわきかねつ折につけつゝうつる心は

元良のみこ、承香殿のとしこに、春秋いつれかまさるととひ侍りけれは、秋もおかしう侍りといひけれは、おもしろきまくらを、これはいかゝといひて侍りけれは

おほかたの秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし

題しらす　よみ人しらす

春はたゝ花のひとへにさくはかり物の哀れは秋そまされる

圓融院のうへ、うくひすと郭公と、いつれかまさると申せ、とおほせられけれは　大納言朝光

おりからにいつれともなき鳥の音もいかゝ定めん時ならぬ身は

みつねたゝみねにとひ侍りける　參議伊衡

白露はうへよりおくをいかなれは萩の下葉のまつもみつらん

こたふ　みつね

さを鹿のしからみふする秋萩は下葉やうへになりかへるらん

たゝみね

秋萩はまつさすはより移ろふを露のわくとは思はさらなむ

又とふ　これひら

千年ふる松の下葉の色つくはたかしたかみにかけてかへすそ

こたふ　みつね

松といへと千年の秋におひくれはしのひに落る下葉なりけり

又とふ　これひら

白妙の白き月をもくれなゐの色をもなとかあかしといふらん

こたふ　みつね

昔よりいひしきにける事なれはおれらはいかゝ今は定めむ

又とふ　これひら

かけみれは光なきをも衣ぬふ糸をもなとかよるといふらん

こたふ　みつね

むは玉のよるは戀しき人にあひて糸をもよれはあふとやはみぬ

のふし〇野伏僧の事なり
源經房朝臣〇西宮左大臣高明の三男なり

又とふ　伊衡

よる晝の數はみそちにあまらぬをなと長月といひはしめけむ

こたふ　みつね

秋深み戀する人のあかしかね夜を長月といふにやあるらん

歌合のあはせすなりにけるに　よみ人しらす

水の泡やたねとなるらん浮草のまく人なみのうへにおふれは

（このうたつらゆきか集にあり）

草合し侍りける所に　惠慶法師

種なくてなき物草はおいにけりまくてふ事はあらしとそ思ふ

なそ〳〵ものかたりしける所に　そねのよしたゝ

我事はえもいはしろの結ひ松千歳をふともたれかとくへき

題しらす　よみ人しらす

足曳の山のこてらにすむ人はわかいふともかなはさりけり

健守法師佛名のふしにてまかりいてゝ侍りけるとしいひつかはしける　源經房朝臣

山ならぬ住るあまたにきく人は野伏にとくも成にけるかな

返し　健守法師

勅なれは○此歌大鏡には貫之か女のよし載せたり

すそうはら○從僧はらにて從僧は僧正僧都等官に應し數定ありて召し具せらるゝ事なり

壽玄法師○傳詳ならす

山ふしものふしもかくて心みつ今はとねりの閨そゆかしき

屏風に、法師の舟にのりてこきいてたる所

右大將道綱母

わたつ海はあまの舟こそ有ときけのり違へても漕いてたる哉

内裡より、人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに、うくひすのすくひて侍りけれは、家のあるしの女まつかくそうせさせ侍りける

勅なれはいともかしこし鶯の宿はととはゝいかゝこたへん

（かくそうせさせけれはほらすなりけり）

ある所に、せ經し侍りける法師のすそうはらのゐて侍りけるに、すたれのうちより花ををりて、といひ侍りけれは

壽玄法師

いなをらし露に袂のぬれたらは物思ひけりと人のこそみん

月を見侍りて

よしのふ

梓弓はるかに見ゆる山のはをいかてか月のさして入らん

かもにまうてゝ侍りけるをとこの見侍りて、いまはなかくれそ、いとよく見てき、といひおこせて侍りけれは

車のかも○釭にて和名抄に釭轂口鐵也とあり

廉義公○頼忠なり

あをうま○只青色の馬なり白馬節會にはあらさるへし

そらめをそ君はみたらし川の水淺しや深しそれはわれかは

伊勢

能宣に、車のかもをこひにつかはして侍りけるに、侍らすといひて侍りけれは

藤原仲文

鹿をさして馬といふ人ありけれはかもをもをしと思ふなるへし

返し

よしのふ

無といへはをしむかもとや思ふらんしかや馬とそいふへかりける

廉義公家のかみゑに、あを馬ある所に、あしのはなけのむまある所

惠慶法師

難波江の芦のはなけのましれるは津の國かひの駒にやあるらん

津の守に侍りける人のもとにて

たゝみ

難波潟しけりあへるは君か代にあしかるわさをせねはなるへし

津の國にまかれりけるに、しりたる人にあひ侍りて

都にはすみわひはてゝつの國の住よしときく里にこそゆけ

なにはに、はらへしに、ある女まかりたりけるに、もとしたしく侍りけるをとこの、あしをかりて、あやしきさまなり道にあひて侍りけるに、さりけなくて、としころえあはさりつる

いせの御息所○藤原繼蔭の女伊勢にて宇多天皇の御子をうみ奉れるなり○藤壺麗景殿○さきに上に注せり○女御みやのきみ○女房につかへし女房のよび名なり○菅原道雅女房○道雅も傳詳ならす

近江のこふ○國府にて和名に栗本郡にあり

ことなどいひつかはしたりければ、をとこのよみ侍りける

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞすみうき

返し

あしからじよからむとてぞ別れけん何か難波の浦はすみうき

伊勢の御息所うみたてまつりたりける皇子の、なくなりにけるが、かきおきたりけるゑを、藤壺より麗景殿の女御のかたにつかはしたりければ、このゑをかへすとて

麗景殿みやのきみ

なき人の形見と思ふに怪しきはゑみても袖のぬるゝなりけり

菅原道雅女

地獄のかたかきたるをみて

みつせ川渡るみさをもなかりけり何に衣をぬきてかくらん

こその秋、むすめにおくれて侍りけるに、むまこの後の春、兵衛佐になりて侍りけるよろこびを、人々いひつかはし侍りければ

皇太后宮權太夫國章

かくしこそ春の始は嬉しけれつらきは秋のをはりなりけり

源重之か母の、近江のこふに侍りけるに、むまこのあつまより、よるのほりて、いそく事はへりて、えこのたひあはてのほりぬるよしいひて侍りければ、おはの女のよみ侍りける

親の親と思はましかはとひてまし我子の子にはあらぬなるへし

題しらす　人まろ

山高み日夕隠れぬあさちはらのちみむためにしめゆはしまを

貫之

名のみして山はみ笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふかも

よみ人しらす

なのみしてなれるもみえす梅津川ゐせきの水ももれはなりけり

名にはいへと黒くも見えす漆川さすかに渡る水はぬるけれ

雨ふる日、おほはら川をまかりわたりけるに、ひるのつきたりければ

恵慶法師

世中にあやしきものは雨ふれと大原川のひるにそありける

仲文

かうふりやなきをみて

河柳糸は緑にあるものをいつれかあけのころもなるらん

天暦御時、一條攝政、藏人頭にて侍りけるに、おびをかけて御碁あそばしけるに、まけたてまつりて、御かすおほくなり侍りければ、おびを返し給ふとて

御製

梅津川○山城にあり

漆川○筑前國なり

大原川○こも山城なり

一條攝政殿○謙徳公伊尹なり

御製○村上天皇なり

白浪のうちや返すとまつほとに濱のまさこの數そつもれる

內侍馬か家に、右大將實資か、わらはに侍りける時、非うちに
まかりたりけれは、ものかゝぬさうしをかけ物にして侍り
けるを見侍りて　小野宮太政大臣

いつしかとあけてみたれは濱千鳥跡あることにあとのなきかな

返し

とゝめても何にかはせん濱千鳥ふりぬる跡は浪にきえつゝ

題しらす　よみ人しらす

氷底のわくはかりにやかゝるらんまるひともなき瀧のしら糸

清原元輔肥後守に侍りける時、かのくにのつゝみのたきと
いふ所をみにまかりたりけるに、ことやうなる法師のよみ
侍りける

音にきく鼓の瀧をうちみれはたゝ山川のなるにそありける

三位國章、ちひさきうりを扇におきて、藤原かねのりにもた
せて、大納言朝光か兵衛佐に侍りける時、つかはしたりけれ
は

音にきくこまのわたりの瓜作りとなりかくなりなる心かな

> 內侍馬○大和權守時明のなり實資上に見えたり
>
> 藤原かねのり○傳詳ならす

返し

定めなくなる長瓜のつゝみてもたちやよりなんこまのすきもの

みちのくに、なとりのこほり、くろつかといふ所に、重之かい
もうと、あまたありときゝて、いひつかはしける　かねもり

陸奥の安達かはらのくろつかに鬼こもれりときくはまことか

廉義公家のかみゑに、たひ人のぬす人にあひたるかたかけ
る所　藤原爲頼

盗人のたつたの山に入にけりおなしかさしの名にやけかれん

なき名のみ立田の山の麓には世にもあらしの風もふかなむ

高尾にまかりかよふ法師に名たち侍りけるを、少將しけも
とかきゝつけて、まことかといひつかはしたりけれは
八條のおほいきみ

なき名のみ高尾の山といひたつる君はあたこの峯にやあるらん

みたけに、としおいてまうて侍りて

いにしへも登りやしけん吉野山やまより高きよはひなる人

大隅守櫻島の忠信か、くにゝ侍りける時、こほりのつかさ、か

> 鬼こもれり○重之が妹ともをさして戯れいつるなり
>
> 少將しけもと○つまひらかならす八條のおほいきみ
>
> みたけ○吉野金峰山をいふ
>
> 大隅守云々○この事宇治拾遺にも見

えたり

かしらしろきおきなの侍りけるを、めしかんかへんとし侍りけるに、おきなのよみ侍りける

老はてゝ雪の山をは戴けとしもとみるにそ身はひえにける

(このうたによりてゆるされ侍りにける)

旋頭歌

ますかゝみそこなる影にむかひゐてみる時にこそしらぬ翁にあふ心ちすれ

柿本人まろ

ますかゝみ見しかとおもふいもにあはむかも玉のをのたえたる戀のしけきこのころ

かのをかに草かるをのこしかなかりそありつゝも君かきまさんみまくさにせむ

女のもとにまかりたりけるに、とくいりにけれは、あしたに　源かけあきら

あつさ弓おもはすにしていりにしをさもねたくひきとゝめてそふすへかりける

長歌

勘解由の判官〇官位令に相當從六位下とあり

よしのゝ宮にたてまつるうた　人まろ

ちはやふる、わかおほきみの、きこしめす、あめのしたなる、くさの葉も、うるひにたりと、やま川の、すめるかうちと、みこゝろを、よしのゝくにの、はなさかり、秋津の野へに、宮はしら、ふとしきまして、もゝしきの、おほみや人は、舟ならへ、あさ川わたり、ふなくらへ、ゆふかはわたり、このかはの、たゆることなく、このやまの、いやたかゝらし、たまみつの、たきつのみやこ、みれとあかぬかも、

反歌

見れとあかぬ吉野の河の流れてもたゆる時なく行かへりみん

身のしつみぬることをなけきて、勘解由判官にて

源したかふ

あら玉の、としのはたちに、たゝさりし、ときはのやまの、やまさむみ、風もさはらぬ、ふちころも、ふたゝひたちし、あさ霧に、こゝろもそらに、まとひそめ、みなしこ草に、なりしより、物おもふとの、葉をしけみ、けぬへき露の、よるはおきて、なつはみきはに、もえわたる、螢を袖に、

ひろひつゝ、冬は花かと、みえまかひ、このもかのもに、
ふりつもる、雪をたもとに、あつめつゝ、ふみみていてし、
みちはなを、身のうきにのみ、ありけれは、こゝもかしこも、
あしねはふ、したにのみこそ、しつみけれ、たれこゝのつの、
さは水に、なくたつのねを、久かたの、雲のうへまて、
かくれなみ、たかくきこゆる、かひありて、いひなかしけむ、
人はなを、かひもなきさに、みつしほの、よにはからくて、
すみのえの、まつはいたつら、おいぬれと、みとりのころも、
ぬきすてん、はるはいつとも、しら浪の、なみちにいたく、
ゆきかよひ、ゆもとりあへす、なりにける、舟のわれをし、
君しらは、あはれいまたに、しつめしと、あまのつりなは、
うちはへて、ひくとしきかは、物はおもはし、

返し　[illegible]よしのふ

世中を、おもへはくるし、わするれは、えもわすられす、
たれもみな、おなしみ山の、松か枝と、かるゝ事なく、
すへらきの、ちよもや千世も、つかへんと、たかきたのみを、
かくれぬの、したよりねさす、あやめ草、あやなき身にも、

人なみに、かゝるこゝろを、おもひつゝ、よにふるゆきを、
君はしも、冬はとりつみ、夏はまた、くさのほたるを、
あつめつゝ、ひかりさやけき、久かたの、月のかつらを、
をるまてに、時雨にそほち、露にぬれ、へにけん袖の、
ふるみとり、色あせかたに、いまはなる、かつした葉より、
くれなゐに、うつろひはてん、秋にあはゝ、まつひらけなん、
花よりも、木たかきかけと、あふかれん、ものとこそみし、
しほかまの、うらさひしけに、なそもかく、よをしもおもひ、
なすのゆの、たゆるゆへをも、かまへつゝ、わか身を人の、
身になして、おもひくらへよ、もゝしきに、あかしくらして、
とこなつの、くもゐはるけき、ひとなみに、おくれてなひく、
我もあるらし、

あるをとこの物いひ侍りける女の、しのひてにけ侍りて、としころありてせうそこして侍りけるに、をとこのよみ侍りける　[illegible]よみ人しらす

いまはとも、いはさりしかと、やをとめの、たつやかすかの、
ふるさとに、かへりやくると、まつちやま、まつほとすきて、

東三條太政大臣○兼家なり上に註せりこの公兄堀川太政大臣兼通と中あしくて終に兼通のために貞元二年十

かりかねの、雲のよそにも、きこえねは、我はむなしき、
玉つさを、かくてもたゆく、むすひおきて、つてやるかせの、
たよりたに、なきさにきゐる、夕ちとり、うらみはふかく、
みつしほに、袖のみいとゝ、ぬれつゝそ、あともおもはぬ、
きみにより、かひなきこひに、なにしかも、我のみひとり、
うき舟の、こかれてよには、わたるらむ、とさへそはては、
かやり火の、くゆる心も、つきぬへく、おもひなるまて、
おとつれす、おほつかなくて、かへれとも、けふみつくきの、
あとみれは、ちきりしことは、君もまた、わすれさりけり、
しはしおらは、たれもうき世の、あさ露に、光まつまの、
身にしあれは、おもはしいかて、とこなつの、花のうつろふ、
秋もなく、おなしわたりに、すみのえの、岸のひめ松、
ねをむすひ、世々をへつゝも、しも雪の、ふるにもぬれぬ、
なかとなりなん、

圓融院御時大將はなれ侍りて後久しくまいらてそうせさせ侍りける

東三條太政大臣

あはれわれ、いつゝの宮の、みや人と、その數ならぬ、

月十一日兼家の大納言大將を罷められたり其時の歌なり事は榮花物語花山の巻に見えたり巻いつゝの宮○圓融院を申す村上天皇第五皇子なれはなり

身をなして、おもひしことは、かけまくも、かしこけれとも、
たのもしき、かけにふたゝひ、おくれたる、ふた葉のくさを、
ふくかせの、あらきかたには、あてしとて、せはきたもとを、
ふせきつゝ、ちりもすゑしと、みかきては、玉のひかりを、
たれかみむと、おもふこゝろに、おほけなく、かみつえたをは、
さしこえて、花さく春の、みや人と、なりし時はゝ、
いかはかり、しけきかけとか、たのまれし、すゑの世まてと、
おもひつゝ、こゝのかさねの、そのなかに、いつきすゑしも、
ことてしも、たれならなくに、をやまたを、人にまかせて、
われはたゝ、たもとそほつに、身をなして、ふた春三春、
すくしつゝ、その秋冬の、あさきりの、たえまにたにも、
とおもひしを、みねのしら雲、よこさまに、たちかはりぬと、
見てしかは、身をかきりとは、おもひにき、命あらはと、
たのみしは、人におくるゝ、なゝりけり、思ふもしるし、
やま川の、みなしもなりし、もろ人も、そこかぬきしに、
まもりおけて、しつみむくつの、はて〳〵は、かきなかきれし、
神な月、うすきこほりに、とちられて、とまれるかたも、

いなふれの○古今集にもゝみ河のほれはくたる稲舟のいなにはあらすこの月はかりさある題の句なり

なきおふる、涙をしつみて、かそふれは、ふゆも三月に、なりにけり、なかきよな〳〵、しきたへの、ふさすやすさす、あけくらし、おもへともなを、かなしきは、やそうち人も、あたらよの、ためしなりとそ、さわくなる、ましてかすかの、すきむらに、いまたかれたる、枝はあらし、大原野への、つほすみれ、つみをかしある、ものならは、てる日も見よと、いふことを、としのをはりに、きよめすは、我身そつゐに、くちぬへき、谷のむもれ木、春くとも、さてやゝみなん、としのうちに、春ふくかせも、こゝろあらは、袖のこほりを、とけとふるなん、

これか御返、たゝいなふねの、とおほせられたりけれは、又御

返し

いかにせん我身くたれるいな舟のしはしはかりの命たえすは

拾遺和歌集巻第十

神樂歌

榊葉にゆふしてかけてたか世にか神の御前に祝ひそめけむ

榊葉のかをかくはしみとめくれはやそ氏人そまとゐせりける

御幣にならまし物をすへ神のみてにとられてなつさはましを

御幣はわかにはあらす天にますとよをか姫の宮のみてくら

逢坂をけさこえくれは山人のちとせつけとてきれる杖なり

よも山の人のたからとする弓を神の御前にけふたてまつる

石の上ふるやをとめのたちもかなくみのをしてゝ宮ち通はん

銀のめぬきのたちをさけはきてならの都をねるやたかこそ

我駒は早くゆかなんあまひこかやへさすをかの玉篠の上に

さゝいはりに衣はすらむ雨ふれとうつろひかたし深く染ては

しなか鳥いなの伏原とひわたる鳴のはね音おもしろきかな

住吉のきしもせさらむ物ゆゑに妬くや人にまつといはれん

（ある人のいはく住吉明神のたくせんとそ）

ちはや○神子の着るものなり

箱崎○筑前國なり古戒定惠の箱を埋めてしるしに松をうえたり故にしかいふといへり今八幡社あり

源遠古

僧都實因○系圖詳ならす

源兼澄○鎮守府將軍信孝の子にて加賀守に任せらる

左兵衛督高遠賀茂に七日まうてけるはての夢にみやしろよりとてちはやきたるをうなのふみをもてまてきたりけるをあけて見侍りけれはかくかきて侍りける、そののち太貳になりて侍りける

ゆふ襷かゝる袂は煩はしゆたけにとけてあらむとをしれ

すみよしにまうてゝ　安法法師

あまくたるあら人かみのあひおひをおもへは久し住吉の松

惠慶法師

我とはゝ神代のこともこたへなむむかしをしれるすみ吉の松

はこさきをみ侍りて　重之

幾世にか語り傳へんはこさきの松の千年のひとつならねは

源遠古朝臣子うませて侍りけるに　元輔

おひしけれむら野の原のあや杉よこき紫に立かさねつゝ

ひえのやしろにてよみ侍りける　僧都實因

ねきかくるひえの社のゆふたすき草のかきはもとやめてきけ

恒德公家障子　源兼澄

大よとのみそきいくよになりぬらん神さひにたる浦の姫松

粟田右臣○道兼なり

平祐擧○越前守保衡の子にて駿河守に任し太皇大后宮大進なりたり長和比の人なり

安和元年○冷泉天皇の年號なり

なから山○近江國なり

いはくら山○こも近江國滋賀郡にあり

みかみの山○こも近江國にあり

やす川○三上山の麓なり

粟田右大臣家の障子にからさきに祓したる所に網ひくかたかける所　平祐擧

みそきするけふ唐崎におろす網は神のうけひくしるし成けり

題しらす　人まろ

千早振神のたもてる命をはたれかためにかなかくとおもはん

千早振神もおもひのあれはこそ年へてふしの山ももゆらめ

安和元年大嘗會風俗なからの山　大中臣能宣

君か代のなからの山のかひありとのとけき雲のゐる時そみる

小浪のなからの山の長らへて樂しかるへき君か御代かな

いはくら山　よみ人しらす

動きなきいはくら山に君か代をはこひおきつゝ千世をこそつめ

みかみの山　よしのふ

千早振みかみの山のさか木はゝさかえそまさる末の世までに

讀人しらす

萬代の色も變らぬさかき葉はみかみの山におふるなりけり

もとすけ

萬代をみかみの山のひゝくにはやすの川水すみそあひにける

おほくら山○こも近江國なり
みを山○近江高島郡水尾山なり
かゝみ山○こも近江國なり
松かさき○こも近江なり
おものゝ濱○これも近江にあり
天祿元年○圓融天皇の年號なり
千世能山○丹波國桑田郡なり
いやたかの山○備中にも同名あれとこれは近江國なり

おほくら山　よしのぶ

みつきつむおほくら山はときはにて宮もかはらす萬代やへん

みを山　讀人しらす

たかしまやみをの中山そまたてゝ作り重ねよ千世のなみくら

かゝみ山　よしのぶ

見かきける心もしるし鏡山くもりなき世にあふかたのしさ

松かさき　清原元輔

千歳ふる松かさきにはむれゐつゝたつさへあそふ心あるらし

おものゝはま　かねもり

滯る時もあらしなあふみなるおものゝ濱のあまのひつきは

天祿元年大嘗會風俗千世能山　よしのぶ

今年よりちとせの山は聲たえす君か御代をそ祈るへらなる

いやたかの山　かねもり

近江なるいやたか山の榊にて君かちよをはいのりかさらむ

みかみの山　よしのぶ

祈りくるみかみの山のかひしあれは千歳の蔭にかくて仕へん

いはくら山

けふよりは岩倉山に萬代を動きなくのみつまむとそ思ふ

おほくにの里○こも近江國にあり
よしたの里○山城に同名あれど近江にあるにや
いつみ川○こも近江國にあるなるへし山城にはあらし
清貫○上に見えたり恒佐は右大臣良世の子にて右大臣となり天慶元年五月薨りぬ世に土御門右大臣と稱す

かゝみ山　中務

よろつ世をあきらけくみむ鏡山千歳の程はちりもくもらし

おほくにのさと　かねもり

年もよしこかひもえたりおほくにの里樂もしく思ほゆるかな

よしたの里

名にたてるよし田の里の杖なれはつくともつきし君か萬代

いつみ川

泉川のとけき水のそこみれはことしはかけそすみまさりける

まつかさき

鶴のすむ松か崎にはならへたるちよのためしをみするなりけり

延長四年八月廿四日、民部卿清貫か、六十賀、中納言恒佐、妻し侍りける時の屏風に、かくらする所のうた　つらゆき

足ひきの山の榊葉ときはなるかけにさかゆる神のきねかな

たひにてよみ侍りける　人まろ

おほなむちすくなみ神の作れりし妹背の山をみるそ嬉しき

亭子院○宇多天皇なり
藤原忠房○この時の國守なるへし然るに延喜二十二年大和守に任すされたる本あり尚考ふへし

延喜廿年亭子院のかすかに御幸侍りけるにくにのつかさ廿一首歌よみてたてまつりけるに　藤原忠房

珍しきけふの春日のやをとめを神もうれしとしのはさらめや

しる人のなき○後撰集にはえやは見せけるとあり
平公誠○陸奥守元平の子にて周防守なり

拾遺和歌集卷第十一

戀一

天暦御時歌合　　壬生忠見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

　　　　　　　　平兼盛

忍ふれと色に出にけり我こひは物やおもふと人のとふまて

題しらす　　　　貫之

色ならはうつるはかりもそめてまし思ふ心をしる人のなき

女のもとに、はしめてつかはしける　　平公誠

しのふるも誰ゆゑならぬ物なれは今は何かは君にへたてん

題しらす　　　　よみ人しらす

歎餘りつゐに色にそ出ぬへきいはぬを人のしらはこそあらめ

逢事をまつにて年のへぬるかな身は住の江におひぬ物ゆゑ

おとにきく人に心の筑波ねのみねと戀しき君にもあるかな　　ひとまろ

くにさ○邦正にて式部卿重明親王の子なり源姓を賜はり從四位下侍從左京大夫に任し青侍從さ號し世に背常ともいへり色にいてす○一本に色にいてめやとありつゝみの中納言○藤原兼輔卿なり○みやす所○張正尹明親王の御母にて

天雲のやへくもかくれなる神の音にのみやはきゝわたるへき

よみ人しらす

みぬ人の戀しきやなそおほつかな誰とかしらむ夢にみゆとも

夢よりそ戀しき人をみそめつる今はあはする人もあらなん

かくてのみありその浦の濱千鳥よそになきつゝ戀や渡らむ

よそにのみ見てやはこひん紅のすゑつむ花の色にいてすは

まさたゝかむすめにいひはしめ侍りける、侍從に侍りける時

權中納言敦忠

身にしみて思ふ心のとしふれはつゐに色にも出ぬへきかな

侍從に侍りける時、女にはしめてつかはしける

くにまさ

いかてかはしらせそむへき人しれす思ふ心の色にいてすは

權中納言敦忠

いかてかはかく思ふてふ事をたに人傳ならて君にしらせん

つゝみの中納言のみやす所を、みてつかはしける

小野宮太政大臣

あな戀しはつかに人をみつの泡の消返るともしらせてしかな

兼輔卿の御女桑子なり

返し

なかゝらしと思ふ心は水の泡によそふる人の賴まれぬ哉

題しらす

よみ人しらす

湊いつるあまの小舟のはかりなはくるしき物と戀をしりぬる

大井河くたすいかたのみなれさほみなれぬ人も戀しかりける

人まろ

水底におふる玉ものうちなひき心をよせてこふるころかな

よみ人しらす

音にのみきゝつる戀を人しれすつれなき人にならひぬる哉

いかゝせん命はかきりある物を戀はわすれす人はつれなし

女のもとに、をとこのふみをつかはしけるに、返事もせす侍りけれは

山彦もこたへぬやまの呼子鳥我ひとりのみなきやわたらん

題しらす

山彦は君にもにたるこゝろかな我聲せねはおとつれもせす

足曳の山したとよみ行水のときそともなくこひわたるかな

いかにしてしはし忘れん命たにあらは逢夜の有もこそすれ

九條右大臣○師輔なり

中務○前に見えたり

大原野祭の日○二月上酉日なり
一條攝政○謙徳公伊尹なり

ぬき亂る涙の玉もとまるやとたまのをはかり逢んといはなん
岩の上におふる小松もひきつれと猶ねかたきは君にそ有ける
七夕もあふ夜ありけり天の川このわたりにはわたるせもなし
九條右大臣
よみ人しらす
きはにのみ年はへぬれとあしたつの心は雲の上にのみこそ
お捉空はくもらさりけり神な月時雨こゝちは我のみそする
忍ふれと猶しゐてこそ思ほゆれ戀といふ物の身をしさらねは
をとこのよみて、おこせて侍りける
哀ともおもはし物を白雪のしたに消えつゝなほもふるかな
中務
かへし
程もなくきえぬる雪はかひもなし身をつみてこそ哀れと思はめ
題しらす
よみ人しらす
よそながらあひ見ぬ程に戀しなは何にかへたる命とかいはむ
いつとてかわか戀やまむ千早振あさまのたけの煙たゆとも
大原野祭の日、さか木にさして、女のもとにつかはすとて
一條攝政

寛祐法師○公忠朝臣の子と抄に見えたり

おほはらの神もしるらん我戀はけふ氏人のこゝろやらなむ
返し
よみ人しらす
榊葉の春さす枝のあまたあれはとかむる神もあらしとそ思ふ
題しらす
あめつちの神そしるらん君かため思ふ心のかきりなけれは
海もあさし山もほとなし我戀を何によそへて君にいはまし
人まろ
奥山のいはかきぬまのみこもりに戀や渡らむあふよしをなみ
大嘗會の御禊に、物見侍りける所に、わらはの侍りけるをみて、又の日つかはしける
寛祐法師
あまた見しとよのみそきのもろ人の君しも物を思はするかな
題しらす
よみ人しらす
玉すたれ糸のたえまに人をみてすける心はおもひかけてき
玉たれのすける心とみてしよりつらしてふ事かけぬ日はなし
我こそや見ぬ人こふるやまひすれあふひならてはやむ藥なし
玉えこく菰刈舟のさしはへて浪まもあらはよらむとそ思ふ
みるめかるあまとはなしに君こふる我衣手のかわく時なき

柿本人麿

み熊野の浦の濱ゆふもゝへなる心は思へとたゝにあはぬかも

つらゆき

あさな〳〵けつれは積るおちかみの亂れて物を思ふ頃かな

けさうし侍りける女の、さらに返ことし侍らさりけれは

藤原實方朝臣

我ためはたなゐの清水ぬるけれと猶かきやらむさてはすむやと

返し　よみ人しらす

かきやらは濁こそせめあさきせのみえつは誰かすませてもみん

題しらす

人しれぬ心のうちをみせたらは今まてつらき人はあらしな

女のもとにつかはしける　小野宮太政大臣

人しれぬ思ひは年もへにけれと我のみしるはかひなかりけり

女のもとにつかはしける　よみ人しらす

人しれぬ涙に袖はくちにけり逢夜もあらはなにゝつゝまん

かへし

君はたゝ袖はかりをやくたすらん逢には身をもかふとこそきけ

なかす○長洲に流すをかれたり

大伴百世○一本に大江とありて作者部類に云部少輔とあり父祖詳ならす

題しらす

人しれすおつる涙は津の國のなかすとみえて袖そくちぬる

戀といへは同し名にこそ思ふらめいかて我身を人にしらせん

天暦御時歌合に　中納言朝忠

逢事のたえてしなくは中々に人をも身をも恨みさらまし

題しらす　かねもり

逢ヿは片いさりするみとりこのたゝむ月にもあはしとやする

よみ人しらす

あふ事を月日にそへてまつ時はけふ行末になりぬとそ思ふ

あとヿをいつともしらて君かいはん常盤の山の松そくるしき

命をはあふにかふとかきゝしかと我や例にあはぬしにせん

つらゆき

行末はつゐにすきつゝあふヿの年月なきそわひしかりける

よみ人しらす

いきたれは戀するヿのくるしきに猶命をはあふにかへてん

大伴百世

戀しなむ後はなにせんいける日の爲こそ人は見まくほしけれ

源經基〇四品貞純親王の子上野介鎭守府將軍に任せらる世に六孫王と稱す淸和源氏の始祖なり

菅原輔昭〇式部大輔文時の子なり天元五年出家せり

源　　經　　基

哀れとも君たにいはゝ戀わひてしなん命もをしからなくに

けざうし侍りける女の家のまへをわたるとていひいれ侍りける

よみ人しらす

人しれず思ふ心をとゝめつゝいくたび君かやとをすくらん

題しらす

時雨にも雨にもあらで君こふる年のふるにも袖はぬれけり

ちぎりけるとおりける女につかはしける

菅　原　輔　昭

露はかり賴めしほとのすきゆけはきえぬはかりの心ちこそすれ

返し

よみ人しらす

露はかり賴むることもなきものをあやしや何に思ひおきけん

題しらず

流れてとたのむるよりは山川の戀しきせゝにわたりやはせぬ

あひみてはしにせぬ身とそ成ぬへき賴むるにたにのふる命は

いかてかと思ふ心のある時はおほめくさへそ嬉しかりける

わひつゝも昨日はかりはすくしてきけふや我身の限なるらん

人　ま　ろ

戀ひつゝもけふは暮しつ霞たつあすの春日をいかてくらさん

よみ人しらす

戀ひつゝもけふはありなん玉櫛笥あけん朝をいかてくらさむ

君をのみ思ひかけこの玉くしけあふたつとにこひぬ日はなし

拾遺和歌集巻第十二

戀二

題しらす
よみ人しらす
春の野に生るなき名の侘しきは身をつみてたに人のしらぬよ
なき名のみたつたの山のあをつゝら又くる人もみえぬ所に
人麿
無名のみたつの市とは騒けともいさまた人をうるよしもなし
よみ人しらす
なき事をいはれの池のうきぬなは苦しき物はよにこそ有けれ
人まろ
竹の葉におきゐる露の轉ひあひてぬるとはなしにたつ我名かな
よみ人しらす
あちきなや我名はたちて唐衣身にもならさてやみぬへき哉
源重之
唐衣我はかたなのふれなくにまつたつものはなき名なりけり

染川〇筑前國にあり木幡川〇山城宇治郡なり

わすれかたけれ〇一本にこひしかりけれとあり

染河にやとかる浪のはやけれはなき名たつとも今は恨みし
よみ人しらす
木幡川こはたかいひしとの葉そなき名すゝかん瀧つせもなし
女のもとにつかはしける
藤原忠房朝臣
君か名の立にとかなき身なりせはおほよそ人になして見ましや
題しらす
よみ人しらす
夢かとも思ふへけれとねやはせしなにそ心に忘れかたきは
夢よ夢戀しき人にあひみすなさめての後はわひしかりける
權中納言敦忠
あひみての後の心にくらふれはむかしは物も思はさりけり
坂上これのり
逢見ては慰むやとそ思ひしを名殘しもこそ忘れかたけれ
よみ人しらす
あひみても有にし物をいつのまにならひて人の戀しかるらん
我戀は猶あひみてもなくさますいや勝りなる心ちのみして
はしめて女のもとにまかりて、あしたにつかはしける
よしのふ

まつくおしきに○一本にまつかくるしきさあり

本院の五の君○左大臣藤原時平の五女なるへし

むしのか對の君○時平公の女なるへし

大納言きよかけ○陽成天皇ノ皇子源清隆後撰集に見えたり

逢事を待し月日のほとよりもけふのくれこそ久しかりけれ

つらゆき

おかつきのなからましかば白露のおきて佗しき別せましや

あひみても猶慰まぬ心かないくちよねてが戀のさむへき

人まろ

むは玉の今宵なあけそ明ゆかは朝ゆく君をまつくるしきに

よみ人しらず

獨ねし時はまたれし鳥の音も稀にあふ夜はわびしかりけり

かつゝきや我やはくめの橋作りあけゆくほとは物をこそ思へ

本院五の君のもとに、はしめてまかりてあしたに

平行時

朝またき露わけきつる衣手のひるまはかりに戀しきやなそ

本院のひんかしのたいの君に、まかりかよひてあしたに

大納言きよかけ

ふたつなき心は君におきつるを又ほともなく戀しきやなそ

題しらす

よみ人しらす

いつしかと暮を待まの大空は曇るさへこそ嬉しかりけれ

女のもとにまかりそめて

大江為基

日の中に物を二たひ思ふかなとくあけぬると遲くくるゝと

題しらす

つらゆき

もゝはかき羽かく鴫も我ことくあした佗しき數はまさらし

よみ人しらす

現にも夢にも人によるしあへは暮行くはかり嬉しきはなし

曉の別れのみちをおもはすはくれゆく空はうれしからまし

君こふる涙のこほる冬の夜は心とけたるいやはねらるゝ

女に物いひはしめて、さわると侍りて、えまからて、いひつかはし侍りける

在原業平朝臣

かゝらてもありにし物を白雪のひとひもふれはまさる我戀

女につかはしける

よしのふ

あさ氷とくるまもなき君によりなとてそほつる袂なるらん

よみ人しらす

身をつめは露をあはれと思ふかな曉ことにいかておくらむ

うしと思ふ物から人のこひしきはいつこを忍ふ心なるらん

よそにても有にしものを花薄ほのかにみてそ人は戀しき

夢よりもはかなき物は陽炎のほのかにみえし影にぞありける

天暦御時歌合に　　たゞみ

夢のごとなどかよるしも君をみむくるゝ待まも定めなきよに

したかふ

戀しきを何につけてか慰めん夢たにみえすぬる夜なければ

女のもとより、くらきにかへりて、つかはしける

あけくれの空にぞわれは迷ひぬる思ふ心のゆかぬまに〳〵

源公忠朝臣、日々にまかりあひ侍りけるを、いかなる日にかありけん、あひ侍らざりける日、つかはしける

つらゆき

玉ほこのとを道もこそ人はゆけなど時のまもみねは戀しき

題しらす　　よみ人しらす

身に戀のあまりにしかは忍ふれと人のしるらむこそ佗しき

忍ひつゝ思へはくるし住のえの松のねなからあらはれなはや

忠房かむすめのもとに、久しうまからて、つかはしける

大納言きよかけ

住吉の松ならねとも久しくも君とねぬ夜の成にけるかな

返し

久しくも思ほえねとも住吉の松やふたゝひおひかはるらむ

あるをとこの、松をむすひてつかはしたりけれは

よみ人しらす

何せんにむすひそめけむ岩代の松は久しき物としる〳〵

題しらす

片岸の松のうきねと忍ひしはされはよ終にあらはれにけり

人まろ

あひみてはいくひさゝにもあらねとも年月のこと思ほゆる哉

年をへて思ひ〳〵てあひぬれは月日のみこそ嬉かりけれ

透板もてふける板間のあはさらはいかにせんとか我ねそめけん

よみ人しらす

こぬかなと暫しは人に思はせんあはてかへりし夜半のねたさに

秋霧のはれぬあしたのおほ空をみるかことくも見へぬ君かな

戀佗ひぬねをたにになかん聲たてゝいつこなるらん音無の瀧

しのひてけさうし侍りける女のもとにつかはしける

もとすけ

音無の河○音無の里と同しく紀伊國なり

思ふらむ○袋草子には思ふともとあり

音無の河とそつゐに流れいつるいはて物思ふ人のなみたは

題しらす　よみ人しらす

風寒みこゑよはわ行く虫よりもいはて物思ふ我そまされる

しかの蜑の釣にともせる漁火のほのかに妹をみるよしもかな

戀するはくるしき物としらすへく人を我身にしはしなさはや

しるや君しらすはいかにつらからむ我かくはかり思ふ心を

けさうし侍りける女の五月夏至の日なりけれはうたかひなくおもひたゆみて物いひ侍りけるにしたしきさまになりにけれはいみしくうらみむひて後にさらにあはしといひ侍りけれは　よしのふ

あすしらぬ我身なりとて恨みおかむ此世にてのみやましと思へは

題しらす　人まろ

思ふなと君はいへとも逢事をいつとしりてか我戀ひさらむ

萬葉集和し侍りけるに　源順

思ふらむ心の中をしらぬ身はしぬはかりにもあらしとそ思ふ

侍從に侍りける時村上の先帝の御めのとにしのひて物のたうひけるにつきなき事なりとてさらにあはす侍りけれ

まつしほるらむ○一本にまつそほつらむとあり

大伴方見

侘ひぬれは○此歌後撰集にも見えた

は　一條攝政

かくれぬの底の心そ恨めしきいかにせよとてつれなかるらん

題しらす　よみ人しらす

我なからさもとかしき心かな思はぬ人は何か戀しき

ふるく物いひ侍りける人に　もとすけ

草かくれかれにし水はぬるくとも結ひし袖は今もかはかす

題しらす　よみ人しらす

わかおもふ人は草葉の露なれやかくれは袖の先しほるらん

たもとよりおつる涙はみちのくの衣川とそいふへかりける

衣をやぬきてやらまし涙のみかゝりけるとも人の見るへく

しのひて物いひ侍りける人のひとしけき所に侍りけれは　實方朝臣

人めをもつくさぬ物とおもひせは袖の涙のかゝらましやは

題しらす　大伴方見

石の上ふるとも雨にさはらめやあはんと妹にいひてし物を

もとよしのみこ

侘ひぬれは今はた同し難波なるみをつくしても逢んとそ思ふ

五月五日、ある女のもとにつかはしける　　よみ人しらす

いつかとも思はぬ澤のあやめ草只つく〲とねこそ流るれ

題しらす　　みつね

生れとも駒もすさめぬあやめ草かりにも人のこぬかわひしき

かやり火を見侍りて　　よしのふ

かやり火は物思ふ人の心かも夏のよすからしたにもゆらん

題しらす　　勝観法師

しのふれはくるしかりけり篠薄秋のさかりになりやしなまし

よみ人しらす

思ひきや我待人はよそなから七夕つめのあふをみんとは

けふさへやよそに見るへき彦星のたちならすらむ天の河波

佗ひぬれは常はゆゝしき七夕も羨まれぬる物にそありける

露たにもなからましかは秋のよを誰とおきゐて人をまたまし

今更にとふへき人もおもほえすやへむくらして門させりてへ

秋はわか心の露にあらねとも物なけかしき比にもあるかな

石上乙麿〇左大臣麿の子なり

拾遺和歌集卷第十三

戀三

題しらす　　讀人しらす

あし曳の山した風もさむけきに今夜も又やわかひとりねん

人まろ

足曳のやま鳥のをのしたり尾のなか〲し夜をし獨かもねん

よみ人しらす

足引のかつらき山にゐる雲のたちてもゐても君をこそ思へ

足曳の山のやますけやますのみみねは戀しき君にもあるかな

たひのおもひをのふといふことを　　石上乙麿

足曳の山こえくれて宿からは妹たちまちていねさらむかも

題しらす　　人まろ

あし曳の山よりいつる月まつと人にはいひて君をこそまて

よみ人しらす

みか月のさやかに見へす雲隠れ見まくそほしきうたてこの比

源信明○左大辨公忠の子なり後撰集に見えたり

逢事はかたわれ月の雲かくれおほろけにや人のこひしき
人まろ

秋の夜の月かも君は雲かくれしはしもみねはこゝら戀しき

圓融院御時御屏風、八月十五夜、月のかけ池にうつれる家に、をとこ女ゐてけさうしたる所　平　兼　盛

秋の夜の月みるとのみおきゐつゝ今夜もねてや我はかへらん

月のあかゝりける夜、女のもとにつかはしける　源　さ　ね　あ　き　ら

戀しさはおなし心にあらすともこよひの月を君見さらめや

返し　中　務

さやかにも見るへき月を我はたゝ涙に曇るをりそおほかる

題しらす　人まろ

久方のあまてる月もかくれ行く何によそへて君をしのはん

京におもふ人をおきて、はるかなる所にまかりけるみちに、月のあかゝりける夜　よみ人しらす

都にて見しにかはらぬ月影をなくさめにてもあかす比かな

題しらす　つらゆき

てる月も影みな底にうつりけりにたる物なき戀もするかな

中宮内侍○一條天皇中宮の女房馬内侍にて大和模守時明の女なり

月を見て、ゐなかなるをとこをおもひいて、つかはしける　中　宮　内　侍

こよひ君いかなるさとの月をみて都に誰をおもひいつらむ

題しらす　たゝみね

月影を我身にかふる物ならはおもはぬ人もあはれとやみん

萬葉集和せる歌　したかふ

獨ぬるやとには月の見えさらは戀しき事の數はまさらし

題しらす　人まろ

長月のあり明の月のありつゝも君しきまさは我戀めやも

月のあかき夜、人を待ちはへりて

事ならは闇にそあらまし秋の夜のなそ月影の人たのめなる

春宮左近○三條天皇また東宮におはしましゝとにて後には三條院女蔵人左近さも小大君さもいへり

題しらす　春　宮　左　近

ふらぬ夜の心をしらておほ空の雨をつらしと思ひけるかな

よみ人しらす

衣たになかにありしは疎かりきあはぬよをさへ隔てつるかな

長き夜も人をつらしと思ふにはねなくにあくる物にそ有ける

ひろはたの御息所○中納言源庶明の女にて村上天皇の女御なり

いまはとはし、といひ侍りける、女のもとにつかはしける

忘れなむ今はとはしと思ひつゝぬる夜しもこそ夢にみえけれ

題しらす

よるとてもねられさりけり人しれすね覺の戀に驚かれつゝ

むは玉のいもが、黒髪こよひもや我なき床に靡きいてぬらん

わかせこかありかもしらてねたる夜は曉かたの枕さひしも

いかなりし時呉竹の一よたにいたつらふしを苦といふらん

いかならむ折ふしにかは呉竹のよるは戀しき人にあひみん

人まろ

まさしてふやその巷にゆふけとふうらまさにせよ妹に逢へく

夕卦とふトにもよくあり今宵たにこさらむ君をいつか待へき

夢をたにいかて形見にみてしかなあはてぬる夜の慰めにせん

現にはあふ事かれし玉の緒のよるはたえせす夢にみえなん

ひろはたのみやす所、久しう内にもまゐらさりけるゆめになん、れいのやうにて、内にさふらひたまひつる、と人のいひ侍りけるをきゝて

古をいかてかとのみおもふ身に今夜の夢をはるになさはや

藤原清たゝかむすめ○清正上に見えたり

きませの山○近江國志賀郡來増山なり

ならしの岡○大和國にあり

延喜十五年、御屏風歌　つらゆき

忘らるゝ時しなければ春の田をかへす〱そ人は戀しき

題しらす　よみ人しらす

梓弓はるのあら田をうち返し思ひやみにし人そ戀しき

みつね

かの岡にはきかる男なわをなみねるやねりその碎けてそ思ふ

よみ人しらす

春くれは柳の糸もとけにけりむすほられたる我こゝろかな

いつかたによるとかは見ん青柳のいとさためなき人の心を

まきもくのひはらの霞たち返りかくこそはみめあかぬ君かな

冬より、ひえの山にのほりて、はるまておとせぬ人のもとに　藤原きよたゝかむすめ

なかめやる山へはいとゝ霞みつゝおほつかなさの勝る春かな

題しらす　人まろ

我せこをきませの山と人はいへと君もきまさぬ山のなゝらし

山邊赤人

我背子をならしの岡のよふこ鳥君よひかへせ夜のふけぬ時

まつちの山〇紀伊國なり

御製〇村上天皇なり

かきほにおふる〇一本にかきほにさけるとあり

よみ人しらす

こぬひとをまつちのやまの郭公おなし心にねこそなかるれ

しのゝめになきこそ渡れ郭公物おもふ宿はしるゝやあるらん

たゝくとて宿の妻戸をあけたれは人もこすゑの水雞なりけり

夏衣薄きなからそたのまるゝひとへなりしも身にちかけれは

かりてほす淀の眞菰の雨ふれはつかねもあへぬ戀もするかな

みな月の土さへさけてゝる日にも我袖ひめや妹にあはすして

人まろ

なる神のしはしうこきて空くもり雨もふらなん君とまるへく

人ことはなつ野の草のしけくとも君と我としたつさはりなは

よみ人しらす

野も山もしけりあひぬる夏なれと人のつらさはことの葉もなし

夏草の茂みに生るまろこすけまろかまろねよいくよへぬらん

天暦御時、ひろはたのみやす所ひさしくまゐらさりけれは、御ふみつかはしける　御製

山かつのかきほにおふる撫子に思ひよそへぬ時のまそなき

廉義公家の障子の繪に、なてしこおひたる家の心ほそけなるを　清原元輔

中將の御息所〇朱雀天皇の御息所鮮子にて後撰集に見えたり

廣平親王〇村上天皇の皇子母は民部卿元方の女更衣元子なり二品兵部卿

思ひしる人にみせはやよもすから我とこなつにおきゐたる露

題しらす　よみ人しらす

秋の野の草葉もわけぬ我袖の露けくのみもなり勝るかな

三百六十首歌のなかに　曾禰好忠

我せこかきまさぬよひの秋風はこぬ人よりも恨めしきかな

題しらす　よみ人しらす

うらやまし朝日にあたる白露を我身と今はなすよしもかな

人まろ

秋の田のほの上における白露のけぬへく我は思ほゆるかな

住吉の岸を田にほりまきし稲のかるおとまてもあはぬ君かな

赤人

戀しくはかたみにせんと我やとにうへし秋はき今さかりなり

中將のみやす所のもとに、萩につけてつかはしける　廣平親王

秋はきの下葉をみすはわすらるゝ人の心をいかてしらまし

題しらす　よみ人しらす

に任し天祿二年二月九日卒りぬ

しめはゆぬ野への秋萩風ふけはとふしかくふし物をこそ思へ

中宮内侍

移ろふは下葉はかりと見し程にやかても秋になりにけるかな

女のもとにつかはしける

よしのふ

言の葉も霜にはあへす枯にけりこや秋はつるしるしなるらん

つらゆき

色もなき心を人にそめしより移ろはんとはわかおもはなくに

よみ人しらす

數ならぬ身をうち川の網代木に多くのひをもすくしつるかな

した紅葉するをはしらて松の木の上の緑をたのみけるかな

人まろ

我せこをわかこひをれは我宿の草さへ思ひうらかれにけり

さたふんか家の歌合に

よみ人しらす

霜のうへにふるはつ雪のあさ氷とけすも物を思ふころかな

たえてとしころになりにける女のもとにまかりて、雪のふり侍りけれは

源景明

み吉野の雪にこもれは山人もふるみちとめてねをやなくらん

題しらす

人まろ

頼めつゝこぬ夜數多になりぬれはまたしと思ふそ待に勝れる

小貳命婦〇後撰集に見えたり

拾遺和歌集卷第十四

戀四

題しらす　人麿

あさねかみ我はけつらしうつくしき人の手枕ふれてし物を

元輔かむこになりてあしたに　藤原實方朝臣

時のまも心はそらになる物をいかてすくしゝむかしなるらん

題しらす　よみ人しらす

白浪のうちしきりつゝこよひさへいかてか獨ぬるとかや君

一條攝政内にてはひんなし、さとにいてよ、といひ侍りけれは、人もなき所にて、まち侍りけるに、まうてこさりけれは　小貳命婦

いかにしてけふをくらさん小動のいそき出てもかひなかりけり

題しらす　人まろ

湊いりの葦わけ舟さはりおほみ我思ふ人にあはぬ比かな

いはしろの野中にたてるむすひ松心もとけすむかし思へは

源賴光〇六孫王經基の孫にて滿仲の子なり攝津守に任せらる

よみ人しらす

我宿ははりまかたにもあらなくにあかしもはてゝ人の行らん

浪まより見ゆる小島の濱ひさき久しくなりぬ君にあはすて

人まろ

ます鏡手にとりもちてあさな〳〵みれとも君にあく時そなき

みな人の笠にぬふてふ有ますけありての後もあはんとそ思ふ

よみ人しらす

いかほのやいかほの沼のいかにして戀しき人を今ひとめみん

玉川にさらす手つくりさら〳〵にむかしの人の戀しきやなそ

身は早くならの都になりにしを戀しき事のふりせさるらん

藤原忠房朝臣

石の上ふりにし戀の神さひてたゝるに我はねきそかねつる

よみ人しらす

いかはかりくるしき物そ葛城のくめちの橋の中のたえまは

限りなく思ふなからのはし〳〵ら思ひなからに中やたえなん

女のもとにつかはしける　源賴光

中々にいひもはなたて信濃なるきそちの橋のかけたるやなそ

右近○右近少將季縄の女にて後撰集に見えたり

題しらす　　よみ人しらす

杉たてるやとをそ人はたつねける心の松はかひなかりけり

石の上ふるの社のゆふたすきかけてのみやは戀んと思ひし

我やうき人やつらきと千早ふる神てふ神にとひみてしかな

すみ吉のあら人神にちかひても忘るゝ君かこゝろとそきく

右近

忘らるゝ身をはおもはす誓ひてし人の命のをしくもあるかな

女をうらみて、さらにまうてこしとちかひて後に、つかはしける

實方朝臣

何せんに命をかけて誓ひけむいかはやと思ふをりもありけり

題しらす　　よみ人しらす

塵ひちの數にもあらぬ我ゆゑに思ひわふらむ妹かかなしさ

人まろ

こひ／＼て後もあはんとなくさむる心しなくは命あらめや

かくはかり戀しき物としらませはよそにみるへくありける物を

よみ人しらす

涙川のとかにたにもなかれなむ戀しき人のかけや見ゆると

藤原惟成○左中辨惟村子なり世に五位攝政と號す

齋宮女御○徽子女王なり上にも見えたり

涙川おつるみな上はやけれはせきそかねつる袖のしからみ　　つらゆき

萬葉集和し侍りける歌　　源したかふ

涙川そこのもくつとなりはてゝ戀しきせゝに流れこそすれ

女のもとにつかはしける　　藤原惟成

人しれすおつる涙の積りつゝ數かくはかりなりにけるかな

天暦御時、承香殿のまへをわたらせ給ひて、こと御かたにわたらせたまひけれは　　齋宮女御

かつみつゝかけ離れ行水の面にかく數ならぬ身をいかにせん

題しらす　　よみ人しらす

さを鹿のつめたにひちぬ山川の淺ましきまてとはぬ君かな

あさましや木の下陰の岩し水いくその人のかけをみつらん

行水のあわならはこそきえかへり人の淵せを流れても見め

つの國のほりえの深く思ふとも我は難波のなにとたにみす

津の國のいく田の池のいくたひかつらき心を吾そみすらん

つの國の難波わたりに作るなるこやといはなんゆきてみるへく

旅人のかやかりおほひつくるてふまろやは人を思ひ忘るゝ

みくま野〇紀伊國にあり

難波人芦火たく屋はすゝたれとおのか妻こそとこめつらなれ　人まろ

よみ人しらす

住吉の岸におひたるわすれ草みすやあらまし戀はしぬとも

やをかゆく濱の眞砂とわか戀といつれまされり沖つ島もり

屏風にみくま野のかたかきたる所

さしなから人の心をみ熊野の浦のはまゆふいくへなるらん　かねもり

ふしの山のかたをつくらせ給ひてふちつほの御かたへつかはす　天暦御製

世の人のおよはぬ物はふしのねの雲井に高き思ひなりけり

題しらす　よみ人しらす

我戀のあらはにみゆる物ならは都のふしといはれなましを

あしねはふうきはうへこそつれなけれ下はえならす思ふ心を

ねぬなはのくるしかるらむ人よりも我そますたのいけるかひなき

ひとまろ

たらちねの親のかふこの繭籠いふせくもあるか妹にあはすて

よみ人しらす

いさや又戀てふ事もしらなくにこやそなるらんいこそねられね

たらちねの親のいさめしうたゝねは物思ふ時のわさにそありける

としをへてさねあきらの朝臣まうてきたりけれはすたれこしにすへて物かたりし侍りけるにいかゝありけん　中務

うちとなくなれもしなまし玉たれのたれ年月を隔てそめけむ

題しらす　つらゆき

うかりけるふしをはすてゝ白糸の今くる人と思ひなさなん　よみ人しらす

思ふとていとこそ人になれさらめしかならひてそみねは戀しき

手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にそ有ける

吹かせに雲のはたてはとゝむともいかゝたのまん人の心は

若草にとゝめもあへぬこまよりもなつけわひぬる人の心か

あふ事のかたかひしたる陸奥のこまほしくのみ思ほゆるかな

陸奥のあたちのはらのしらまゆみ心こはくも見ゆる君かな　伊勢

年月のゆくらむかたも思ほえす秋のはつかに人のみゆれは

入道攝政○東三條兼家なりこの哥のたもむき蜻蛉日記に詳なり

思ひきやあひみぬほとの年月を數ふはかりにならむ物とは

逢なるほとにもかよふ心かなさりとて人のしらぬものゆゑ

　とほき所に、おもふ人をおき侍りて　源　經　基

雲井なる人をはるかに思ふには我こゝろさへ空にこそなれ

　道をまかりて、よみ侍りける　人　ま　ろ

よそにありて雲井にみゆる妹が家に早く到らむあゆめ黒駒

　題しらす　よみ人しらす

我かへるみちの黒駒心あらは君はこすともおのれいなゝけ

　入道攝政まかりたりけるに、かとをおそくあけけれは　右大將道綱母

歎きつゝ獨ぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる

　題しらす　讀人しらす

なけきこる人いる山の斧のえのほと〳〵しくもなりにける哉

　おこなひせんとて、山にこもり侍りけるに、さとの人につかはしける

人にたにしらせて入し奥山に戀しさいかてたつねきつらん

　くにもちかむすめをともみつまかりさりて後、かゝみを返

こまの命婦

しつかはすとて、かきつけてつかはしける

影たえておほつかなさのます鏡みすは我身のうさもしられし

　題しらす　よみ人しらす

思ひます人しなけれはます鏡うつれる影とねをのみそなく

我袖のぬるゝを人のとかめすはねをたにやすくなくへき物を

　元良のみこ、こまの命婦に、物いひ侍りける時、女のいひつかはしける

數ならぬ身は唯にたに思ほえていかにせよとか詠めらるけん

　題しらす　よみ人しらす

夏にさへ人のつれなくみえつれはねてもさめても物をこそ思へ

みる夢のうつゝになるはよのつねそ現の夢になるそ悲しき

あふ事は夢のうちにも嬉しくてね覺の戀そわひしかりける

わすれしよ夢と契りしとの葉はうつゝにつらき心なりけり

あたらしと何に命をおもひけん忘れはふるく成ぬへき身を

　柿　本　人　麿

千早振神のいかきもこえぬへし今は我身のをしけくもなし

善祐法師○上に見えたり流罪の事年月詳ならず

拾遺和歌集卷第十五

戀　五

善祐法師なかされて侍りける時母のいひつかはしける

なく涙よはみな海となりならん同じなきさに流れよるへく

題しらす

住吉の岸にむかへるあはち島あはれと君をいはぬ日そなき

よみ人しらす

すてはてむ命を今は頼まれよあふへきをのこのよならねは

いきしなんとの心にかなひせは二たひ物はおもはさらまし

もえはてゝ灰となりなむ時にこそ人を思ひのやまんこにせめ

いつかたにゆき隠れなむ世中に身のあれはこそ人もつらけれ

ありへんと思ひもかけぬよの中はなか〳〵身をそ歎かさりける

いつはりと思ふ物から今さらにたかまことをか我はたのまむ

世中のうきもつらきも忍ふれは思ひしらすと人やみるらむ

ひたふるにしれは何かはさもあらはあれ生てかひなき物思ふ身は

人まろ

戀するにしにする物にあらませは千度そ我はしにかへらまし

こひてしねしねとやわきもこか我家の門を過て行らん

戀しなはこひもしねとや玉ほこの路行く人にことつてもなき

重之

戀しきを慰めかねてすかはらや伏見にきてもねられさりけり

よみ人しらす

戀しきは色に出てもみえなくにいかなる時か胸にしむらん

忍はんに忍はれぬへき戀ならはつらきにつけてやみもしなまし

女につかはしける

大中臣能宣

いかてかくこふる心を慰めて後の世までの物をおもはし

題しらす

よみ人しらす

限りなく思ふ心のふるけれはつらきもしらぬ物にそ有ける

わりなしやしひても頼む心かなつらしとかつは思ふ物から

うしとおもふ物から人の戀しきはいつくを忍ふ心なるらん

身のうきを人のつらさと思ふこそ我ともいはしわりなかりけれ

つらしとは思ふ物から戀しきはわれにかなはぬ心なりけり

つらきをも思ひしるやは我爲につらき人しもわれを恨むる

心をはつらき物そといひおきてかはらしと思ふかほそ戀しき

淺ましや見しかとたにも思はぬにかはらぬかほそ心ならまし

物いひ侍りける女の後につれなく侍りて、さらにあはす侍りければ

哀ともいふへき人は思ほえて身のいたつらに成ぬへきかな　一條攝政

題しらす

さもこそは逢見ん事のかたからめ忘れすとたにいふ人のなき　いせ

逢事のなけきのもとを尋ぬれは獨ねよりそおひはしめける　藤原有時

藤原有時〇左少將恒眞の子なり右馬助に任せらる

大方の我身一つのうきからになへての世をも恨みつるかな　つらゆき

おらちおのかるやのさきに立しかもいとわれはかり物は思はし　人まろ

あら磯のほかゆく浪のほかこゝろ我は思はし戀はしぬとも

かき曇り雨ふる川のさゝら浪まなくも人のこひらるゝ哉

わかとや雲のなかにもおもふらん雨も淚もふりにこそふれ　つらゆき

降雨にいてゝもぬれぬ我袖の陰におなからひちまさるかな　よみ人しらす

これをたにかきそわつらふ雨とふる淚をのこふ暇なければ

きみこふる我も久しくなりぬれは袖に淚もふりぬへらなり

君戀ふる淚のかゝる袖のうらは巖なりともくちそしぬへき

またしらぬおもひにもゆる我身かなさるは淚の川の中にて

女のもとにまかりけるを、もとのめのせいし侍りけれは

風をいたみ思はぬかたに泊りする蜑の小船もかくやわふらん　源景明

題しらす

瀨をはやみたえす流るゝ水よりもつきせぬ物は淚なりけり　よみ人しらす

我ことく物思ふ人はいにしへも今行すゑもあらしとそ思ふ

黑髮に白髮ましりおふるまてかゝる戀にはいまたあはさるに　坂上郎女

坂上郎女〇此集の初に見えたり

潮みては入ぬる磯の草なれや見えくすくなく戀しくの多き

しかの浦の釣にともせる漁火のほのかに人をみるよしもかな

少将更衣○醍醐天皇の更衣に同名の人ありて又中務更衣さいひ参議伊衡の女なりこの更衣同人にや　この御歌は圓融天皇の御製なり

承香殿の女御○贈皇太后胤子にて上に見えたり

承香殿の中納言○女御に仕へし女房にて後撰集に見えたり

岩ねふみかさなる山はなけれともあはぬ日数を戀やわたらん

藤原有時

なけきこる山路は人もしらなくに我心のみつねにゆくらむ

圓融院御時、少将更衣のもとにつかはしける

限なき思ひの空にみちぬれはいくそのけふり雲となるらん

御返し

空にみつ思ひの煙り雲ならはなかむる人のめにそ見えまし

題しらず　よみ人しらす

思はすはつれなき事もつらからしたのめは人を恨みつるかな

つらけれと恨むる限りありけれは物はいはれてねしそ泣るれ

紅のやしほの衣かくしおらは思ひそめすそあるへかりける

ほのかにも我をみしまの芥火のあくとや人のをとつれもせぬ

延喜御時、承香殿女御の方なりける女に、もとよしのみこまかりかよひ侍りける、たえて後いひつかはしける

承香殿中納言

人をとくあくた川てふ津の國の名には違はぬ物にそ有ける

題しらす　よみ人しらす

小野宮おほいまうち君○實頼なり

閑院大君○源宗于朝臣の女なり

かきりなく思ひそめてし紅の人をあくにそかへらさりける

ありそ海の浦と頼めしなごり浪うちよせてける忘れかひかな

つらけれと人にはいはすいはみ潟うらみそ深き心ひとつに

恨みぬもうたかはしくそ思ほゆる頼む心のなきかと思へは

近江なる打出の濱のうちいてつゝうらみやせまし人の心を

わたつうみの深き心はありなから恨みられぬる物にそ有ける

数ならぬ身は心たになからなむ思ひしらすは恨みさるへく

恨みての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをもなかまし

小野宮おほいまうち君につかはしける

閑院大君

君を猶うらみつるかな蛋のかるもにすむ虫の名を忘れつゝ

題しらす　よみ人しらす

蛋のかるもにすむ虫のなはきけと唯我からのつらきなりけり

戀わひぬなかしき事も慰めんいつれなかすの濱へなるらん

かくはかりうしとおもふに戀しきは我さへ心ふたつありけり

人まろ

とにかくに物は思はすひたゝくみうつ墨なわのたゝ一すちに

左大臣の御女○清愼公實頼の女述子なりさいへり

平忠依○右中辨希世の子にて準人正なり

左大臣女御うせ侍りにけれはちゝおとゝのもとにつかはしける　天暦御製

古をさらにかけしとおもへともあやしくめにもみつ涙かな

女のもとにつかはしける　平忠依

あふ事は心にもあらて程ふともさやは契りし忘ればてねと

題しらす　よみ人しらす

忘るゝかいさゝは我もわすれなん人にしたかふ心とならは

忘れぬる君はなか〳〵つらからて今まていける身をそ恨むる

我はかりわれを思はん人もかなさてもやうきと世を心みん

怪しくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひたゆへき

おもふ事なすこそ神のかたからめしはし忘るゝ心つけなむ

とをき所に侍りける人京に侍りけるをとこをみちのまゝに戀まかりてたかさこといふ所にてよみ侍りける

高砂にわかなく聲はなりにけり宮この人はきゝやつくらん

題しらす

鹿島なるつくまの神のつく〳〵と我身ひとつに戀をつみつる

北宮○つまひらかならす

拾遺和歌集卷第十六

雜春

題しらす　凡河内躬恒

春たつとおもふ心はうれしくていま一とせの老そゝひける

よみ人しらす

新しき年はくれともいたつらに我身のみこそふりまさりけれ

新しき年にはあれとも鶯のなくねさへにはかはらさりけり

北宮屏風に　右近

とし月の行へもしらぬ山かつは瀧のおとにや春をしるらん

延喜十五年齋院屏風歌　紀貫之

春くれは瀧の白糸いかなれやむすへとも猶あはにみゆらむ

正月に人々まうてきたりけるに又の日のあしたに右衛門督公任朝臣のもとにつかはしける　中務卿具平親王

あかさりし君かにほひの戀しさに梅の花をそ今朝はをりつる

なかされ侍りけるとき家の梅花をみ侍りて

もゝその、齋院

中納言安倍廣庭○左大臣御主人の子にて養老の比の人なり

れこして○万葉集にいこしてとあり

源寛信朝臣○宇多天皇の皇孫にて式部卿敦實親王の子なり源姓を賜はり正四位下左京大夫に任せらる

清和の七のみこ○清和天皇の第七の

こちふかは匂ひおこせよ梅の花あるしなしとて春を忘るな　贈太政大臣菅

もゝその、齋院の屏風に　よみ人しらす

梅の花春よりさきにさきしかとみる人まれに雪のふりつゝ

題しらす　中納言安陪廣庭

いにし年ねこしてうゑし我宿のわか木の梅は花さきにけり

天暦御時、大はん所のまへに、うくひすのすを、こうはいのえたにつけて、たてられたりけるを見て　一條攝政

花の色はあかすみるとも鶯のねくらの枝に手なゝふれそも

おなし御時、梅花のもとに、御椅子たてさせ給ひて、花宴せさせ給ふに、殿上のをのことも、歌つかうまつりけるに

源寛信朝臣

折てみるかひもあるかな梅の花けふ九重にゝほひまさりて

内裏の御遊侍りける時　參議伊衡

かさしては白髪にまかふ梅の花今はいつれをぬかんとすらむ

清和の七のみこ六十賀の屏風に　つらゆき

皇子四品貞辰親王にて御母は女御佳珠子なり延長七年四月五十六歳にて薨りぬ貫之集によるに右大將御六十賀清和の七宮の御息所つかうまつり給ひける時と詞書ありこの集脱字あるへし

かそふれとおほつかなきを我宿の梅こそ春の數をしるらめ

題しらす　よみ人しらす

年毎にさきはかはれと梅の花あはれなる香はうせすそ有ける

圓融院御時、三尺御屏風、十二帖、歌之中　源順

梅かえをかりにきてをる人やあるとのへの霞は立かくすかも

北白川の山庄に、花のおもしろくさきて侍りけるを見に、人々まうてきたりけれは　右衛門督公任

春きてそ人もとひける山里は花こそ屋とのあるしなりけれ

くらまにまうて侍りけるをりに、道をふみたかへてよみ侍りける　安法々師

おほつかなくらまの山の道しらて霞のうちに惑ふけふかな

延喜十五年齋院、屏風に、霞をわけて山寺にいる人あり　きのつらゆき

思ふ事ありてこそゆけ春霞みちさまたけにたちなかくしそ

小一條のおほいまうちきみの家の障子に　よしのふ

藤原長能○伊勢守倫寧の子寛弘六年加賀守に任せらる此集以下代々の勅撰集にあまた入りたり

東三條院○兼家の女詮子にて圓融院の女皇后一條院の御母女院號のはしめなり長保三年十二月甍られ四十九日は四年の正月なり

たこの浦に霞のふかく見ゆるかなもしほの煙立やそふらん

山里にしのひて、女をゐてまうてきてあるをとこのよみ侍りける　よみ人しらす

おもふ事いはてやみなむ春霞山ちもちかしたちもこそきけ

人に物いふときゝて、とはさりけるをとこのもとに　中宮内侍

春日野の荻の燒原あさるともみえぬなき名をおほすなるかな

女のもとに、なつなの花につけて、つかはしける　藤原長能

雪を薄み垣ねにつめる唐なつななつさはまくのほしき君かな

東三條院、御四十九日のうちに、子日いてきたりけるに、宮の君といひける人のもとに、つかはしける　右衛門督公任

誰により松をもひかん鶯の初音かひなきけふにも有かな

子日　惠慶法師

引てみる子の日の松は程なきをいかて籠れる千世か有らん

題しらす　よみ人しらす

かゝるみゆき○元輔集にかゝるれの日はさあり

按察更衣

右近命婦○後撰集の作者右近にやさらは本集にも上に見えたり

しめてこそ千歳の春はきつゝみめ松をてたゆく何か引へき

齋院、子日　したかふ

一もとの松のちとせも久しきにいつきの宮そ思ひやらるゝ

右大將實資下﨟に侍りける時、子日しけるに　清原元輔

常のよにかゝるみゆきはありきやと木高き峯の松にとはゝや

正月叙位のころ、ある所に、人々まかりあひて、子日の歌よまむとゝいひて侍りけるに、六位に侍りける時　大中臣能宣

松ならはひく人けふはありなまし袖の綠そかひなかりける

除目のころ、子日にあたりて侍りけるに、按察更衣のつほねより、松をはしにて、たへものをいたして侍りけるに　もとすけ

引人もなくてやみぬるみ吉野の松はねのひをよそにこそきけ

康和二年、春宮藏人になりて、月のうちに、民部亟にうつりて、二たひよろこひをのへて、右近命婦かもとにつかはしける　したかふ

帥のみこ○大宰帥に任したる親王なれとたれさしわきかたし
弓削嘉言○上にも見えたり
賀朝法師○比叡山の僧なりといへり傳詳ならす

ひく人もなしとおもひし梓弓今そうれしきもろやしつれは

題しらす　よみ人しらす

さきし時猶こそ見しか桃の花ちれはをしくそ思ひなりぬる

帥のみこ、人々にうたよませ侍りけるに

弓削嘉言

山里の家ゐはかすみこめたれとかきねの柳すゑはとにみゆ

春、ものへまかりけるに、つほさうそくして侍りける女ともの、野へに侍りけるを見て、なにわさするそとゝひけれは、ところほるなり、といらへけれは

賀朝法師

春の野にところ求むといふなるは二人ねはかり見てたりや君

返し　よみ人しらす

春の野にほる〳〵みれとなかりけり世にところせき人の為には

題しらす

かきくらし雪もふらなん櫻花またさかぬまはよそへてもみん

春風は花のなきまにふきはてね咲なは思ひなくてみるへく

みつね

さかさらむ物とはなしに櫻花おも影にのみまたきみゆらん

みつし所○後涼殿の西廂にあり朝夕の御膳を供する所なり別當預所衆なとの職あり
藏人所○校書殿にありても別當頭預出納小舎人等の職あり
御導師浄藏○三善清行の子にて眞言院の定額僧なり元亨釋書に傳あり
亭子法皇○宇多法皇なり

よみ人しらす

いつこにか此頃花のさかさらむ心からこそたつねくれけれ

延喜御時、月次御屏風のうた　みつね

櫻花わが宿にのみありと見はなき物くさはおもはさらまし

さくらの花の、さきて侍りける所に、もろともに侍りける人の、後の春、ほかに侍りけるに、そのはなをゝりてつかはしける

よみ人しらす

もろともにをりし春のみ戀しくて獨見まうき花さかりかな

みつし所にさふらひけるに、藏人所のをのことも、櫻の花をつかはしたりけれは　壬生忠見

もろともにわれしをらねは櫻花思ひやりてや春をくらさん

ある人のもとにつかはしける　御導師浄藏

霞たつ山のあなたのさくら花おもひやりてや春をくらさん

題しらす　つらゆき

をちかたの花もみるへく白浪のともにや我も立わたらまし

春、花山に、亭子法皇おはしまして、かへらせたまひけれは

僧正遍昭

京極の御息所○本院の左大臣時平の女従二位麗子なり

家のさふらひ○家司なとの候する所なり

兼盛弟○王五と稱

まてといはゝいとも畏し花山にしはしとなかん鳥の聲もかな

京極御息所かすかにまうて侍りける時、國司のたてまつりけるうた、あまたありける中に　藤原忠房朝臣

鶯のなきつるなへにかすか野のけふの御幸を花とこそみれ

ふるさとにさくとわひつる櫻花今年そ君にみえぬへらなる

春霞かすかの野へに立ちわたりみちても見ゆる宮こ人かな

圓融院御時、三尺御屛風に、花の木のもとに人々あつまりゐたる所　かねもり

世中にうれしき物はおもふとち花みてすくす心なりけり

清愼公家にて、池のほとりの櫻の花をよみ侍りける　もとすけ

さくら花そこなる影そをしまるゝしつめる人の春と思へは

上總よりのほりて侍りけるころ、源頼光か家にて、人々さけたうへけるついてに　藤原長能

あつまちの野路の雪まを分てきてあはれ都の花をみるかな

清愼公の家さふらひに、ともし火のもとに、櫻の花ををりて、さして侍りけるを、よみ侍りける　兼盛弟

せり本名詳ならず

平きむされ○陸奥守元平の子にて周防守に任せらる

こんく○金鼓にて和名抄にひらかわと訓あり

石山の堂○聖武帝の時朗辨僧正の建立せる堂なり

敦慶式部卿のみこ○宇多天皇の皇子にて二品に叙し玉ひ光宮と號すむすめは中務と號し歌人にて母は伊勢なり

南殿○紫宸殿をいふ

源公忠○滋井辨國紀の子なり

ひのもとにさける櫻の色みれは人の國にもあらしとそ思ふ

山さくらを見侍りて　平きむさね

み山木の二葉三はにもゆるまてきえせぬ雪と見えもするかな

こんくうち侍りける時に、はたやき侍りけるをみてよみ侍りける　藤原長能

かた山にはたやくをのこかのみゆるみ山櫻はよきてはたやけ

石山のたうのまへに侍りけるさくらの木に、かきつけ侍りける　よみ人しらす

うしろめたいかてかへらん山櫻あかぬ匂ひを風にまかせて

敦慶式部卿のみこのむすめ、伊勢かはらに侍りけるか、ちかき所に侍りけるに、かめにさしたる花をおくるとて　つらゆき

久しかれあたにちるなと櫻花かめにさせれと移ろひにける

延喜御時、南殿にちりつみて侍りける花をみて　源公忠朝臣

殿もりのとものみやつこ心あらはこの春はかり朝きよめすな

題しらす　よみ人しらす

一條のきみ〇清和天皇の皇子貞平親王の女にて京極御息所の女房なり後撰集にも見えたり

櫻花み笠の山のかけしあれは雪とふれともぬれしとそ思ふ

年ことに春のなかめはせしかとも身さへふるとも思はさりしを

したかふ

年毎に春はくれとも池水におふるぬなはゝたえすそありける

三月、うるふ月ありけるとし、やへ山吹をよみ侍りける

藤原輔昭

春風はのとけかるへしやへよりもかさねてにほへ山吹の花

屏風の繪に花のもとにあみひく所

浦人はかすみを網にむすへはや浪の花をもとめてひくらん

延喜、御時、御屏風に

つらゆき

やなみれは河風いたくふく時そ浪の花さへおちまさりける

亭子院、京極のみやす所にわたらせたまふて、ゆみ御覽して、かけ物いたさせ給ひけるに、ひけこに花をこき入れて、さくらをとくゝにして、山すけをうくひすにむすひすへて、かくかきてくはせたりける

一條のきみ

木のまよりちりくる花は梓弓えやはとゝめぬ春のかたみに

ひえの山にすみ侍りけるころ、人のたき物をこひて侍りけ

如覺法師〇少將高光の法名なり上に見えたり

こもり侍りける頃〇公任寛弘元年十一月以後〃仕せす二年七月從二位に叙せられ即日出仕すこの卯月は二年の事なるへし

左大臣〇法成寺攝政道長にて東三條入道兼家の子なり

法皇〇宇多法皇なり

左大臣むすめ〇道長の女彰子にて長

れは、侍りけるまゝに、すこしを、梅の花のわつかにちりのこりて侍る枝につけて、つかはしける

如覺法師

春すきてちりはてにける梅の花たゝかはかりそ枝に殘れる

右衛門督公任、こもり侍りけるころ、四月一日にいひつかはしける

右大臣

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにおとせて春も過きぬる

返し

公任朝臣

ゆきかへる春をもしらす花さかぬみ山かくれのうくひすの聲

四月朔日よみ侍りける

もとすけ

春はをし郭公はたきかまほし思ひわつらふしつこゝろかな

延長四年九月廿八日、法皇御六十賀、京極のみやす所のつかうまつりける屏風の歌、ふちの花

つらゆき

松風のふかむ限りはうちはへてたゆへくもあらすさける藤波

延喜御時、藤壺の、藤花の宴せさせ給ひけるに、殿上のをのこども、歌つかうまつりけるに

皇太后宮權太夫國章

ふちの花みやのうちには紫の雲かとのみそあやまたれける

左大臣のむすめの、中宮の料にてうし侍りける屏風に

保二年二月一條天皇の中宮となる上東門院これなり

紫の雲とそみゆる藤のはないかなるやとのしるしなるらむ　右衛門督公任

題しらす　よみ人しらす

紫の色しこけれはふちの花まつのみとりもうつろひにけり

郭公かよふかきねのうの花のうきことあれや君かきまさぬ　人まろ

屏風の繪に　重之

卯の花のさける垣根にやとりせしねぬにあけぬと驚かれけり

みちのくにゝまかりくたりて後、郭公のこゑをきゝて　實方朝臣

としをへてみ山かくれの郭公きく人もなきねをのみそなく

女のもとにしろきいとを、菖蒲のねにして、くす玉をおこせ侍りて、あはれなる事ともを、あるをとこのいひおこせて侍りけれは　よみ人しらす

こゑたてゝなくといふとも郭公袂はぬれしそらねなりけり

廉義公家障子に　元輔

かくはかりまつとしらはや郭公木するにかくも鳴わたるかな

大中臣輔親○能宣の子にて祭主三位神祇大輔に任せらる本集以下代々の勅撰の作者なり

一條攝政の北方○三品代明親王の御女なり

贈皇后宮○冷泉天皇の女御懷子なり

題しらす　大中臣輔親

あしひきの山郭公さとなれてたそかれ時になのりすゝしも

坂上郎女につかはしける　大伴像見

故里のならしのをかに郭公ことつてやりきいかにつけきや

ほたるをよみ侍りける　健守法師

終夜もゆるほたるを今朝みれはくさの葉ことに露そおきける

延長七年十月十四日、もとよしのみこの、四十賀し侍りける時の屏風に　つらゆき

床夏の花をしみれはうちはへてすくる月日の數もしられす

一條攝政の北方、ほかに侍りけるころ、女御と申しける時　贈皇后宮 懷子

しはしたにかけに隠れぬ時は猶うなたれぬへきなてしこの花

題しらす　躬恒

徒に老いぬへらなりおほあらきの杜の下なる草葉ならねと

拾遺和歌集巻第十七

雑秋

屏風に七月七日　　　源　　　順

七夕は空にしるらんさゝかにのいとがくはかりまつる心を

圓融院御屏風に、たなはたまつりしたる所に、まかきのもとに、をとこたてり　　　平　　　兼　　盛

織女のあかぬ別れもゆかしきをけふしもなとか君かきませる

七夕後朝、みつねかもとにつかはしける　　　貫　　　之

朝戸あけてなかめやすらむ七夕のあかぬ別れの空をこひつゝ

題しらす　　　人　　　ま　　　ろ

わたしもりはや舟よせよ一とせに二たひきます君ならなくに

たなはたまつりける御扇にかゝせ給ひける　　　天　暦　御　製

七夕のうらやましきに天の川今宵はかりはおりやたゝまし

一品宮○資子内親王なるへし圓融天皇の△はらからにて中宮安子の御腹なり一品准后に叙せらる

らむこ○乱碁なり

藤原義孝○謙徳公伊尹の子にて右近

題しらす　　　よみ人しらす

よをうみてわかかすいとは七夕の涙の玉の緒とやなるらん

天祿四年五月廿一日、圓融院のみかと、一品宮にわたらせ給ひて、らんことゝせ給ひけるに、まけわさを、七月七日に、かの宮より、内の臺盤所に、たてまつられける扇にはられて侍りけるうすものに、をりつけて侍りける　　　中　　　務

あまの河かはへすゝしきたなはたに扇の風を猶やかさまし

　　　元　　　輔

あまの川あふきの風に霧はれて空すみわたるかさゝきの橋

おなし御時御屏風、七月七日、夜、ことひく女あり　　　源　し　た　か　ふ

ことのねはなそやかひなき織女のあかぬ別をひきしとめねは

仁和御時屏風に、七月七日女の河あみたる所　　　平　　　定　　　文

水のあやをおりたちてきんぬきちらし七夕つめと衣かす夜は

七月七日よみ侍りける　　　藤　　原　　義　　孝

少將春宮權亮に任ぜられ天延二年九月早世す
寂昭○參議大江齊光の子にて俗名を定基といひ三河守に任ぜらる妻子におくれたる愁により出家す惠心僧都の弟子となり長保二年入宋せり後拾遺集の作者なり

三條太政大臣○粟田關白道兼なり

秋風よ七夕つめに言とはんいかなる世にかあはんとすらん
寂昭か、もろこしにまかりわたるとて、七月七日、舟にのり侍りけるに、いひつかはしける
右衛門督公任
天の川のちのけふたに遥けきをいつともしらぬふなて悲しな
七夕後朝に、みつねかもとより、歌よみておこせて侍りける返ことに
つらゆき
あひみすてひとひも君にならはねは七夕よりも我そまされる
題しらす
よみ人しらす
むつましき妹せの山としらねはや初秋きりの立へたつらん
天暦御屏風に
もしほやく煙になるゝすまの蜑は秋たつ霧もわかすや有らん
三條太政大臣家にて、歌人めしあつめて、あまたの題よませ侍りけるに、きしのほとりの花といふことを
源重之
ゆく水の岸ににほへる女郎花しのひに浪やおもひかくらん
房の前栽見に、女ともまうてきたりけれは
僧正遍昭

善滋爲政○前能登守保章の子にて文

こゝにしも何にほふらん女郎花人の物いひさかにくき世に
題しらす
よみ人しらす
秋の野の花の色々とりすへてわか衣手にうつしてしかな
舟をかの野中にたてる女郎花わたさぬ人はあらしとそ思ふ
圓融院御屏風に、秋の野に、色々の花さきみたれたる所に、鷹すえたる人あり
平兼盛
家つとにあまたの花もをるへきにねたくも鷹をすえてけるかな
をみなへしといふことを句の上におきて
つらゆき
をくら山みね立ならしなく鹿のへにけむ秋をしる人のなき
たいしらす
よしのふ
こてふにもにたる物かなはな薄戀しき人にみすへかりけり
かへりにし雁そなくなるむへ人はうき世中をそむきかぬらん
中宮の、うちにおはしましける時、月のあかき夜、うたよみ侍りけるに
善滋爲政

章博士なり
おもひこそやれ○
一本に思ひやろか
なとあり

九重のうちたにあかき月影にあれたるやとを思ひやるかな

延喜十九年九月十三日、御屏風に、月にのりて翫潺湲　よみ人しらす

もゝしきのおほ宮なからやそ島をみる心ちする秋の夜の月

八月に、人の家のつり殿に、まらうとあまたありて、月を見る　したかふ

水の面に宿れる月のゝとけきはなみゐて人のねぬよなれはか

清愼公五十賀の屏風に　もとすけ

はしり井の程をしらはや相坂の關ひきこゆる夕かけのこま

題しらす　曾根好忠

虫ならぬ人もおとせぬわか宿に秋の野へとて君はきにけり

人まろ

庭草にむらさめふりてひくらしのなく聲きけは秋はきにけり

三百六十首のなかに　よしたゝ

秋風はふきな破りそ我宿のあはらかくせるくものすかきを

右大將定國家の屏風に　みつね

すみの江の松を秋かせふくからに聲うちそふるおきつ白浪

題しらす　人まろ

秋風のさむく吹くなる我宿の淺茅かもとに日くらしもなく

秋風し日ことにふけはわか宿のをかのこのはゝ色つきにけり

秋霧のたなひくをのゝ萩の花今やちるらんいまたあかなくに

ちかとなりなる所に、方たかへにわたりて、やとれりときゝてある程に、ことにふれて見きくに、うたよむへき人なりときゝて、これか歌よまむさま、いかてよくみむとおもへとも、いとも心にしあらねは、ふかくもおもはす、すゝみてもいはぬほとに、かれも又心みんと思ひけれは、萩の葉のもみちたるにつけて、うたをなむおこせたる　女

秋萩のした葉につけてめにちかくよそなる人の心をそ見る

返し　つらゆき

よのなかの人に心をそめしかは草葉に色もみえしとそ思ふ

題しらす　人まろ

このころのあかつき露に我やとの萩の下葉は色つきにけり

夜をさむみ衣かりかねなくなへに萩の下葉は色つきにけり

よみ人しらす

かのみゆる池へにたてるそか菊の茂みさ枝の色のてこらさ

天暦御時、菊の宴侍りけるあしたに、たてまつりける

忠見

吹風にちる物ならは菊のはな雲井なりとも色はみてまし

ものねたみしけるをとこ、はなれ侍りて後に菊のうつろひて侍りけるをつかはすとて

よみ人しらす

老か世にうき事きかぬ菊たにも移ろふ色はありけりとみよ

題しらす

人まろ

吾妹子か赤裳ぬらして植し田をかりて納めむくらなしの濱

屏風に、おきなの稲はこはするかたかきて侍りける所に

忠見

秋ことにかりつる稲はつみつれと老にける身そおき所なき

延喜御時、月次御屏風のうた

躬恒

かりてほす山田の稲をほしわひて守る假庵に幾よへぬらん

はらへしに、秋からさきにまかり侍りて、舟のまかりけるを見侍りて

恵慶法師

奥山にたてらましかはなきさこくふなきも今は紅葉しなまし

小一條太政大臣○貞信公忠平なり

題しらす

よみ人しらす

久方の月をさやけみ紅葉はのこさも薄さもわきつへらなり

亭子院、大井河に御幸ありて行幸もありぬへき所なりとおほせ給ふに、とのよし奏せんと申して

小一條太政大臣 貞信公

小倉山みねの紅葉は心あらはいま一たひのみゆきまたなむ

たひ人のもみちのもとゆくかたかける屏風に

大中臣能宣

ふるさとにかへるとみてや立田姫もみちの錦空にきすらん

題しらす

よみ人しらす

白浪はふるさとなれやもみち葉の錦をきつゝ立かへるらむ

みつね

紅葉はのなかるゝ時は竹かはのふちの綠も色かはるらん

齋院、御屏風に

水のおもの深く淺くもみゆるかな紅葉の色や淵瀬なるらん

内裏御屏風に

清原元輔

月影のたなかみ川に淸けれは網代にひをのよるもみえけり

修理○内匠允葛原直行の女と作者部類に見えたり

藏人所にさふらひける人の、氷魚のつかひにまかりにけるとて、京に侍りなからおともし侍らさりけれは

修　　理

いかて猶網代のひをにことゝはん何によりて我をとはぬと

題しらす

よみ人しらす

祝子かいはふ社の紅葉はもしめをはこえてちるといふ物を

九月つこもりのひ、をとこ女、野にあそひて、もみちをみる

源　　順

いかなれは紅葉にもまた飽なくに秋はてぬとはけふをいふらん

十月ついたちの日、殿上のをのことも嵯峨野にまかりて侍るともによはれて

清　原　元　輔

秋もまた遠くもあらぬにいかて猶立返れともつけにやらまし

時雨を

よ　し　の　ふ

そまやまにたつ煙こそ神な月しくれをくたす雲となりけれ

十月滋賀の山こえしける人々

源　　順

名をきけは昔なからの山なれとしくるゝ比は色かはりけり

權中納言義懷○謙徳公伊尹の三男にて正二權中納言に任し寛和二年六月廿二日花山院御出家の日御供に入道して飯室に住めり

高岳相如○上に見えたり

冬、おやのさうにあひて侍りける、法師のもとに、つかはしける

み　つ　ね

もみち葉や袂なるらむ神な月しくるゝことに色のまされは

天暦御時、伊勢か家の集めしたりけれは、まいらすとて

中　　務

しくれつゝふりにし宿のことのはゝかき集むれとゝまらさりけり

御返し

天　暦　御　製

昔より名たかき宿のことの葉はこの本にこそおちとまりてへ

權中納言義懷、入道して後、むすめの、齋院にやしなひたまひけるかもとより、ひんかしの院に侍りけるあねのもとに、十月はかりにつかはしける

山かつの垣ほ邊をいかにそとしもかれ〳〵にとふ人もなし

三百六十首の中に

曾　禰　好　忠

み山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふるをのゝ炭やき

にほ鳥の氷のせきにとちられて玉もの宿をかれやしぬらん

高岳相如が家に、冬の夜の月おもしろう侍りける夜、まかりて

も　と　す　け

東宮の女蔵人左近〇小大君の事にて上に見えたり

右大臣恒佐〇前に見えたり

いさかくてをりあかしてん冬の月春の花にも劣らさりけり
祭のつかひにまかりいてける人々のもとより、すりはかま、すりにつかはしけるを、おそしとせめられけれは

東宮女蔵人左近

限りなくとくとはすれと足曳の山井の水は猶そこほれる
おみにあたりたる人のもとに、まかりたりけれは、女とも、さかつきに、ひかけをそへていたしたりけれは

よしのふ

有明の心ちこそすれさかつきにひかけもそひて出ぬと思へは
右大臣垣佐家、屏風に、臨時祭かきたる所に

つらゆき

足引の山井にすれるころもをは神に仕ふるしるしとそ思ふ
題しらす

よみ人しらす

千早振神のいかきに雪ふりて空よりかゝるゆふにそ有ける

つらゆき

獨ねはくるしき物とこりよとやたひなる夜しも雪のふるらん
雪を、しま〳〵のかたにつくりて、み侍りけるに、やう〳〵きえ侍りけれは

中務のみこ〇中務卿具平親王なり

藤原通頼〇右小辨雅材の子にて從五位下加賀守に任せらる

三統元夏〇式部大輔理平の子にて東宮學士に任せらる

中務のみこ具平

わたつみも雪けの水はまさりけりをちの島々みへす成行く
もとゆひにふりそふ雪の雫には枕の下に浪そたちける
東宮、御屏風に、冬野やく所

藤原通頼

さはらひやしたにもゆらん霜枯の野原のけふり春めきにけり
しはすのつこもりころに、身のうへをなけきて

つらゆき

霜枯にみえこし梅はさきにけり春には我身あはんとはすや
西なるとなりにすみて、かくちかとなりにありける事なといひおこせ侍りて

三統元夏

梅花匂ひのふかくみえつるは春のとなりのちかきなりけり
かへし

つらゆき

梅もみな春ちかしとてさく物をまつ時もなきわれや何なる
しはすのつこもりかたに、としの老いぬることをなけきて
むは玉のわかくろかみに年くれてかゝみの影にふれる白雪

九條右大臣〇師輔なり

いしなとり〇又いしなこともいひて石を手玉にとりてあそふたはふれなり

拾遺和歌集卷第十八

雜賀

延喜二年五月、中宮御屏風元日、　紀貫之

昨日よりをちをはしらす百歳の春の始めはけふにそありける

屏風に　伊勢

はる〱と雲井をさして行舟のゆく末遠く思ほゆるかな

九條右大臣五十賀屏風に、竹ある所に、花の木ちかくあり　もとすけ

花の色も常磐ならなんなよたけの長きよにおく露しかゝらは

ためあきらの朝臣、紀の守に侍りける時、ちひさき兒をいたきいて、これいのれ〱といひたる歌よめといひ侍りければ

よろつよをかそへん物はきの國の千いろの濱の眞砂なりけり

東宮の、いしなとりの石めしければ、三十一をつゝみて、ひとつに、ひともしをかきて、まいらせける

冷泉院の五六のみこ

左大臣〇道長なり

苔むさはひろひもかへんさゝれ石の數をみなとる齡いくよそ　よみ人しらす

賀屏風、人の家に、松のもとより泉いてたり　貫之

松のねにいつる泉の水なれはおなしき物をたえしとそ思ふ

冷泉院五六のみこ、はかまき侍りけるころ、いひおこせて侍りける　左大臣

岩の上の松にたとへん君々はよにまれらなる種そと思へは

ある人の產して侍りける七夜　元輔

松か枝のかよへる枝をとくらにてすたてらるへき鶴の雛かな

大武國章むまこの五日にわりこてうして、うたを繪にかゝせける

松の苔千歳をかけておいしけれ鶴のかひこのすともみるへく

題しらす　よみ人しらす

我のみやこもたるてへは高砂のをのへにたてる松もこもたり

延喜御時、齋院屏風四帖せんしによりて　つらゆき

爲平のみこ○村上天皇の皇子御母は中宮安子右大臣師輔公の女なり一品式部卿に任し染殿式部卿と號す
參議好古○大貳葛德の子後撰集に見えたり
かさりちまき○粽糸なとにて卷きかさりたる茅まきをいふ
右大臣○師輔にて天曆元年四月廿六日右大臣に任せらる
東三條院○圓融天皇の中宮詮子にて左大臣は御堂關白道長なり

幾世へし磯邊の松そむかしよりたちよる浪や數はしつらん
人のかうふりし侍りけるに　もとすけ
こ紫たなひく雲をしるへにてくらゐの山のみねをたつねん
天曆御時、內裏にて、爲平のみこ、はかまき侍りけるに　參議好古
もゝしきに千歲の事は多かれとけふの君はた珍らしきかな
五月五日、ちひさきかさりちまきを、山すけのこに入れて、ためまきの朝臣のむすめに、心さすとて　春宮大夫道綱母
心さしふかきみきはにかるこもはちとせのさ月いつか忘れん
天德四年、右大臣、五十、賀屏風に　清原元輔
千歲へん君しいまさはすへらきの天の下こそうしろやすけれ
東三條院の賀、左大臣のし侍りけるに、かんたちめかはらけとりて、うたよみ侍りけるに　右衛門督公任
君か世に今幾度かゝへしつゝ嬉しきことにあはんとすらん
右大臣家つくりあらためて、わたりはしめける比、ふみつくり、うたなと人々によませ侍りけるに、水樹多佳趣といふ題

清和の女七のみこ○醍醐天皇の皇子二品式部卿に任し李部王と稱す
重明のみこ
右大辨源致方朝臣
流俗○リウショクと濟みて讀むへし
かまと山○筑前國にあり

をすみそるむ末の心のみゆるかなみきはの松の影をうつせは　權中納言敦忠
ある人の賀し侍りけるに
ちとせふる霜の鶴をはおきなから久しき物は君にそ有ける
清和の女七のみこの、八十、賀、重明のみこの、し侍りける時の屏風に、竹に雪のふりかゝりたるかたある所に　つらゆき
白雪はふりかくせとも千世まてに竹のみとりは變らさりけり
こを、とみはたとつけて侍りけるに、はかまきすとて　もとすけ
世中にとなることはあらすともとみはたしてん命なかくは
中將に侍りける時、右大辨源致方朝臣のもとへ、八重紅梅をりてつかはすとて　右大將實資
流俗の色にはあらす梅花
むねかたの朝臣
珍重すへきものとこそみれ
筑紫へまかりける時に、かまと山のもとにやとりて侍りけ

良岑の義方○参議衆樹の子なり天慶八年左中將に任せらる

藤原忠君朝臣○系圖詳ならす官は右兵衛督と抄に見えたり

ひろはたの御息所○村上天皇の御息所なり上に見えたり

るに、みちつらに侍りける木に、ふるくかきつけて侍りける

春はもえ秋はこかるゝかまと山

霞もきりもけふりとそ見る　　もとすけ

春、よしみねのよしかたかむすめのもとに、つかはすとて

おもひたちぬるけふにもあるかな　　藤原忠君朝臣

かゝらてもありにし物を春かすみ　　むすめ

ひろはたのみやす所、内にまいりて、おそくわたらせ給ひけ

れは

くらすへしやは今までに君と奏し侍りけれは

とふやとそわれもまちつる春の日を

よひに、久しう、おほとのこもらて、おほせられける

さ夜ふけていまはねふたくなりにけり　　天暦御製

御前にさふらひて、奏しける

しけのゝないし○小貳命婦なり

良岑宗貞○僧正遍昭の俗名なり古今集に見えたり

まかき近くは云々○古今集には花の木も今はほりうゑし春たてはとて入りたる歌なり

修理大夫惟正○兼輔の子なり

しけのゝないし

夢にあふへき人やまつらむ

内にさふらふ人をちきりて侍りける夜おそくまうてきけ

るほとに、うしみつ、と時申しけるをきゝて、女のいひつかは

しける

人こゝろうしみつ今はたのましよ　　良岑宗貞

夢にみゆやとねそすきにける

題しらす　　平定文

引よせはたゝにはよらて春駒の綱ひきするそなはたつときけ

よみ人しらす

花の木は籬ちかくはうゑて見しうつらふ色に人ならひけり

夏は扇冬は火おけに身をなしてつれなき人によりもつかはや

戀するに佛になるといはませは我そ浄土のあるしならまし

灌佛のわらはを見侍りて

から衣たつよりおつる水ならてわか袖ぬらすものや何なる

修理大夫惟正か家に、方たかへにまかりたりけるに、いたし

藤原義孝○後少將さ號す上に見えたり

おなし少將○義孝なり

兵部卿致平のみこ○村上天皇の皇子母は左大臣在衡の女四品兵部卿に任す天元三年五月出家し給ひ法名を悟圓といひ三井寺明王院に住せらる故に明王院宮また法三宮さ稱す長久二年二月御年十一にて薨りぬ

たかうな○筍なり

て侍りける枕に、かきつけ侍りける　藤原義孝

つらからは人に語らむしきたへの枕かはしてひと夜ねにきと

おなし少將、かよひ侍りける所に、兵部卿致平のみこまかりて、少將のきみおはしたりといはせ侍りけるを、後に聞て、かのみこのもとにつかはしける

あやしくも我ぬれ衣をきたるかなみ笠の山を人にかられて

しのひたる人のもとにつかはしける　平公誠

隱れ簑隱れ笠をもえてしかなきたりと人にしられさるへく

とし月をへて、けさうし侍りける人の、つれなくのみ侍りけれは、いまはさらによにもあらし、といひて後久しくおとつれす侍りけれは、かのをとこのいもうとに、さき〳〵もかたらひて、ふみなとつかはしけれは、いひつかはしける　よみ人しらす

心ありてとふにはあらす世中に有や無やのきかまほしきそ

かたらひける人の、ひさしうおとせす侍りけれは、たかうなをつかはすとて

君とはて幾世へぬらん色かへぬ竹の古根のおいかはるまて

延喜十七年八月、宣旨によりてよみ侍りける　紀貫之

こぬ人をしたにまちつゝ久かたの月を哀れといはぬよそなき

柿本人丸

梓弓ひきみひかすみこすはこすこはこそ猶そよそにこそみめ

春日の使にまかりて、かへりて、すなはち女のもとにつかはしける　一條攝政

くれはとく行て語らむ逢事のとをちの里のすみうかりしも

あつまより、あるをとこのまかりのほりて、さき〳〵ものいひ侍りける女のもとに、まかりたりけるに、いかていそきのほりつるそ、なといひ侍りけれは　よみ人しらす

愚にもおもはましかは東路のふせやといひし野へにねなまし

女のもとにつかはしけるふみの、つまをひきやりて返ことをせさりけれは

跡もなき葛城山をふみゝれは我わたしこしかたはしかもし

人の、さうしかゝせ侍りけるおくに、かきつけ侍りける

入道攝政○東三條の大入道殿兼家なり
東三條○女御の里第即ち兼家の家なり二條の南町尻の西にあり
承香殿の女御○詮子なり上に見えたり
中納言惟仲○贈三位珍材の子なり

かきつくる心みえなる跡なれとみても忍はん人やあるとて

大納言朝光、下らうに侍りける時、女のもとにしのひてまかりて、あかつきに、かへらしといひけれは

　　春宮女藏人左近

いは橋のよるの契りもたえぬへしあくるわひしき葛城の神

入道攝政、まかりかよひける時、女のもとにつかはしけるふみを見侍りて

　　春宮大夫道綱母

疑はしほかに渡せる文みれはわれやとたえにならんとすらん

題しらす

　　よみ人しらす

いかてかは尋ねきつらむよもきふの人も通はぬ我やとの道

東三條にまかりいてゝ、雨のふりける日

　　承香殿女御

雨ならてもる人もなき我やとを淺茅か原とみるそかなしき

まかりかよふ所の、雨のふりけれは

　　大納言朝光

古はたかふる里そおほつかなやともる雨にとひてしらはや

中納言平惟仲、久しうありて、せうそこして侍りける返ことに、かゝせ侍りける

　　高階成忠女

藤原後生○上に見えたりこの女少納言と號するよし作者部類に見えたり
成房朝臣○入道中納言藤原義懷の子にて從四位下右近中將に任せらる長保四年出家す飯室は横河の麓なり
則忠朝臣女○則忠は抄に三位とあり

夢とのみ思ひなりにし世中をなに今さらにおとろかすらん

題しらす

　　源公忠朝臣

人もみぬ所にむかし君とわかせぬわさ〳〵をせしそ戀しき

左大將濟時か、あひしりて侍りける女、つくしにまかりくたりけるに、實方朝臣、うさの使にて、くたり侍りけるにつけて、とふらひにつかはしたりけれは

　　藤原後生女

けふまてはいきの松原いきたれと我身のうさに歎きてそふる

成房朝臣、法師にならむとて、飯室にまかりて、京の家に、まくらはこをとりにつかはしたりけれは、かきつけて侍りける

　　則忠朝臣女

いきたるかしぬるかいかに思ほえす身より外なる玉櫛笥かな

拾遺和歌集卷第十九

雑戀

題不知　柿本人丸

おとめ子か袖ふる山のみつかきの久しき世より思ひそめてき

稲荷にまうてあひて侍りける女の、ものいひかけ侍りけれと、いらへもし侍らさりけれは　平定文

いなり山社のかすを人とはゝつれなき人をみつとこたへむ

題しらす　柿本人丸

三島江の玉えの葦をしめしよりをのかとそ思ふ未からねと

大中臣能宣

あたなりとあたにはいかゝ定むらん人の心を人はしるやは

よみ人しらす

すくろくのいちはにたてるひとつまのあはてやみなむ物にやはあらぬ

濡衣をいかゝきさらむよの人はあめのしたにしすまむ限は

なかされ侍りける時　贈太政大臣　菅

つくまの祭○近江の筑摩明神の祭にてこの祭には男の數に鍋を土にて作りて奉るといへりうれへ町○拾芥抄に采女町土御門ノ北東洞院ノ西さあり
明日香采女○父祖つまひらかならす

あめの下のかるゝ人のなけれはやきてし濡衣ひるよしもなき

題しらす　よみ人しらす

いつくとも所さためぬ白雲のかゝらぬ山はあらしとそ思ふ

しら雲のかゝるそらことする人を山の麓によせてけるかな

いつしかもつくまの祭とくせなむつれなき人のなへの數みん

また少將に侍りける時、うねへまちのまへをまかりわたりけるに、あすかのうねへ、なかめいたして侍りけるに、つかはしける　小野宮太政大臣

人しれぬ人まちかほにみゆめるはたか頼めたる今夜なるらん

かへし　明日香采女

池水の底にあらてはねぬなはのくる人もなしまつ人もなし

中納言敦忠、兵衛佐に侍りける時に、しのひていひちきりて侍りけるその、よにきこえ侍りにけれは　右近

人しれす頼めしことは柏木のもりやしにけむよにふりにけり

やむことなき所にさふらひける女のもとに、秋ころしのひてかまらむ、とをとこのいひけれは　よみ人しらす

さたもり○平貞盛にや貞盛は常陸掾國香の子にて鎮守府將軍に任せられ平將軍といふ
くにもち○系圖傳つまひらかならす

秋萩の花もうゑおかぬ宿なれはしかたちよらむ所たになし

題しらす

こゆるきのいそきてきつるかひもなく又こそたてれ沖つ白浪

人のめし侍りけるをとこの人やに侍りて、めのとのもとにつかはしける

忍ひつゝよるこそきしか唐衣人や見むとはおもはさりしを

さたもりかすみ侍りける女に、くにもちかしのひてかよひ侍りけるほとに、またもりまうてきけれは、まとひて、ぬりこめにかくして、うしろのとよりにかし侍りける、つとめていひつかはしける　くにもち

宮作るひたの匠のてをのおとほと〳〵しかるめをもみしかな

をとこもちたる女を、せちにけさうし侍りて、あるをとこのつかはしける

ありとても幾世かはふる唐國の虎ふす野へに身をもなけてん

滋賀の山こえにて、女の山の井に、てあらひむすひてのむをみて　つらゆき

結ふてのしつくに濁る山の井のあかても人に別れぬるかな

三條の尚侍○父祖詳ならす
左大臣の北方○御堂の關白道長の室右大臣源雅信の女倫子にて鷹司殿と

三條の尚侍、方たかへにわたりて、かへるあしたに、しつくにゝこるはかりのうた、いまはえよましと侍りけれは、くるまにのらんとしけるほとに

家なからわかるゝ時は山の井の濁りしよりも侘しかりけり

題しらす　よみ人しらす

はしたかのとかへる山のしゐしはの葉かへはすとも君はかへせし

久しうまうてこさりけるをとこの、たまさかにきたりけれは、女のとみにもいてさりけれは

過ちのあるかなきかをしらぬ身は厭ふにゝたる心ちこそすれ

題しらす　在原業平朝臣

行水のあはならはこそきえかへり人の淵せを流れてもみめ

ともかくもいひ放たれよ池水の深さ淺さを誰かしるへき

そめ川を渡らむ人のいかてかは色になるてふことのなからむ

賀茂臨時祭の使にたちてのあしたに、かさしの花にさして、左大臣の北方のもとに、いひつかはしける　兵衛

號す

兵衛○參議兼茂の女なり

宣耀殿の女御○小一條攝政伊尹公の女芳子なり上に見えたり

千早振かもの川邊の藤なみはかけて忘るゝ時のなきかな

題しらす　よみ人しらす

世中はいかゝはせまししけ山のあをはの杉のしるしたになし

埋木はなか虫はむといふめれはくめちのはしは心してゆけ

世中はいさともいさや風のおとは秋に秋そふ心ちこそすれ

いはみに侍りける女の、まうてきたりけるに　人まろ

石見なる高間の山の木のまより我ふる袖をいも見けんかも

いつみのくにゝ侍りけるほとに、忠房朝臣、やまとよりおくる返し　つらゆき

沖つ浪たかしのはまの濱松の名にこそ君を待ちわたりつれ

かみいたくなり侍りけるあしたに、宣耀殿の女御のもとにつかはしける　天暦御製

君をのみ思ひやりつゝ神よりも心の空になりしよひかな

こしなる人の許につかはしける　つらゆき

思ひやる越のしら山しらねとも一夜も夢にこえぬ日そなき

題しらす　ひとまろ

仁和○光孝天皇の年號なり

山しなのこはたの里に馬はあれとかちよりそくる君を思へは

春日山雲井かくれてとをけれと家はおもはす君をこそ思へ

物へまかりけるみちに、はまつらにかひの侍りけるをみて　坂上郎女

我せこを戀るも苦しいとまあらは拾ひてゆかん戀わすれ貝

人のくにへまかりけるに、あまのしほたれ侍りけるを見て　惠慶法師

故鄕をこふる袂もかはかぬに又しほたるゝあまもありけり

仁和の御屛風に、あましほたるゝ所に鶴なく　大中臣頼基

潮たるゝ身は我のみと思へともよそなるたつもねをそ鳴なる

まうてくる事かたく侍りけるをとこの、たのめわたりけれは　よみ人しらす

徒然と思へはうきにおふるあしのはかなきよをはいかゝ頼まん

うきしま　したかふ

定めなき人の心にくらふれはたゝ浮しまは名のみなりけり

なか〱ひとりあらは、なと女のいひ侍りけれは

紀郎女〇萬葉集に紀少鹿女郎とあり鹿人大夫の女なり

太皇大后宮〇冷泉天皇の皇后昌子内親王にて朱雀天皇の皇女なり

一品のみこ〇資子内親王にて上に見えたり

獨のみ年へぬるにも劣らじを數ならぬ身のあるはあるかは

もとすけ

題しらす

風はやみ嶺のくす葉のともすれはおやかりやすき人の心か

よみ人しらす

紀郎女におくり侍りける

久かたの雨のふる日をたゝ獨山べにをれはむもれたりけり

中納言家持

をとこのまかりたえたりける女のもとに、雨ふる日、みなれて侍りけるすさの、かけの馬もとめにとてなんまうてきつるといひ侍りけれは

雨ふりて庭にたまれる濁水たかすまはかはかけのみゆへき

よみ人しらす

よとゝもに雨ふるやとの庭たつみすまぬにかけは見ゆるものかは

日蝕の時、太皇大后宮より、一品のみこの許につかはしける

逢ことのかくてやつゐにやみの夜の思ひもいてぬ人の爲には

題しらす

人まろ

いはしろの野中にたてる結ひ松心もとけすむかしおもへは

女のもとに、菊ををりてつかはしける

よみ人しらす

按察の御息所〇粟田左大臣在衡女さ作者部類に見えたり

けふかともあすともしらぬ白菊のしらす幾世をふへき我身そ

忠君宰相、まさのふかむすめにまかりかよひて、ほとなくてうとともを、はこひかへしけれは、ちんの枕をそへて侍りけるを、返しおこせたりけれは

涙川水まされはやしきたへの枕のうきてとまらさるらむ

延喜御時、按察のみやす所、久しくかむしにて、御めのとにつけてまゐらせける

世中を常なき物ときゝしかとつらき事こそひさしかりけれ

御返し

つらきをは常なき物と思ひつゝひさしきことを頼みやはせぬ

題しらす

伊勢

我こそはにくゝもあらめ我宿の花みにたにも君かきまさぬ

つゝむこと侍りける女の返事を、せすのみ侍りけれは、一條攝政、いはみかたといひつかはしたりけれは

よみ人しらす

石見潟なにかはつらきつらからはうらみかてらにきてもみよかし

一條攝政下﨟に侍りける時、承香殿女御に侍りける女に、し

本院侍従○筑前守棟梁の女なり後撰集に見えたり

ほくら○和名抄に寶倉をよみ一云神殿とあり

のひて物いひ侍りけるに、さらになとひそといひて侍りけれは、契りし事ありしかは、なといひつかはしたりけれは　本院侍従

それならぬ事もありしを忘れねといひしはかりを耳にとめけん

題しらす　よみ人しらす

みかりするこまのつまつく青つゝら君こそ我はほたし成けれ

君みれは結ふの神そ恨めしきつれなき人をなにつくりけん

延喜御時、中宮屏風に　貫之

いつれをかしるしと思はんみわの山有としあるは杉にそ有ける

いなりにまうてゝ、けさうはしめて侍りける女の、こと人にあひて侍りけれは　藤原長能

我といへはいなりの神もつらきかな人の為とは祈らさりしを

稲荷のほくらに、女のてにて、かきつけて侍りける　よみ人しらす

瀧の水かへりてすまは稲荷山なぬかのほれるしるしと思はん

元良のみこ、久しくまからさりける女のもとに、紅葉をおこせて侍りけれは

思ひいてゝとふにはあらす秋はつる色の限をみするなりけり

女のもとに、扇をつかはしたりけれは、いひつかはしける

ゆゝしとていむとも今はかひもあらしうきをは風につけてやみなん

題しらす　つらゆき

獨して世をしつくさは高砂の松のときはもかひなかりけり

三條右大臣の屏風に

玉もかる蜑のゆきかたさすさほの長くや人を恨みわたらん

年のをはりに、人まち侍りける人の、よみ侍りける

たのめつゝ別れし人をまつ程に年さへせめて恨めしきかな

むすめ○淸愼公實頼の女三人朱雀院の女御慶子弘徽殿女御さ今一人あり此中いつれならむ

大納言延光○三品中務卿代明親王の御にして源姓を賜はり正三位東宮大夫に至る枇杷大納言と號す

拾遺和歌集卷第二十

哀傷

むすめにまかりおくれて、又のとしの春、さくらの花さかりに、家の花を見て、いさゝかにおもひをのふといふ題をよみ侍りける

小野宮太政大臣

さくら花のとけかりけりなき人をこふる涙そまつはおちける

平兼盛

おも影に色のみのこるさくら花いく世の春をこひむとすらん

淸原元輔

花の色も宿もむかしのそれなからかはれる物は露にそ有ける

大中臣能宣

櫻花にほふ物からつゆけきはこのめも物をおもふなるへし

この事をきゝ侍りて後に

大納言延光

君まさはまつそをらまし櫻花風のたよりにきくそ悲しき

中納言敦忠、まかりかくれてのち、ひえのにしさかもとに侍り

天暦御門かくれ給ひ○康保四年五月廿五日なり

宮内卿兼家○栄花にもしかみえたり

女藏人兵庫○父祖詳ならす

ふくたり○粟田右大臣道兼の第一子にて永延元年八月夭亡せり

右兵衛佐宣方○六條左大臣源重信の子なり

右大臣○忠義公兼通の子顯光にて堀川左大臣とも廣幡殿ともいふ

ゐこゝの杜○伊豆國古々井の杜なり

藤原道信朝臣○法住寺太政大臣爲光の三郎權中將に任せらる

女五のみこ○盛子

ける山さとに、人々まかりて、花見侍りけるに

一條攝政

古へはちるをや人のをしみけむ花こそいまはむかしこふらし

天暦御門、かくれ給ひて又のとし、五月五日に、宮内卿かねみちかもとに、つかはしける

女藏人兵庫

さ月きてなかめ勝れはあやめ草思ひたえにしねこそなかるれ

ふくたりといひ侍りけるこの、やり水にさうふをうゑおきて、なくなり侍りにける後のとし、おひいてゝ侍りけるを見て

粟田右大臣

忍へとやあやめもしらぬ心にも長からぬ世のうきにうゑけん

右兵衛佐のふかた、まかりかくれにけるに、おやのもとにつかはしける

右大臣

こゝにたに徒然となく郭公ましてこゝゐのもりはいかにそ

朝かほの花を、人の許につかはすとて

藤原道信朝臣

朝顔を何はかなしとおもひけむ人をも花はさこそみるらめ

夏はゝそのもみちの、ちりのこりたりけるにつけて、女五の

内親王にや左大臣顯光に配し承香殿女御元子を生み給へり

中宮〇九條右大臣師輔の女安子なり應和四年四月廿九日失せ給ひぬ

朱雀院の御四十九日〇天暦六年八月十五日朱雀院崩御あり

みこのもとに 天暦御製

時ならてはゝその紅葉散にけりいかにこのもと淋しかるらむ

妻のなくなりて侍りける比秋かせの夜さむに吹き侍りけれは 大貮國章

おもひきや秋のよかせのさむけきに妹なき床に獨ねんとは

中宮かくれ給ひてのとしの秋御前の前栽に露のおきたるを風の吹なひかしたるを御覽して 天暦御製

秋風になひく草葉の露よりもきえにし人をなにゝたとへん

妻にまかりおくれて又のとしの秋月を見侍りて 人まろ

こそみてし秋の月夜はてらせともあひみし妹はいや遠さかる

朱雀院の御四十九日の法事にかの院の池のおもに霧のたちわたりて侍りけるをみて 權中納言敦忠

君なくてたつ朝きりは藤ころも池さへきるそ悲しかりける

さるさはの池にうねへの身なけたるを見て ひとまろ

わきもこかねくたれかみをさる澤の池の玉もとみるそ悲しき

恒德公の服〇法住寺太政大官爲光正暦三年六月薨り恒德公と諡す道信は爲光の三耶なり服さは喪服を服するをいふとしのふ及ひ其母〇傳詳ならす

大江爲基〇この妻におくれて發心し法名を寂昭といふ三河國にての事なりといへり

謙德公の北方〇三品式部卿代明親王

題しらす よみ人しらす

心にもあらぬうき世にすみそめの衣の袖のぬれぬ日そなき

服ぬき侍るとて

藤衣はらへてすつるなみた川きしにもまさる水そなかるゝ

ふち衣はつるゝいとは君こふる涙の玉の緒とやなるらむ

恒德公の服ぬき侍るとて 藤原道信朝臣

限あれはけふぬきすてつ藤衣はてなき物はなみたなりけり

としのふかなかされける時、なかさるゝ人は重服をきてまかるとき丶て、母かもとより、きぬにむすひつけて侍りける

人なしゝむねのちふさをほむらにてやくすみ染の衣きよきみ

おもふめにをくれてなけく比よみ侍りける 大江爲基

藤衣あひみるへしとおもひせはまつにかゝりて慰めてまし

年ふれといかなる人かとこふりてあひ思ふ人に別れさるらん

題しらす よみ人しらす

すみ染のころもの袖は雲なれや涙の雨のたえすふるらむ

謙德公の北方ふたり子ともなくなりて後

の御女恵子女王なり
ふたり子○藏人頭正五位下左近少將擧賢年廿五從五位下右近少將春宮權亮義孝年廿天延二年九月十六日同日に卒りぬ
藤原爲頼○中納言兼輔の孫刑部少輔雅正の子なり

あまといへといかなるあまの身なれはかよにゝぬしほゝたれわたるらん

昔見侍りし人々おほくなくなりたることをなけくをみ侍りて

藤原爲頼

世の中にあらましかはと思ふ人なきかおほくもなりにける哉

返し

右衛門督公任

常ならぬよはうき身こそ悲しけれその數にたにいたらしと思へは

おやにおくれて侍りけるころをとこのとひ侍らさりけれは

伊勢

なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは涙なりけり

題しらす

よみ人しらす

うつくしと思ひし妹を夢にみておきてさくるになきそ悲しき

順か子なくなりて侍けるころとひにつかはしける

清原元輔

思ひやるこゝろの杜のしつくにはよそなる人の袖もぬれけり

子におくれてよみ侍りける

平兼盛

なよ竹のわかこのよをはしらすして生したてつと思ひける哉

むすめの女御○花山院の女御子なり
共政朝臣の妻○女御の乳母なさなりしにや
こえてきつらむ○一本にこえてやきつるとあり
中納言兼輔め

大納言朝光かむすめの女御まかりかくれにける事をきゝ侍りてつくしよりとひにおこせて侍りけるころ子馬助ちかしけかなくなりて侍りけれは

藤原共政朝臣妻

我のみやこのよはうきと思へとも君もなけくときくそ悲しき

かへし

憂世にはある身もうしと歎きつゝ涙のみこそふる心ちすれ

うみたてまつりたりけるみこのなくなりて又の年郭公をきゝて

いせ

しての山こえてきつらむ時鳥こひしき人のうへかたらなむ

いせかもとにこの事をとひにつかはすとて

平定文

思ふよりいふは愚に成ぬれはたとへていはんことの葉そなき

中納言兼輔めなくなりて侍りけるとしのしはすにつらゆきまかりて物いひ侍りけるついてに

つらゆき

こふるまに年のくれなはなき人の別れやいとゝ遠くなりなん

吉備津釆女○吉備國より貢れる釆女にや歌によれは志賀にありしなるへし
まかりにし○萬葉集には罷道之さありゆく道のと訓むへし

こめなくなりて後に子もなくなりにける人をとひにつかはしたりけれは　よみ人しらす

いかにせん忍ふの草もつみ佗ぬ形みと見えしこたになけれは

子ふたり侍ける人のひとりは春まかりかくれいまひとりは秋なくなりにけるを人のとふらひて侍りけれは

春は花秋はもみちとちりはてゝ立かへるへきこのもともなし

むすめにをくれ侍りて　中務

忘られて暫しまとろむほとりかないつかは君を夢ならてみん

むまこにおくれはへりて

うきなからきえせぬ物は身なりけり羨ましきは水のあわ哉

題しらす　よみ人しらす

世中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならむとすらん

きひつのうねへなくなりて後よみ侍りける　人まろ

さゝ浪やしかのてこらかまかりにし川せみ道をみれは悲しも

さぬきのさみねのしまにしていはやのなかにてなくなりたる人を見て

なれる君○萬葉集にはなせる君とあり
友則○身まかれる年詳ならす
いも山の云々○萬葉集にはかも山のいはれしけけるさあり
家の集○貫之集十巻卅六人集の中にあり

おきつ浪よるあら磯を敷たへのまくらとまきてなれる君かも

紀友則身まかりにけるによめる　つらゆき

あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

あひしれる人のうせたる所にてよめる

夢とこそいふへかりけれ世中はうつゝある物と思ひけるかな

めのしに侍りて後かなしひてよめる　人まろ

家にいきて我やをみれは玉笹のほかにおきたる妹かこまくら

まきもくの山へひゝきて行水のみなわのことくよをはわかみる

いはみに侍りてなくなり侍りぬへき時にのそみて

いも山の岩ねにおける我をかもしらすていもかまちつゝあらん

世中心ほそくおほえてつねならぬ心ち侍りけれは公忠朝臣のもとによみてつかはしけるこのあひたやまひおもくなりにけり　紀貫之

手に掬ふ水に宿れる月影のあるかなきかのよにこそ有けれ

このうたよみ侍りてほとなくなくなりにけるとなむ家の集にかきて侍る

朱雀院〇天暦六年八月十五日崩御あり太皇大后宮は昌子内親王なり上に見えたり御製は朱雀天皇なり
鳥部山〇山城國愛宕郡にあり
のらやふ〇野ら藪なり
すけきよ〇左近番長と抄に見えたり
沙彌満誓〇俗名は笠朝臣麿といひ従四位上に叙せらる出家して筑紫観世音寺の別當となる其歌あまた萬葉集にあり
忠蓮〇この集の作者にて上に見えたり

朱雀院うせさせ給けるほとちかくなりて太皇大后宮おさなくおはしましけるを見たてまつらせ給て

御製

呉竹のわかよはことに成ぬともねはたえせすもなかるへき哉

題しらす　よみ人しらす

鳥部山たにゝけふりのもえたゝはゝかなくみえし我としらなむ

やまひして人おほくなくなりし年なき人を野らやふなとにおきて侍るを見て　すけきよ

みな人の命をつゆにたとふるは草むらことにおけはなりけり

世のはかなき事をいひてよみ侍りける　したかふ

草枕人はたれとかいひおきし露のすみかは野やまとそ見る

題しらす　沙彌満誓

よのなかを何にたとへん朝ほらけこきゆく船の跡のしら浪

忠蓮南山の房の衛に死人を法師の見侍りてなきたるかたをかきたるをみて　源相方朝臣

契あれは屍なれともあひぬるをわれをは誰かとはんとすらん

源相方朝臣〇左大臣信の子にて權右中辨に任せらる
慶滋保胤〇近江掾忠行の子にて大内記に任せられ後出家して法名を尊敬といへり
成信〇従四位上右近中将重家は従四

題しらす　読人しらす

やま寺の入相の鐘の聲ことにけふもくれぬと聞くそかなしき

法師にならむとていひける時に家にかきつけて侍りける　慶滋保胤 大内記

憂世をは背かはけふも背きなむあすも有りとは頼むへき身は

題しらす　よみ人しらす

世中にうしの車のなかりせはおもひの家をいかていてまし

法師にならむとしけるころ雪のふりけれはたゝう紙にかきおきて侍りける　藤原高光

世中にふるそはかなき白雪のかつはきえぬるものとしる〳〵

服に侍りけるころあひしりて侍りける女のあまになりぬときゝてつかはしける　よしのふ

墨染の色はわれのみと思しをうきよをそむく人もありとか（けり）

返し　よみ人しらす

墨染の衣とみれはよそなからもろともにきる色にそ有ける

成信重家ら出家し侍りけるころ左大辨行成かもとにいひ